

鞍馬天狗だあと

言えなかつたぼく

奥村清志

はじめに

本書は、父と母の青年期を綴った『荒野を行く彼ら』の続編である。

下駄工場から東一万町に引っ越したぼくに、まっ先に襲いかかったのは、孤独と劣等感だった。二歳の記憶にすでにそれは焼きついている。それを克服し、立ち直っていく過程が、本書のテーマだと言える。

成長の過程には実にさまざまなお出逢いがあった。別れもあった。その大方は偶然である。偶然なしに、ぼくの人生は成り立たなかった。こうしたお出逢いと別れをたどっていくのも、本書のテーマである。

人生は無情な一方通行。ただトコトコと歩いていくうちに、いつしか七十歳の峠を越えていた。誰もが来る峠だが、来てみると、何ということはない。三十歳、四十歳、五十歳を、そのまままっすぐ引き延ばしたところに、七十歳はあった。破綻も、変化も、断絶もありはしなかった。

人はどこまで歩んでも、内実は少しも変わらないものだ。かつての自分が、多少の衰えと頭の硬化を伴って、そのままあり続けているだけだ。

笑うときには笑い、泣くときには泣く。嫉妬もするし、怒りもする。人としての根本は何も変わっていない。

これを知ったのは大いなる発見だった。当たり前だという人もいようが、ぼくににとっては信じられない事実だった。思考様式の、あるいは気分の、何か決定的成長と変化があるはずと、期待もし、信じてもいたのだから。

孔子の偉さをつくづく思う。

「十有五にして学に志す、三十にして立つ、四十にして惑わず、五十にして天命を知る、六十にして耳順う、七十にして心の欲する所に従えども、矩を踰えず」

なんといい達観だろう。いまだにぼくは惑いつづけている。

これでよいのだ。これがぼくなのだ。人生をこの地点まで歩んできて、それがわかった。

賢くならなくてよい。達観しなくてよい。悟らなくてよい。

人の命は、絶えざる呼吸と血流によって支えられている。おぎゃーと生まれた瞬間から、一瞬たりとも呼吸と血流が途絶えることはない。神秘の自動機械であるかのように、寝ても覚めても、呼吸と血流は維持され続けている。

思えばこれほど不思議なものはない。何十億年もの進化がもたらした高度な生命維持装置に支えられ、ぼくは生きてきた。命の危機にかかわる難病を二つも抱える身となりながら生きてきた。生かされてきた。

この命にありがとうと言いたい。ぼくを包むありとあらゆるものにありがとう。

中でも健康に常々気を配ってくれている妻にありがとう。感謝だ。

第一章 幼年期

■そのころ世の中は

ぼくが生まれた昭和二十三年とはどういう年だったのだろうか。当時の新聞をめくって、時代の空気を味わってみる。

まず目につくのは、占領の落とし子である混血児の問題だ。

昭和二十二年二月、三菱財閥岩崎久弥の長女沢田美喜は、東海道線を夜行列車で京都に向かっていった。列車が関ヶ原あたりに近づいたとき、網棚の上から風呂敷包みがぼとんと膝に落ちてきた。気に留めることもなく、彼女はそれを元の網棚に戻したのだが、ちょうどヤミ物資の取り締まりで車内を巡回していた警察官に見とがめられ、「開ける」と命令された。

自分の物ではないのだがと思いつつも、言われるままに網棚から下ろし、包みを解くと、なんと出てきたのは赤ん坊の死体だった。黒人との混血であることが、ひと目でわかった。

彼女がその母で、処置に困って捨てに行くところだと疑われたのは当然だった。疑いはまもなく晴れたのであったが、そのとき彼女に神の声が聞こえたという。

「おまえがいつときでもこの子の母とされたのなら、なぜ日本中のこうした子供たちのために、その母になってやれないのか」

この神の啓示が彼女の生涯を決定づけた。

当時、空襲で家をなくし、肉親を失い、生きるための最後の手段として、米兵相手に身を売る女性が、全国いたるところにいた。その結果、生まれぬ子が数多く生まれた。

沢田美喜はそうした子たちの母になろうと、昭和二十三年二月、エリザベス・サンダース・ホームという混血孤児の救済施設を作った。一期生は六名。駅のホームに捨てられていた子もいた。

沢田は生涯を通して二千名を超える孤児を育て上げ、子らが成長すると、養子縁組に奔走した。時代が求めたことではあったが、その生き方は、たやすいことではない。

住宅難も当時の大きな問題だった。昭和二十三年二月十七日、「増える宿なし役人」と題して次のような記事がある。

ともかく家が見つかるまでと各官庁を仮の宿としている官吏の群が、ますます深刻化する住宅難にすっかり根を下ろし、電気、ガス、水道も国費で使い放題、交通地獄も心配いらぬとあって、その数は増える一方。

逓信省の例で見ると、省内居住許可証を与えられた省内居住者は一二人、無届けは四十人以上。色わけは戦災者が一番多く、疎開やもめ、復員者、海外引揚者がこれに次ぐ。みんな近くの配給所で配給を受け、書類を入れる四坪ばかりの安全庫の中や机の上で寝起きし、電熱器で炊事している。

毎日省内の風呂にただで入れる上に、朝寝までできるといっわけで、独身者の中にはここを安住の地と決め込んでいる者もかなりいる。

厚生課の調べによれば、家がなく郵便局や役所の机の上に住んでいる従業員は全国に約四万人いるという。

空襲で家を焼かれた一般庶民は、駅の通路やバラック小屋を仮の住まいとし、窮屈なその日暮ら

しを強いられていた。そういう中で、この信じがたいお役人感覚。昔も今も変わらないものらしい。当時、食料や日用品は、すべて配給制だった。それが必要量を満たしていないことが問題だった。昭和二十三年七月二十八日には、次のような記事がある。

八月分の主食として輸入食糧三二万六七八トンの放出が許可された。このため、八月の主食配給は大消費地では米で六、七日分、砂糖約三日分となり、残り約二十日分は輸入穀類（小麦粉、大麦、トウモロコシ等）と国内産の麦、ジャガイモでまかなうことになる。

農林省は、これで八月は遅配なく満配だと胸を張っている。三日間は砂糖だけで生きよと言うのだろうか。主食中の米の比率は、新米が出回り始める十一月ですら六〇%、月平均十八日分ほどしかなかった。それに加えて、

「新米が出て増配になるのは嬉しいが、米の値段が大幅に上がる」

というおまけつき。新米の値段は終戦直後の百倍になっていた。対する国の保障は何もなく、米はあるけど金がないため米を食えないというのが、庶民の実情だった。

米にかぎらない。インフレによる物価高は、猛烈な勢いで庶民の暮らしを直撃していた。二月十一日には国鉄の旅客運賃が二倍に値上がり。七月一日には新聞代、放送聴取料が二倍に。七月十日には郵便、電信、電話も二倍に。猛然たる値上げラッシュの高波だった。

四万人の郵便局員を役所に住まわせ、電気、ガス、水道をただで使わせているツケが郵便料金の値上げに跳ね返っているとしたら、これはもう何をか況んやだ。

空襲で親や家をなくした戦災孤児、浮浪児の問題も大きかった。

二月十七日に『鐘の鳴る丘』劇外劇」と題する、次のような記事がある。

浮浪児生活から生まれ変わって舞台に立った少年俳優と、彼が浮浪児時代の友達で今は級長の少年が、十六日、丸の内の日劇小劇場の楽屋で二年ぶりの対面をした。

ラジオでおなじみの菊田一夫作『鐘の鳴る丘』に出演のM君と私立治生学園のK君だ。二人は昭和二一年、上野の地下道で寝泊まりしているうちに知り合い、同年二月板橋の大山養育院に送られ三ヶ月ばかり仲間づきあいをしていたが、お父さんにしかられて家を飛び出したM君は同年一月誤解も解けて両親の元に帰り、K君は一五人の仲間とともに治生学園に引き取られ、今は多摩小学校六年生の級長さん。

K君はかつてのアニキが芝居に出ているのを新聞で知り、会いたくてたまらず先生にねだって、この日一六人の仲間と一緒に『鐘の鳴る丘』を見にやってきた。芝居の楽屋へみんなで押しかけたが、K君もM君もピヨコンとお辞儀はしたものの、すっかり照れて何も言えなかった一幕。

「鐘の鳴る丘」は、幼いころ、ラジオで聞いていた。戦災孤児たちの感動的な話だった。調べると、ラジオ放送は昭和二十二年七月から昭和二十五年十二月までとのこと。ぼくが生まれる半年前から二歳十ヶ月になるまでだ。

聞いていたのが東一万町の家だったのは明瞭な記憶だから、引越した後だ。となれば、長くても二歳二、三ヶ月からの半年ほどか。兄と一緒にラジオの前に座って聞いていた。ストーリーが理解できていたとは思えない。にもかかわらず、テーマソングだけはしっかり頭に焼きついているから、これが不思議だ。

緑の丘の赤い屋根

とんがり帽子の時計台

鐘が鳴りますキンコンカン

メエメエ子ヤギも鳴いてます

風がそよそよ丘の家

黄色いお窓はおいらの家よ

女の子のかわいい声が、今まさにラジオの前に座って聞いているかのように、そのままそっくりよみがえってくる。「時計台」を、「とけえ、だい」と「え」を強調して歌っていたことまでよみがえってくる。

七十歳を過ぎると、新しい歌など、何度聞いて覚えられない。だが、幼いころ聞いた歌は、歌詞の意味などわからなくても、ハンコで押したように、そっくりそのまま焼きついてしまう。不思議なものだ。

四月十七日の記事によれば、戦災孤児は全国に十二万人ほどいて、ほとんどは施設に収容されたが、まだ三千人ほどの、いわゆる浮浪児がいるという。

こうした孤児、浮浪児の存在を背景に、四月一日、児童福祉法が施行された。「児童が心身ともに健やかに生まれ育成される権利」、「児童を養育する公的責任」がうたわれている。これを徹底するために、厚生省保育課長が、施行に臨んで次のような講話をした。

「子供を扱う大人が子供の世界を理解することが必要なんです。今までみたいに浮浪児を捕まえて、トラックで収容施設へ送り込めば仕事が終わったということでは、せっかくの法律が実らない。浮浪児が一番求めているのは、温かい愛情なんです」

当時、脱走に手を焼き、鉄格子をはめた監禁室に子供を閉じ込める施設まであった。監禁室は十畳で便所つき。十五人くらいが同居。鉄窓と鍵とで、脱走は不可能。おとなしくなると軟禁室に移し、作業に熱心な者だけは開放室に入れる。この間平均二ヶ月はかかったという。

まるで囚人扱いだ。「温かい愛情」なんて、かけらもない。こういう現実が保育課長の言葉の裏にはあった。

それにしても、保育課長の言い草のなんと上から目線であることか。「送り込めば仕事が終わり」は、そのまま保育課長にもはね返ってくる。「正論を語っておけば、それで仕事は終わり」、そんな印象さえ感じられるではないか。自ら汗を流す発想がない。

おれの仕事は、語ることに、命じること、通達を出すこと、それだけだ。自ら現場に出かけて働くことではない。これが昔も今も変わらない、高級官僚の本質のようだ。

こういう人ほど、さらに上に立つ人にはこびへつらい、小さくなる。それが出世への近道だから。現場に出かけて汗をかいても出世にはつながらない。それを彼らはよく知っている。

昭和二十三年一月六日、アメリカの占領政策について、ロイヤル陸軍長官が次のような演説を行った。これは占領政策の転換点をなした重要な演説とされている。

日本の広範な非軍事化と、日本を自立しうる国家たらしめるといふ二つの目的の間には避けがたい対立が表れてきた。

農業に関しては両目的は背反しない。封建的土地所有の解体は農村における軍国主義的勢力を終息せしめ、同時に耕地のより広範囲な人々への分配は、数を増やした土地所有者の生産意欲を刺激し、農業生産全体の増加をもたらすものである。

工業の場合には事情は異なる。人造ゴム、造船、化学、非鉄金属などの諸工業を破壊すれば、戦争潜在力を破壊することは事実だが、同時に平和の潜在力にも悪影響を与える。

財閥の解体それ自体は何ら重大な経済問題ではないかもしれないが、産業の集中排除を極端に行えば、戦争遂行能力は破壊されるが、同時に工業の能率を下げ、工業生産全体の低下と輸出力の低下を招いて、結局日本の経済的自立を遅延させる恐れがある。

アメリカの占領政策の柱は、農地改革と財閥解体だった。

農地改革は徹底されたが、財閥解体は不完全だった。その不完全を容認した上で、大規模工業の力をもって日本を防共の砦にしようと、歴史的転機をなしたのがこの演説であった。新聞記事には引用されていないが、演説の最後で、ロイヤル長官は

「日本を自由主義陣営の側に立たせ、極東で起こりうる全体主義的な戦争の脅威に対する抑止力とする」

と明言している。

以降、占領政策は、日本を非武装化することから、中国、ソ連等に対する防衛ライン（防共ライン）化することへと、ねらいが変わっていった。明確な占領政策の転換であった。

これはサンフランシスコ講和条約締結後も、現在にいたるまで、日本の戦後の基本的立ち位置として維持されている。

財閥解体の不完全さとは裏腹に、農地改革は徹底された。それを示す二月四日の記事がある。

GHQが日本政府に手渡した「農地改革完遂に関する覚え書き」は、次のような文面だ。

自作農創設特別措置法および農地調整法は、封建的土地所有制度を廃止し、公平かつ民主的基盤による土地の再配分を妨げる経済的障害を排除する目的で制定された。しかるにこれらの法律が制定されてから一部の反動的勢力は農地改革計画の完遂を妨げるための策動を行うにいたった。

土地改革計画の実施は日本に自由で民主的な社会を創設するための先決要件であり、日本国民ならびに連合軍の日本占領の最も重要な目標の一つとなっている。したがってその厳正果断な実施は不可欠の至上命令である。

以上の理由から次の指令を発する。

(一) 農林省は土地改革計画の目的をさまたげようと圧迫を加える組織的反動勢力の不当な干渉を顧慮せず、現行の手続きによって土地改革の適用を受ける一切の土地を即時買収する旨の訓令を発すべきこと。

(二) 日本政府は贈賄、脅迫、その他の不法行為により土地改革の完遂を阻害する一切の者に即時弾圧を加えること。

あきれるばかりの手厳しさと仰々しさだ。実際、農地改革は徹底して押し進められた。

この文面ではよく知った新しい事実は、「農地改革イコール農地の取り上げ」ではなかったこと。国が地主から（強制的に）農地を買いとったのだ。それを小作に売り渡した。これは多くの先入観をくつがえす事実であった。

なぜこんなことを書くかと言えば、戦前、妻の祖父は朝鮮総督府に勤めていて、妻の実家は長久不在地主になっていた。敗戦後一年ばかりして故郷に戻ったが、農地改革によって、土地はほとんどすべて取り上げられ、小作人や周辺の親族たちの手に渡ってしまったと、妻の母親から聞かされ

ていたからである。

「あそこもそうなんよ。ここもそう」

と、今は他人のものになってしまった土地を次々と指さしながら、義母が怨みがましく教えてくれたことがある。

そのとき聞いた「取り上げられる」を、ぼくはてっきりタダで取られたものとはばかり思っていた。しかし、GHQの覚え書きによれば、取られたのではなく、買い取られたのだ。地主による組織的抵抗が起こったのも事実だから、条件は当然、地主に不利なものではあつたらう。だが少なくとも没収されたのではない。対価は支払われたのだ。

ところが、さらに調べてみると、当時の急速なインフレの進行によって、政府による買い取り価格も、小作人への売り渡し価格も、事実上はタダ同然になっていた。「取り上げられた」は、まんざら誇張とも言えない真実の感覚ではあつたのだらう。

ぼくが生まれた昭和二十三年とは、このような時代であつた。

■光と闇のはざままで

東一万町に引越してまだ日が浅いころ、散歩している父の腕の中で、ふと眠りから覚めた。日はすっかり落ちて、闇があたりを包んでいた。

父は町の様子を探りがてら、ぼくの手を引き、散歩に出かけたのだらう。途中、眠くなったぼくを腕に抱き、農事試験場あたりまで足を伸ばした後、細い小道を縫うようにして家の近くまで戻ってきたのだらう。

ふと目覚めたのは、電車通りの一筋北、わが家の前の道に差しかけたときだった。

あたりはすっかり闇だった。

闇に目が慣れてくると、建物の壁に丸太がびっしり立てかけられているのが見えてきた。大工が足場に使う丸太だった。

暗い闇の中におびただしい丸太が並び、道はなおも先へと続いていった。ぼくはそのとき、闇や無の怖さよりも、どこまでも広がる底知れなさの怖さのようなものを感じたように思う。

いや本当を言うと、怖さではなく、やわらかく抱きとめてくれる何物かを闇の芯に感じたようでもあつた。

家に帰り着くと、父は土間からじかに、明かりのついた畳の上にぼくを下ろした。

「えっ、こんな冷たいところに？」

背中に畳の冷たさを感じた瞬間、そう思った。その感触を今も生々しく思い出すことができる。だが、冷たさも束の間だった。すぐさま、待ちかまえていた母に抱き上げられた。そのまま布団に寝かさされ、闇の余韻とともに眠りに落ちた。

何のことはないこんな生活のこまが、さも大事件であるかのように、消えない記憶となって焼きついたのはなぜだろう。きつとなんらかのわけが、必然のわけがあつたのだと思う。ぼくの人格形成に決定的な役割を果たしたであろう匠のノミが、その瞬間、打ち下ろされた気がするのである。

父の腕の中でふと目覚めたとき、いきなり眼前に立ち現れた深い闇の世界。その数刻後、明るい光の下に帰帰。そして、眠りに落ちる前に味わった闇の余韻。

あるいは、ふと目覚めたときに味わった腕の中のあたたかさ。畳に下ろされたときの冷やっとし

た感触。すぐさま布団に寝かされ、あたたかさに回帰。
ぼくは波間を漂う藻屑のように、光と闇との、あるいは、暖かさと冷たさとのはざまを揺れ動くうち、大げさに言うなら、この世界には対立しながらも調和する二つの事象があることを、幼い心で直観したのだと思う。

これら二つは、善と悪、美と醜、真と偽のように、単純に対立するものではなくて、互いが互いを補い合って一つをなす、同一物の表裏にすぎないことを、そのときぼくの直感を感じとったのだと思う。難しい概念にはよらず、幼い心の直感として、何かそういうものを感じとったのだと思う。光がなければ闇はない。闇がなければ光はない。あるいは暖がなければ冷はなく、冷がなければ暖はない。絶対的な暖とか、絶対的な冷などあるはずはなく、両者はいつでも互いが補い合って生み出される相対感覚、同一物の裏表なのである。

思考以前のこの無意識的直覚が、そのときぼくの人格に確かに根源的に植えつけられた。その後、七十年を生きてきた今にいたっても、この直覚はぼくにとって根源的だ。人を敵と味方に分けられない思考となって、今も息づいている。

■カタカタ押し

自分とは無関係の「赤の他人」というものに、幼いぼくが初めて直面したのも、東一万町に引越してほどない、あたたかな日であった。

わが家の東の横手は路地になっていて、奥には家が五、六軒連なっていた。この路地、一見すると袋小路だが、突き当たりには、子供にならすり抜けられる細い抜け道があって、これはぼくらにとって、裏通りへのれっきとしたバイパスだった。

この路地で、ぼくらはおよそ考えられるあらゆる遊びをした。

十五歳でこの地を去り、その後、東一万町は、大規模な区画整理によってすっかり様変わりしてしまったが、まだかつての姿が残っていたころ、懐かしさに誘われて、昔のわが家の前を通ってみたことがある。路地にも足を踏み入れてみた。二十歳を少しすぎたころだった。

路地に入って、愕然とした。これがあの路地？ 本当に？

記憶にあった路地との何というちがいが。とにかく狭かった。

子供のころ、狭さを狭さとも感じず、そこはぼくらの夢の空間だった。

鬼ごっこ、押しくらまんじゅう、キャッチボール、三角ベース、コマ回し、チャンバラごっこ、すもう、手作りミコシの練り歩き、ビー玉転がし、馬跳び、縄跳び、地面にSの字を書いて遊ぶSケン、……、なんでもできた。

二十歳になったぼくの目に、そこは悲しいまでに狭かった。しかも、遊ぶ子がいなかった。誰も遊ばないから雑草に被われ、砂に埋もれて見捨てられてしまった古いシルクロードのようなありさまだった。

この狭い空間に、ぼくら団塊の世代は、たむろし、ひしめき合っていたというわけか。そこに限りない夢と喜びを見出して、毎日無邪気に遊んでいたというわけか。

二歳のその日、ぼくは路地の入り口に一人ぼつんと立っていた。家の前の軒下を、あたたかな春の日差しを浴びて歩いてきたのだ。距離はせいぜい十メートル。初めての大冒険だった。

入り口から路地を覗きこむぼくの背後には、老婆がしゃがみこんでいた。路地で遊んでいる幼子

の守りをしていたのだ。老婆のそばに若い女性。幼子の母親というよりは、買い物帰りの近所の人。そういう印象が幼心にも感じられた。

女性と世間話に興じている老婆は、ときおり、ふと目が覚めたように幼子に声をかけるのだった。

「そう、よしよし、こっちにおいで」

「じょうず、じょうず、こんどはあっちよ」

幼子はカタカタと音のする手押し車を押していた。押し進むと、ウサギやイヌやサルやウマが順々に跳ね上がっては、カタツ、カタツと音を立てて落下する。

あざやかに彩色された動物が跳ね動く様を、ぼくはじっと見つめていた。心の底には、やってみたいなという思いがかすかにあった。だけど、それを打ち消すように、

「あれはよその子のもの。ぼくが遊ばせてもらえるものではない」

という一種の疎外感、劣等感、仲間はずれの感覚とでもいったものをとっさに感じて、ただじっと見つめているしかなかった。

老婆は、ぼくがいることに、まるで気づいていない様子だった。気づいていないと言うよりも、無視していたと言うべきか。

「どお、ボクもやってみる？」

このひと言が老婆の口から漏れていたならば、心は晴れ晴れとして、仲間に入れてもらえた嬉しさに打ち震えたことだろう。だがそれは永遠にありそうになく、彼らとは、交わることのない平行線、すれ違いの世界のままだった。

もの欲しげな目をして見つめながら、自分はこういう立派な遊び道具では遊べない子なんだ、人より一段劣った子なんだという、劣等意識、疎外意識が、心の深いところに芽生えていった。自分でそれがありわかった。劣等意識、疎外意識を自覚した人生最初の瞬間だった。

幼いころ、ぼくは知恵遅れではないかと、まわりの大人たちから心配されていたらしい。それを母から聞かされたのはうんと後のことだった。意外だった。自分自身、何の自覚もありはしなかったのだから。

理由はあまりしゃべらないこと。その一点だった。

母から「ごめんね」という言葉とともに聞かされたところによれば、ぼくの無口は、幼いころ、母が語りかけをしなかったことに起因しているという。会話能力を身につけるべき最も大切な時期に、母は額に汗して内職に励まねばならなかった。そのため、ぼくを一人で放置していることが多かったという。

路地デビュという人生の大きな画期をさえ、母の助力なく、一人で果たさねばならなかったことを思うとき、母の言葉は、たしかにさもありなんと思えたのだった。

当時の最も楽しい思い出は、毎夜眠りにつく前、布団の中で母が子守歌や昔話を聞かせてくれたことだった。

大の気に入りは、独特の節とリズムに乗せて歌ってくれた、次のようなものだった。

お月さんいくつ

十三 七つ

あの子を産んで

この子を産んで

お方に抱かしよ
 お万どこ行った
 油買いに行った
 油屋の角で

すべってころんで
 油一升こぼした

その油どうした

犬がねぶってそうろ

その犬どうした

鉄砲で撃ってそうろ

その皮どうした

太鼓に張ってそうろ

その太鼓どうした

破れてそうろ

破れてどうした

火にくべてそうろ

その火どうした

灰になってそうろ

その灰どうした

風に吹かれてそうろ

節回しとリズムと話の展開が、何度聞いても楽しかった。これは『お月さんいくつ』という名で、昔から全国各地に伝わっていた子守歌であるらしい。母もおそらく、その母親（ぼくの祖母）から小さいころに聞かされたのだろう。

毎夜毎夜、さまざまな歌や話を聞かせてもらった最後に、必ずこれをせがんだものである。最後まで行くと、

「もういっぺん」

すると母は

「またあ」

と言いつつ、必ずもう一度歌ってくれた。二度目が終わらないうちに、母のトクトクと鳴る胸の鼓動を聞きながら、いつしか眠りに落ちていたのであった。

そのころ、ぼくにとっては、言葉は自分の思いを伝える道具というよりも、聞くための道具であった。聞くことによってイメージを広げてくれる道具であった。

しゃべることと聞くことという、言葉が持っている二つの働きのうち、聞くことにその働きが片寄っていたようだ。知恵遅れと思われた理由がそこにあった。

そんなぼくにも、行動圏を広げたい衝動は人並みにあったらしく、その日、路地の入口まで冒険の足を伸ばしたのだった。そこで老婆と幼子に遭遇した。幼子はカタカタを押し、老婆は通りがかりの女性と世間話に興じていた。

たまたま出遭ったこの世界は、それまでぼくを包んでいた世界とはまるで異質な、絶対的他者の

世界、排他的世界であった。老婆が幼子に呼びかける声は、頭上を飛び越え、幼子にのみ届くのだ。ぼくがいることに老婆は端から気づいていない様子だった。

言葉が聞き手を選び、他者を排除するものであることを、そのときぼくは冷徹にも思い知らされた。会話に加わらず、会話の外から会話を聞くとという、後々のぼくの立ち位置が、幼いその日、確立されたと言っても過言ではないように思う。

ことさらに会話の当事者にならなくても、話の意味を理解して、イメージの広がりや連想する能力は、人並みには育つものである。言葉を理解するという点において、周囲の大人が心配するほど遅れてはいなかった。当時の自分を思い浮かべつつ、そう思う。

周りで行き交っている話の意味はわかっていた。だけど反応しない。会話に加わらない。いつも無口。それがぼくだった。一風変わった子であったのはたしかだった。

■陶器の人形

父は次の仕事のことなど考えもしないで、下駄工場を飛び出した。戦地帰りの男たちが仕事を求めてたむろしていた時期だ。新しい仕事を探すのはたやすいことではなかった。

まず始めたのは魚の行商だった。

母は真珠細工の内職を始めた。さらに、近くの大学で学生下宿の募集をしていることを知ると、急いで登録した。さっそく学生がやって来た。二階の八畳間が学生の部屋になった。

二階へは土間から階段が取りついていて、学生とぼくたちの生活空間は干渉し合わない構造になっていた。

「二階には上がったらいかんよ」

母から何度も言い聞かされていた。ところが夏の暑い日、ついに冒険の衝動を抑えられなくなってしまった。一段、また一段と、音を立てずに階段を這い上がった。上りきったところは半畳ほどの踊り場。横にふすまがあった。

そつとふすまを開けた。青年がランニングシャツと半パン姿で、文机に向かっていた。

彼はなぜかぼくをすでに知っているらしい。ニコツと笑うと、こっちにおいでと手招きした。

そばに行った。するといきなりぼくを抱きかかえ、ごろつとひっくり返って、腹の上に載せた。

握り拳を突き出して、

「指を開けごらん」

力いっぱい引っぱった。だが、どの指もピクリともしない。そのうち小指がピクピク動いて挑発した。あつと思つて、それを力いっぱい引っぱった。が、またも石のように固くなって動かない。あきらめて手を離すと、不思議なことに指が二、三本と開いて突き上がった。今度こそはと、つかもうとすると、またも石の拳に戻ってしまう。

こんな遊びに夢中になっていたとき、ふと、半開きになった飾り棚の物入れに、大切そうにくるまれている何かが見えた。

「あれ何？ 見せて」

「だめだめ、兄ちゃんの大事なもの。誰にも見せられん」

言われると、ますます見たくなり、

「見せて、見せて」

彼はついに根負けし、包みを取り出した。

くるまれていたのは、つやつや光る陶器の人形だった。赤や緑に彩色されたあでやかな衣装の少女。

「触ったらいかん。見るだけ」

青い目が生きているようで、美しさに見入ったのだった。

それから十年近く経った小学五、六年生のころ、母が話してくれた。

「昔、学生さんを二階に下宿させていたことがあったのよ。礼儀正しい、いい人だったんだけど、どういうわけか、下宿代が滞るようになってきてね。卒業までには払ってくれるものと思っていると、いつの間にかやら、いなくなってしまったの。上がってみると、部屋の中はもぬけの殻。まあ言ってみれば夜逃げよね。見ると、物入れの奥に忘れ物があって、たしか瀬戸物の人形だったかしらね。いくらにもなりはしなないと思っただけど、あのころ父ちゃん、決まった仕事がなくて苦しかったから、古道具屋さんを持って買って買ってもらったの」

その上さらに、学生の実家にまで乗りこんで行ったという。

「お宅の息子さんが下宿代をためこんだまま、いなくなってしまうんです。うちも楽な暮らしをしているわけではないですから、なんとかしてもらえませんか」

こう言って、直談判したというのだ。母は生来、内気で言葉少なく、人に向かって自己を主張したりする人ではなかったから、わざわざ遠方まで借金の取り立てに行っただけというこの話、あまりに意外で、とても本当とは思えなかった。どう見ても母らしくなかった。

母の内部には、いつもは隠れているもう一人の母がいると、こういうときに思うのだった。

「だけど結局、汽車賃の無駄になっただけ。あれに懲りて、学生下宿は一年でやめてしまったの」二歳のあの日から半世紀の歳月が流れ、二十一世紀が幕を開けた。イラク戦争が始まったばかりのころ、父が九十歳でこの世を去った。その半年後、心の支えを失った母もトイレの帰りに廊下で倒れ、そのまま父のもとへと旅立ってしまった。

父と母が長く背負ってきた幸も不幸も、喜びも悲しみも、すべては闇の彼方に消えてしまった。残されたのは、脳裏に刻み込まれた思い出だけ。学生に夜逃げされた話など、深い忘却の底に沈んで、思い出されるはずもないものだった。

ところが、父と母の死から数年後、たまたま読んだ本に、次のような話が載っていた。

戦後の物も金もなかった時代に、母は父の復員を待ちながら、小さな駄菓子屋を開いて私を大学にやらせてくれた。三年生の夏、ようやく父がシベリアから帰還した。だが、抑留中に患った病が悪化して、翌年の春、父は帰らぬ人になってしまった。以来、母は働く気力をなくして病みがちとなり、私への仕送りも途絶え始めた。安下宿に引っ越して、卒業だけはしようと何とかアルバイトで食いつないだが、下宿代はたまる一方となり、卒業を前にしたある夜、進退極まった私はついに下宿を逃げ出してしまった。

そういえば我が家でも昔こんなことがあったよなあと、すっかり忘れていた母の話を思い出し、次を読んだとき、「あっ」と思わず声を上げたのだった。

父の死からどれほどもせず、洋裁の内職で母を助けていた山好きの姉が、岩場で滑落して、死んでしまった。私にはただ一人の姉だった。病苦の中にいた母は、姉にまともな弔いもしてやれなかった。私は姉が大事にしていた陶器の人形を位牌代わりの形見とし、やがて独り立ち

した暁には、墓の一つも建ててやろうと心に決めた。ところがあわてて下宿を逃げ出したものだから、物入れの奥にしまっていた人形を置き去りにしてしまった。それが今も心残りではない。

さらに、

下宿の奥さんには申し訳ないことをしてしまった。そのころご主人には定職がなく、奥さんが幼い子供を育てながら、真珠のネックレスを作る内職に精を出していた。ほつれ髪で作業台に向かっていた奥さんを今も忘れることができない。顔を合わせるいつも笑顔を見せてくれるやさしい奥さんだった。あの笑顔を思い出すたび、罪の意識はふくらむ一方となり、仕事がり軌道に乗ってきたころ、当時の家を訪ねてみた。しかし、昔の家はすでになく、町並みもすっかり変わっていた。当時を知る人さえ今はなく、下宿代の返済も謝罪も果たせないまま帰ってきたのだった。重荷はいまだに胸の奥につかえたままである。

読むうちに、目頭がきゅーんと熱くなってきた。二階で遊んでもらったあの日のことが、昨日のことのようによみがえってきた。

あの人形のえも言われぬ美しさ、さらには、幼いぼくには見えなかった当時の父や母の暮らしぶりまでもが、眼前にくつきり浮かび上がってきた。

人生にはこういう偶然がありうるのだ。一度交差した後、離ればなれになり、またあるとき交差する。こんな偶然が、ときには起こりうるものなのだ。これが人生というものなのだ。

■真珠細工

父が魚の行商をしていたと聞かされたとき、キツネにつままれた気がしてならなかった。父のそのような姿は記憶のどこを探しても存在しなかったし、そもそも、父と魚の行商のイメージは、あまりにかけ離れていた。

しかし、それはやはり間違いない事実であったと思う。仕入れのために、毎朝暗いうちに起き出して、三津の朝市まで自転車走らせたのだと思う。

そうでなくては合点がいかない思い出がぼくにはある。

四年生の頃、父はぼくを連れてよく道後の町をサイクリングした。五、六年生になると、三津の港や大可賀あたりまで足を伸ばすようになった。なんでこんな遠いところにといいながら、汗をぬぐいぬぐい、ついて走った。

今にして思うと、毎朝、市場に通った思い出の道をたどっていたのにちがいない。甘くかつ苦い思い出の道を……。

そうでなくては、あれほど遠い所まで何度も自転車を走らせた道理が通らない。サイクリングしたいだけなら、ほかにいくらでも道はあったはずだから。

「父ちゃんが魚をさばくのが上手なのはね、昔、魚を売って回っていたことがあるからなんよ」母からそんな話を聞いたこともある。やはり魚の行商はたしかな事実なのだ。夢ではないのだ。行商だけでは食べていけないから、母は模造真珠でネックレスやブレスレットを作る手内職を始めた。これも後に聞いた話であって、母が真珠細工に励んでいた姿を、やはり、ぼくは記憶の襞にとどめていない。

だが魚とちがいで、真珠細工の方は、物的証拠が家の中にあつた。部屋の隅に積まれていた木箱で

ある。広くて底の浅い木箱がいくつあつて、どれにも格子状の仕切りが入っていた。四、五歳のころ、

「これなに？」
と母に尋ねた。

「これはねえ、キヨシがうんと小さかったころ、真珠に糸を通してネックレスや腕輪を作る仕事をしていたときのものなんよ。色や大きさが違う真珠がたくさんあつたから、間違えないように、仕切りをした小さな部屋ごとに入れておいたの」

「ふーん」

「キヨシは小さかったから、覚えてないのかねえ」

母に尋ね、母が答えたこの場面は、今もはっきり覚えている。

なんだか甘い乳のにおいに包まれているような懐かしい過去がそこにある気がした。

真珠細工を想像することは、遠いノスタルジアの世界への、はるかな夢の旅路であつた。母が働いている場面は浮かばなくても、想像の旅は甘く切なく果てしないものだった。

家には、長い裁縫台もあつた。おそらくそれが真珠細工の仕事台だつたのだろう。裁縫台に向かつて黙々と真珠に糸を通して母の姿が、はるかに霞んで見える気がした。

母がこの仕事をしていたために、ぼくは語りかけられるチャンスを失い、物言わぬ子に育つたというわけか。しかし、それを聞かされたあとでさえ、母の仕事を、いや母そのものを、恨みに思つたことなど一度だつてない。根っこに座っている無口の性格を、今になつても十分すぎる満足をもつて受け止めている。これが自分、これこそが自分なのだから。

■ウズラの飼育

父は、ウズラを飼おうと思ひ立った。ウズラがいい商売になると、どこかで聞きかじつたのだろう。はかない夢に飛びついた。

だが、大規模飼育ならともかくとして、玄関先の土間でほそぼそと飼うウズラが、一家の暮らしを支えるに足る収入源になろうとはとても思えない。冷静に考えればわかることだろう。にもかかわらず、母はそのとき学生下宿も真珠の内職もやめてしまった。

ウズラの飼育には、二人とも何かしら期するところがあつたのだろうか。あるいは、不思議な幻覚が二人をとらえたのだろうか。

家の戸口を入ると三畳の広さの土間があり、その横に、六畳間のうちの三畳分を切り落とした土間があつた。つまり、合わせて六畳分の土間があつた。おそらく前の住人が、そこで駄菓子屋か雑貨屋か、何かそうしたたぐいの小商いをしていたのであろう。

その六畳の土間の壁一面に、父はウズラの飼育箱を蜂の巣のように取りつけた。郵便受けほどの大きさの飼育箱だつた。

幼いぼくは、ある日突然、家の中に蜂の巣が現れたのにびっくりした。ぼかんと口を開けて天井まで届くウズラ箱を見上げていた。その自分の姿が、今も妙に生々しく思い出される。

三歳になつたばかりの春だつた。

ウズラの飼育とは、もちろん卵を産ませてそれを売る商売のこと。産み落とされた卵を、毎日卸問屋に届けていた。弁当屋から注文が来ることもあつた。

家の前で遊んでいると、

「キヨシ、行くか」

そう言って、ぼくを掬い上げ、自転車に乗せてくれたことが何度もある。サドルとハンドルの間に取りつけた幼児用シートが専用座席だった。

自転車の旅は、わくわくするような未知への大冒険だった。

父がウズラの卵を届けに行く店は二軒あった。というか、記憶にあるのはその二軒だけだ。

一軒は道後公園の堀端にあった。公園をぐるっと囲むその堀は、遠い昔、湯築城の外堀だった。湯築城は、河野氏という平安期に端を発する伊予の大豪族が、室町から戦国のころ居城とした城である。戦国末期、秀吉の軍に攻め滅ぼされ、徳川の世になると、初代藩主加藤嘉明によって城郭そのものが取り壊された。残ったのは外堀と土堤と内堀だけ。それが今もそのまま残って、道後公園となっている。

外堀を囲んで風情ある古道が通っていた。店はその古道沿いにあった。

父は自転車を止めると、ぼくを下ろし、

「一緒に入るか」

必ずそう言う。ぼくもまた必ず、

「ううん」

と首を横に振る。店の前にきれいな小川が流れていて、その縁にしゃがんできらきら光る水を眺めるのが楽しみだったのだ。

水は渦になり、滝になり、早瀬になり、淀みになりと、さまざまに姿を変えながら、休みなく流れて来ては、流れ去っていく。川底では小石や貝殻がきらきらしている。

見ても見ても見飽きることのない万華鏡だった。

「さあ、帰るぞ」

父が出てきて声をかけられるまで、じっと万華鏡に見入っていた。

店は、その構えからして、おそらく食料品の卸問屋だった。店のあるじと父はずいぶん親しそうに見えたので、父にウズラの飼育をけしかけたのは、いや失礼、ウズラの飼育を勧めたのは、そのあるじだったにちがいない。

もう一つの店は、店というより農家だった。副業で弁当を作っていた。

わが家の前の道を西に数軒進むと、南北の道と交差する。そこを北に折れて二百メートルばかり進んだところにその農家はあった。

南北の道は、北に進むとともにゆっくり弧を描いて東へと湾曲していた。

明治二十八年に開通した蒸気鉄道の廃線跡だった。道後温泉まで続いていた。明治二十八年は、ちょうど漱石が松山で教鞭をとっていた年である。南に進むと、逆に西に向かって弧を描きながら市の中心部の一番町へと続くのだった。何両もの車両を連ねたSLだから、直角に折れ曲がることのできない。そのため、ゆるやかなカーブを切った軌道になったのである。

明治末期、同じ道後・一番町間を、電車が競合して走るようになった。熾烈な客の奪い合いが始まった。

大正末に汽車は敗れ、電車が勝った。本当を言うと、汽車の会社が電気の会社を買収し、自ら汽車軌道を廃して電車軌道を残したのだった。

汽車と電車は極力並走しないよう、始点と終点を共通点とする8の字を描いていた。必然、途中で一箇所交叉する。後からできた電車が高架になった。それが写真である。

高架のすぐ向こうに電車と併行する道がある。それが我が家の前の道である。写真の地点から右（東）に数軒行くと我が家がある（写真が撮られた大正期に我が家があったかどうかは知らないが）。

廃線跡の道路を、父は北（写真では奥）に向かって進んでいくのだった。東への湾曲がはっきり実感され始めるあたりに、その農家はあった。

ここでは父は、
「一緒に入るか」

とは言わない。家の前の庭にぼくを下ろすと、

「ここであつと待つとけよ」

と言う。「待つとけよ」と言われると入りたくなるのがぼくだ。父の尻を追っかけた。

入ると、農家特有の広くて薄暗い土間。それを抜けた奥の炊事場が作業場だった。

おばあさんとおばさんが大きな鍋で煮炊きしていた。おじいさんも折り箱におかずやご飯を詰めている。

父は卵を届けると雑談を始めてしまう。父の話し好きは、どこに行っても折り紙つきなのだ。終わる心配がないので、弁当作りを眺めるのに厭きてくると、外に出るしかない。

外は真夏の日盛りだった。乾いた砂が白くまぶしく光っていた。

庭先にキュウリやナスの畑があった。

畝にもぐってみた。頭上には葉が茂って、心地よい日陰のトンネルだった。

だが、まっすぐ続く畝を見通すと、頭の上には葉が茂り、実がなっているのに、足元はすっかり干からびた茎だけだった。どれもこれも土色だった。それがずらっとトンネルの奥まで続いていた。

なんだか、土色をした死者の行列のように見えてきた。恐怖に襲われた。無我夢中でトンネルを抜け出した。

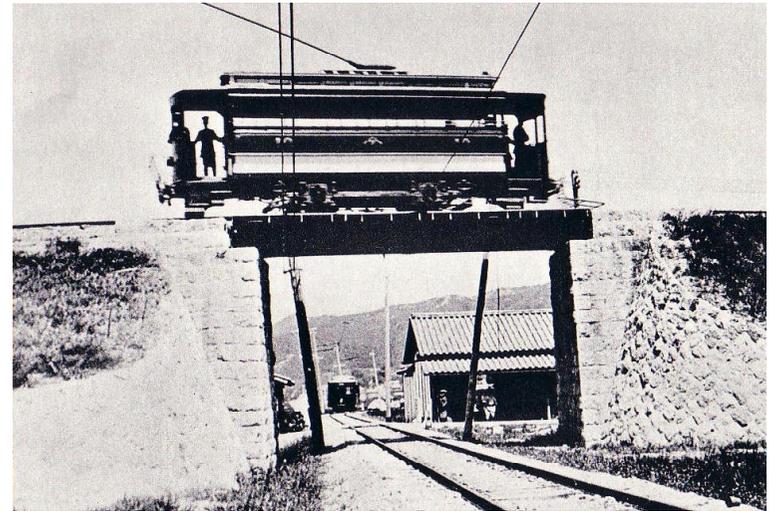
そこに父が現れた。話の余韻の一人笑いを口元に浮かべて……。

そうなのだ。あの笑みこそが、幼いころからぼくもつとも見なれた父の姿なのだった。

どんなときにも笑いを捨てない父だった。酒に酔おうが、いやな目に遭おうが、人と少々諍いしようが、決して自己を見失わず、いつも冷静沈着に笑っていた。

悲しみからも、恐怖からも、怒りからも、危険からも、無言でぼくを救い出し、抱き起こしてくれた。

こんなことがあった。六年生の夏、お山開きでにぎわう石鎚山に父と一緒に登ったときのこと。



汽車と電車が交叉する地点。南から北に向かって撮っている。後からできた電車が高架になっている。高架のすぐ向こうに電車と併行する左右の道がある。それが我が家の前の道である。写真の地点から右（東）に数軒行ったところに我が家がある。

登りは晴天だった。だのに帰りの道で突然豪雨に見舞われた。あつという間に山道は激流の川となり、ぼくは足を滑らせ、崖から転がり落ちてしまった。

すぐ後ろを歩いていた父は、一瞬の躊躇もなく、後を追うように崖に飛びこんだ（と、同道していた人たちにあとで聞かされた）。大きな木の根元にぶつかって、ぼくらは滑落死をまぬがれた。

そのときでさえ、気を失っていたぼくが目を醒ましたとき、目の前に父の笑顔があった。落ちた瞬間から記憶が飛んで、どうしてこんな斜面にいるのかもわからなかったが、父の笑顔だけがやさしくぼくを見つめていた。

それが父なのだ。その笑顔に、ぼくは救われ、心から安堵した。

同道していた人たちは、

「あつ、二人とも死んだ」

と、思わず目をおおったという。

畑に居並ぶ死者の恐怖からぼくを救ってくれたのも父の笑顔だった。

■卑弥呼の館

三、四歳のころ、町には戦争の傷跡がさまざまな形で残っていた。

記憶に濃厚なのは、焼け跡に建てられたバラック小屋だった。焼け出された人たちが焼け残りの板やトタンを拾い集めて作った、雨露をしのぐだけの小屋。戦後六、七年も経ったそのころには、たいていが建て替えられていたと思うが、それでも裏通りや路地の奥にはまだ残っていた。

わが家の近所にもいくつかあった。その一つを卑弥呼の館と呼んでおく。

卑弥呼の住まいを思わせる高床式で、畳はなく、床はカンナも掛けられていないざらざらした板敷きだった。小屋を囲む壁も薄板一枚。明かりとりの小さな窓があるだけで、内部は昼でも穴蔵のように暗かった。おばあさんと若夫婦、それとぼくより一つ年上の女の子が住んでいた。

入ると狭い土間があり、そこから三、四段の踏み段がついている。それを上がると、手すりのついた高床の部屋。裏に通じる細い土間を見下ろすようについた手すりだった。奥には、居間と茶の間と寝室を兼ねたもう一部屋があった。

子供の無遠慮で、奥まで一度入り込んだことがある。奥の部屋は、目が慣れてこない、しばらくは何も見えない。真っ暗闇だった。

なんとか輪郭が見えてくると、敷きっぱなしの布団の上におばあさんがいた。ぼくを誘い入れた女の子は、けらけら笑って布団の上を転げ回っている。布団のそばには、茶碗や皿が片づけられないで、重ねられていた。

寝ること、食べること、さらには日中の生活すべて、それらが渾然一体となった様は、子供心にもおぞましかった。

一家が好きこのんで、このだらしのない生活をしていたとは思えない。その日おばあさんは風邪を引いて伏せていたのだろう。そこにいきなりよその子が入って来たものだから、とっさに布団から起き上がり、乱れた髪を手でなでようとした、ちょうどその瞬間を目撃したのにちがいない。

女の子の両親は几帳面な人だと、母から聞かされていた。毎朝決まった時間に二人で仕事に出かけていた。だらしのない暮らしぶりの人たちではなかった。

やがて小学二年生のころ、一家はバラック小屋を引き払い、関西方面に引っ越した。何日かして

転居通知の葉書が届いた。それを読みながら彼らのことを話してくれた母は、意外なまでに一家のことをよく知っていた。

なんで母ちゃん、あの家のこと、こんなによう知つとるんじゃろ。不思議でならなかった。

それから二十年余りして、ぼくに長女が生まれた。名前をどうつけようかと思案して、とりあえず、双方の両親に相談してみた。そのとき母は

「私らがあれこれ言うよりも、あんたらが好きにつけたらいいんじゃないの。だけど、実を言うたらね、一つだけつけてもらいたくない名前があるの。それは○○」

それはあのバラック小屋に住んでいた女の子の名前だった。二十年以上も思い出すことのなかった卑弥呼の館。そこに住んでいた女の子の名前が、こうして突如母の口から出てきたのに驚いた。

「あの子はその後、大変な不幸に遭ったのよ。名前が悪いわけじゃないんだけど、やっぱりその名前だけは孫にはつけさせたくないと思ったの」

その不幸というのがどういうものであったかは語られなかったし、聞いてはいけないことのようにも思われたので、聞きもしなかったが、一家の後々のことまで母がよく知っているのは、やはり驚きだった。

一方、妻の父は、運勢占いに見てもらった。縁起のよい画数を調べてもらったと言って、その画数に合った名前を一つ示してくれた。

それを見たとき、ぼくは「えっ」と空を仰いだ。何とそれは、母が「○○だけはやめて」と言った、まさしくその○○だったのである。世の中に女の子の名前なんてごまんがあるだろう。それがたまたま一致する偶然なんてありえるものだろうか。

結局は、運勢占いが良しとした画数には従うこととし、それに合った名前を考えるうち、母が思いついた案を採用したのだった。

それにしても、母が「○○だけはやめて」と言い出さなければ、生涯思い出すことがなかったであろう、あのバラック小屋の女の子。大勢いた竹馬の友の中で、ごく辺縁部にいたにすぎない女の子。いつもニコニコ笑っていた女の子。ほんの数度遊んだだけのその子。

ぼくが一人っていると、そっと寄ってきて「遊ぼう」と言う。ぼくが他の仲間と遊んでいるときは、決して近づいてこない。

その子ももちろん、いつもは女の子たちと遊んでいるから、動線が交わることはない。

彼女と遊んだ記憶は切れ切れにわずかだ。家の前の小川を何度も飛び越え飛び越えて遊んだ記憶。あやとりをした記憶。……

そうだ、ぼくがあやとりというものを初めて知ったのは、その子によってだった。手を取って教えてくれた。簡単なものはすぐに覚えたが、込み入ったものはどうしてもできなかった。本気で覚える気もなかったから、癩癩を起こして投げ出してしまった。それでも、いやな顔一つせず、根気よく教えてくれた。

その子の先々にどんな不幸が待ち受けていたのか。母を震撼させたその不幸とは何であったのか。今となっては知る手だてはない。

母とその一家のかかわりも、今となっては知りようがない。女の子の母親と母は、女学校時代、仲の良いクラスメートだったのではないか。そんな想像をするだけである。

卑弥呼の館の一家を思い出すと、胸が張り裂けんばかり切なくなってくる。

■油揚げの見習い

四歳になったばかりの春浅いころ、突然、眠りから揺り起こされた。あたりはまだ真つ暗だった。豆電球がぼつんと一つ、天井に灯っていた。

「ごめんね、起こしてしもうて。ぬくぬくしてあげるから、また寝たらええんよ」

母が耳元でささやいた。母は寝ているぼくをそつと毛布にくるもうとしていたらしい。そのかすかな刺激で夢路を破られたのだった。

すつかり毛布にくるまれると、土間で待ち受けていた父に抱きとられた。表の通りには、すでに自転車が引き出されていた。荷台に大きな竹かごがくくりつけられている。その中にすんと据えられた。

事は無言で粛々と進んでいく。

町は深い眠りにあった。空には無数の星が瞬いていた。

やがて自転車が動きだすと、ゴム紐をかき分け、隙間から首を突き出した。どの家もいつも見ている家とはまるで様子が違っていた。隣の八百屋には戸板がかけられている。筋向かいのうどん屋は看板を入り口のそばに引き寄せている。

どこも寝静まって、物音一つしない。

自転車が進むにつれて、家々が揺れながら後ろに流れていくのを、ぼんやり見つめていた。だが、それは三、四軒のこと。たちまち深い眠りに沈んだらしい。数軒先の角を曲ったことさえ覚えていない。

目覚めると、そこは三方を板壁に囲まれた、見知らぬ小部屋だった。奥の小窓から朝日が差し込んでいた。足元には火鉢が据えられている。火鉢の向こうで、綿入れを羽織った老婆が縫い物をしていた。

ぼくはふとんをはねのけ、立ちあがった。

「起きたかえ」

老婆の声だ。覚えのない声である。

「心配せんでええんよ。父ちゃんと母ちゃんは向こうにおるけんの」

三方を板壁に囲まれた部屋の残る一方は、土間に向かって開かれていた。上がり口まで歩いて、あたりを見まわした。

土間は広々として奥深い。湯気が霧のように立ちこめていた。

足元には、クツが揃えて置かれている。

それを履いて、湯気の方へ向かって言った。母の背中が見えてきた。横には知らない女の人もある。さらに近づくと、立ちこめた湯気の向こうに父の姿もあった。

気づいた母が、

「起きたの。ちょっと待ってね、朝ご飯にしようね」

ぼくは母の横を通って、父の方へと回りこんだ。父は大きなひしゃくで釜から熱湯を汲み出していた。

「あつ、こらこら、こつちに來たらいかん。熱いぞ。ケガするぞ」

父のそばには別の男の人もいるようだった。

その日、父と母は油揚げ作りの見習いに来ていたのである。近々廃業する予定の油揚げ屋だった。廃業後は、道具や機械一式を譲り受けることになっていた。

仕事場の入り口（裏口か？）を出ると、そこは広場だった。いや、幼い目には広場に見えたけれども、路地の突き当たりすぎなかったと思う。路地をはさんだ向かいが製材所だった。やはり路地に向かって裏口をあけていた。機械がうなり、木材を切ったり削ったりしているのが見えた。

三方を板壁に囲まれた部屋は、おそらく休憩室だった。そこで、母が持ってきた朝や昼の弁当を食べたほかは、大半の時間を路地で過ごしていた。

ぼくが自転車で運ばれたとき、母は一緒ではなかった。自転車を見送ると、急いで弁当を作り、五年生の兄が起きてくるのを待って朝食を食べさせ、学校に送り出してから、弁当を持って、油揚げ屋まで歩いてきたのだろう。

見習いに来た油揚げ屋は、付近の町の様子や、帰りにたどった道順の記憶などから、おおよそのあたりが見当がつく。母の足でも、せいぜい三十分だろう。

路地は製材所の材木置き場だった。太い丸太を階段状に積み上げた山がいくつもあった。てっぺんによじ登ったり、山から山に飛び移ったりして、一人遊びをした。

午後になると、近所の子供が三、四人遊びに来た。当時幼稚園は一年保育が普通だったから、彼らはたぶん、幼稚園を終えてから遊びに来た子たち、つまりぼくより一つ年上の子たちだった。いつもそこを遊び場に行っている様子だった。

いつもなら、こんなとき、気持ちがすくんでしまつて、彼らが遊ぶのをそばで眺めることしかできなかつたと思う。だが、なぜかそのとき、砂糖が水に溶けこむように、いとも容易に彼らの中に溶けこんだのだった。

闖入者であるぼくの方から彼らの中に溶けこんだはずはない。彼らの方が、ぼくを、まるで毎日遊んでいる仲間のように、なんの抵抗もなく受け入れてくれたのだ。

カタカタ押しで味わわされた疎外感や屈辱感とはまったく逆の、新鮮で不思議な体験だった。こんなにもたやすく見知らぬ子たちの中に入ることができるのか。なんだか信じられない気分だった。

夢中になって、彼らと一緒に丸太によじ登り、最上段の丸太にまたがってじゃんけんをしたり、丸太の上を走る勇気合戦をしたり、押し合いっこをしたり、追いかけてっこをしたりして遊んだのだ。つた。

ところが、無我夢中で遊んでいたさなか、まだ遊び足りたとも思わないのに、彼らは突然ふいと遊びをやめてしまった。一斉に帰っていった。なんの前ぶれもなく、いきなりだった。

どうしたの？ 何が起こったの？ 合点がいかず、ただポカンと彼らの後ろ姿を見送るしかなかった。

楽しい気分はまたたく間にしほみ、取り残された寂しさへと、気持ちがずんずん落ち込んでいった。やっぱり彼らの仲間ではなかったんだ。よそ者だったんだ。あまりに悲しすぎる現実だった。

またも一人ぼっちになってしまい、楽しかった遊びの余韻を追いながら、丸太のてっぺんに馬乗りになったり、その上を歩いたり、製材所を覗きこんだりして時をすごすしかなかったのだった。

そのときである。思いもしていなかった出来事が起こった。路地の入り口に、兄の姿が現れたのである。

兄はおそらく、学校を終えたあと、教わっていた道順を、自転車を走らせてやって来たのだ。

見習いの油揚げ屋は、ぼくの見当にまちがいがなければ、小坂町の下駄工場からさほど遠くない。三年生までを下駄工場で過ごした兄にとっては、かつての遊び世界のぎりぎり辺縁部だったのだ。まったくの未知の世界ではなかったのだろう。だから一人で自転車を漕いでやってこられたのだ。兄が来るとは夢にも思っていなかったものだから、姿を見たたん、嬉しくって、心がち切れんばかりになった。犬が尻尾を激しく振って駆け出すように、兄がまだ路地の端に立って様子をうかがっているところへ、丸太を下りて、走っていった。

兄は学生服のポケットに手を突っ込んだ。中からキャラメル箱が現れた。なんでもないこんなことが、ドキッとするような手品に見えた。

二人でキャラメルをほおぼり、次に兄がポケットに手を突っこむと、出てきたのはミッキーマウスのパッチン（関東で言うメンコ）だった。これは手品というより、もう魔法だった。

七つ違いの兄である。何でも知っていて、何でも教えてくれる兄だった。

畳を土俵にしてよく相撲を取った。わざと負けてくれていたとは気づきもしないで、兄を土俵から押し出すと、

「勝った、勝った」

と喜んだ。そして横綱だと言って、父の丹前を羽織ったりした。

晴れた日に路地で日光写真撮ってくれたこともあった。

はるか高みにいて、あこがれの的、信頼の的の兄だった。

兄は表の通りに連れ出してくれた。少し歩くと、地藏を祀った小さな広場に出た。二つの通りが鋭角に交わってきた三角州状の広場だった。そこでしばらく遊んですごした。

兄ちゃん、どうしてこんなところ知るとるんじゃろ。不思議でならなかった。

日が暮れかかったころ、見習いは終わった。朝と同様、自転車の荷カゴに据えられた。朝と違っていたのは、母が前のフレームに横座りしたこと、兄が後ろから自分の自転車をついてきたこと。

舗装されず、ところどころ掘り返されたままの勝山通りを、北へ北へと自転車は走った。街灯はなく、日の暮れかかった通りは暗かった。

やがてあたりがぱっと明るくなった。上一万交差点にやって来たのだ。

電灯が明々と灯った店の前で母が言った。

「ちよつと止めて」

本屋だった。絵本の並んだ本棚にぼくを連れていき、

「今日は一人でたくさん遊べたから、ご褒美にどれか一冊買ってあげようね」

母が選んだのは、『はなさかじいさん』だったように思う。

兄も通路を歩き来しながら自分の本を探していた。

その夜、ふとんの中で、買ったばかりの絵本を読んでもらった。

鮮やかに色づけされた絵を見つめながら、母の声に聞き入った。

思えば、絵本を読んでもらいながら眠りについたのは、それが



3、4歳ころの勝山通り。南から北を見る。写真では定かでないが、奥に上一万交差点がある。

初めてだったかもしれない。いつもは、母が語ってくれる昔話や子守歌を聞きながら眠りに落ちていたのだから。絵がない代わり、想像の翼はよけいに強く羽ばたくのだった。

我が家に絵本がないわけではなかった。おそらく母が少女時代に買ってもらったと思われる『金の星』の類いが何冊かあった。実家から持ってきたのだろう。大正ロマンの香りに満ちた幼年雑誌だった。

ぼくを膝に載せ、ときどきそれらを読み聞かせ、歌い聞かせてくれた。記憶に強く残っているのは「月の沙漠」と「カナリア」だ。

「月の沙漠」を聞きながら頭に浮かんでいたのは、月の世界の広々とした沙漠と、そこに行く王子様と王女様であった。

二人のほかには誰もいない月の沙漠。そこを、二人を乗せたラクダがとぼとぼと歩いていく。どこから来てどこへ行くのか。ゆくえも知れず歩いていく。そのうら寂しさが、何とも言えず哀れであり、美しかった。

大人になってからも長くそのイメージは変わらなかった。だが、あるとき歌詞をつぶさに読んでみて、長年のイメージが崩れ落ちたのに愕然とした。なんと月の沙漠とは、おぼろ月夜の砂丘ではないか。歌詞の最後に次のようにある。

朧にける月の夜を

対の駱駝は

とぼとぼと

砂丘を越えて

行きました

これに長く気づかなかったのは迂闊と言えば迂闊だったが、知ったときの幻滅感もまた甚だしかった。

なに、おぼろ月夜だと。おぼろ月夜の砂丘だと。なんて湿っぽくって、くだらない歌なんだ。

「月の沙漠」は、ぼくの中では、あくまでも月世界の沙漠でないといけなかった。そうでないと歌の値打ちがなくなってしまう。

油揚げ作りの技術を習った父は、間もなく家を仕事場に大改造した。

裏庭をトタン屋根ですっぽり覆い、庭の中央に、二つの火道を持った、巨大なコンクリートのかまどを作りつけた。一つの火道には人間をまるごとゆでられそうな巨大な湯釜を二つ据え、もう一つの火道には、これまた人間の天ぷらが作れそうな大きな油鍋を二つ据えた。さらに、大豆をすりつぶす機械や、汲み上げた井戸水を蓄えておく巨大なタンク、燃料のおがくずを入れる倉庫など。家の様変わりはこのだけではなかった。ウズラを飼っていた玄関土間には原料となる大豆の麻袋が積み上げられた。縁の下は、菜種油の一斗缶置き場になった。

その後、父が転職して引越すことになる十五歳まで、物心ついたぼくの幼少年期は、すっぽりと油揚げとともにあったのである。



3、4歳の頃の上一万。道は掘り返されたままだが、賑わっている。

中学二年のクラス担任は、大学を出たばかりの若い先生だった。最初の個人面談の際、調査票の職業欄に「油揚げ製造業」とあるのを見て、

「うん？ なにこれ？」

あまりにも意外な反応だった。この先生は油揚げを知らないのか。

人を小馬鹿にしたような調子さえ感じられて、親の仕事をさげすまれたような、言いような屈辱感を味わった。ぼくにとっては遠い昔からそれしかなかった、かけがえのない親の仕事。毎日汗水垂らして働いている父の姿に誇りさえ抱いていたのに。

「油揚げを作る仕事です」

そう答えたが、先生は

「ふーん」

のひとりで、次の話題に移ってしまった。収まりのつかないものが腹の内に残った。

■だーんするぞ

油揚げ作りが始まったのは、ぼくが四歳になった春からだった。

ウズラの飼育箱が取り外されて、玄関土間に大豆の麻袋が積み上げられた。四段ほどの山が二つできた。この麻袋を父はドンゴロスと呼んでいた。妙な響きの言葉だ。仲間内だけで使う方言かと思っていたら、そうでもないらしい。この種の丈夫な麻袋は昔からドンゴロスと呼ばれていたらしい。

大豆袋の山は、たちまちぼくらの遊び場になった。ぼくらというのは、物心ついて以来の幼友達である。いや、まだ物心もつかないうちからの友だった。ぼくのほかに五人いた。同い年の子が三人、一つ上の子が二人。

うずたかく積まれた山を、ロッククライミングまがいによじ登った。

麻袋は丸太のように階段状に積まれていない。まっすぐ上へと積み上げられている。隣の山にも手や足をかけながら、ヨイショヨイショとよじ登っていく。

はじめのうちは一袋登るだけでもこわごわだった。ところが、一つ年上のトシちゃんが頂上を極めると、他の子供らも次々に挑戦し、ついには全員が登頂に成功したのだった。

麻袋はザラザラしていて靴底のゴムと相性がよい。つるつと滑ったりすることはない。しかも踏みつけると、子供の体重でも袋が少しへこんで、足がかりができる。うまくできている遊具なのだった。

最初に頂上に立った瞬間のドキドキ感と恐怖感は、今も記憶に生々しい。

立ちあがると天井に手が届く。まるで天空の雲の上にいる気分になった。下界では仲間たちが小さく蟻のように群れている。はるか下界の彼らとの距離感は、現実をはるかに超えて、すさまじかった。恐れけれども、それ以上に愉快だった。

麻袋の山で遊んでいると、父がときどき仕事場から大豆を取りにやって来た。大豆はいつでも取り出せるよう、一袋分が大きな木の箱にあげられていた。そこから枡で量って仕事場に運ぶのである。一斗枡から、一升枡、一合枡まであった。

そのとき必ず

「だーんするぞ、あぶないぞ」

と、声をかけたものだ。そしていつとき、ぼくらが遊ぶのを眺めていた。大丈夫、すべり落ちないとわかったならば、すぐまた仕事場に戻っていく。

面白いのは大豆袋の補給だった。

袋が少なくなってくると、家の前にトラックが止まる。若い衆が二人乗ってきて、一人が荷台に上がり、もう一人が下で構える。下の背中に上が大豆袋をどすんと乗せる。すると下は、腰の曲がったおばあさんの格好になって、背中に袋を乗せたまま土間まで走り、山の手前で仰向けにひっくり返る。これで大豆袋がドサツと山の上に積み上がる。

これを手で抱えて運んでいたら、とてつもない腕力が必要になる。背中で運べば、体幹と背筋だけで事が済む。山の上に下ろすのも、ただ仰向けにひっくり返るだけだ。

「うまいこと考えたもんよのう」

と、声には出さないがぼくらはみんな感心して見つめていた。腕力が必要なのは、たぶん下の人より荷台の人だった。

玄関土間での遊びはドンゴロス登りだけではなかった。

土間には、父と兄の自転車が二台あった。さらに空のミカン箱が何個かあった。

ロッククライミングに飽きてくると、それでかくれんぼをした。

かくれんぼといっても、狭い場所だし、隠れる場所も決まっている。大豆袋の陰か、自転車の陰か、ミカン箱の中だ。

ミカン箱は、中に体を押し込めて両手で顔を覆えば、外からは丸見えでも、幼い子にはこの上ない隠れ場所だった。

隠れる方も隠れる方だが、鬼もまた鬼である。隠れ場所は決まっているのに、鬼になれば嬉々として探し回った。それが幼子の遊びだった。同じ絵本を何度読んでもらっても、その都度、新鮮で面白いのと同じである。

知恵がないと言ってしまえばそれまでだが、大人の目には見えない何かを、彼らはその都度発見していたのだろう。

大人は物事を概念で判断する。一度読んだ本は、すでに一つの範疇に落とし込まれて、それ以外の何物でもない。本にかぎらず何であっても、一度体験すれば、早くもそれは一つの問題、一つの言葉で括られてしまう。それが大人の世界、大人の物の見方なのである。

固定した概念を共通の約束として、人は枯れた世界を生きていくことになる。

約束を離れ、世界があるがまま、見えるがままに見る人は、変わり者、異端者として弾き出される。芸術家はたいてい変わり者であり、異端者であろう。

その異端はたいていの場合、異端のまままで終わるのだが、ときに権威者によって評価されることがある。すると今度は、逆に絶大な尊敬の的となる。そして、評価された異端が次には固定した概念となって、世間を闊歩し始めるのである。

幼児にはこのような固定概念はない。約束ごとはない。はっきり言えば、「ミカン箱」という共通概念がない。そのときそのとき、目の前にある物が、「あれ」であり「これ」であって、先ほどの「あれ」は今の「これ」ではないのである。

同じミカン箱でも、先ほど隠れたミカン箱と、今隠れているミカン箱は別物である。隠れ方も各人各様、千差万別。幼児には、一つのミカン箱が無限の別様の世界を生み出すのである。その無限

のありようの中で、彼らは遊びを楽しんでいるのであった。

探す鬼の方も、あいつは先ほどの場所にどのように隠れたから、またそのように隠れているだろう、などという考えは持たない。常に新鮮、ゼロからの出発なのだ。先入観なしの出発なのだ。だから喜々として隠れ、喜々として探し回って楽しめるのである。

今思えば、なんと無垢な時代であったことか。概念に毒されず、人間関係に泥塗られない、澄み渡った宇宙空間を漂う時代であった。

■スエ子さん

油揚げ作りは重労働だ。毎朝、暗いうちに起き出して、日の暮れ方まで働きづめ。しかも、父が仕事を始めたころには日曜日が休みという習慣がなく、定休日は毎月一日と十六日というのが業界の定めだった。

仕事は家内労働で成り立っていた。父が豆腐を作り、母がそれを鍋で揚げて油揚げに仕上げる。

だが、母には家事や幼い子供（ぼくのこと）の世話など、別にやるべきことがたくさんあったから、油揚げにかかりきれない。しかも、油鍋には低温鍋と高温鍋の二つがあつて、元々、二人並んで仕事をするようにできていた。

そこで、母を手伝う女性を、父は当初から雇っていた。スエ子さんだ。

スエ子さんは、無口で、おしゃべりをせず、格段誰とも親しくなろうとしない、一風変わったおとなしい人だった。

たぶん中学を出たばかりだったろう。まわりが大人ばかりだから、おしゃべりをしようにも、話の合わせようがなかったのかもしれない。ぼくにはときおりニコツとしてくれた。それが嬉しくて、スエ子さんに取りすがって、ついて回った記憶もある。四歳のぼくには、やさしい姉ちゃんだった。

スエ子さんは言われた仕事は無難にこなすし、給金相応の役には立っていたので、これと言って問題はなかったのだが、一緒に並んで仕事をする母からすれば、物足りなさ、頼りなさの感じられる人ではあつたらしい。

と言っても、母もまだ初心者だし、経験においてスエ子さんと大きな違いがあるわけではなかった。ただ、いいものを作ろう、買ってくれる人に喜んでもらえるものを作ろうという気骨や責任感、母が数段まさっていた。研究心という大げさだが、油の温度加減や、揚げ加減、ひっくり返す回数など、細かいところで常に納得がいくよう試行錯誤を繰り返していた。

ところがスエ子さんというと、

「こうしてみたらどう？」

と母に言われると、それがなぜなのかを考えることもしないで、ただ言われたままになぞるだけ。工夫や改良の生まれる余地がないのだった。

それでも続けているうちには上達していき、箸さばきなどは、ずいぶんうまくなってきた。しかし、仕事への心底からの愛着がないものだから、母から見ると、やはりどこまでもぎこちなさが抜けないのだった。

集中力が欠けてくると、「ペケ」と呼ばれる、売り物にならない失敗品を作ってしまうことがあった。表面が黒く焦げすぎたり、揚げ具合にムラがあつたり、角が欠けてしまつたりと、ペケにもい

ろいろあった。

母にももちろんペケは出たが、頻度は桁違いだった。

「あの子はよう仕事はしてくれるんじゃないが、ペケが多いのう。もうちょっと考えてやってくれんといかん。力みすぎとるんかいのう。ゆったり構えて仕事をしたら、気持ちがとぎれることもないんじゃないのう」

父が母にこんなことを言っているのを聞いた覚えがある。

物言わず淡々と仕事をしている様子が、かえって力みすぎと映ったのだろうか。

父は気持ちをごまかせようと、スエ子さんに軽口をたたいてみたりもする。だが、乗ってくる様子はなかった。自分に話しかけられているとは気づきもしないかのように、上の空で仕事をしていった。

連絡なしに遅刻をしたり、休んだりすることもあった。時間になっても来ないものだから、父が仕事の合間に呼びに行く姿を、何度も目にすることがある。

そういうスエ子さんではあったが、十のうち九まではいい仕事をしてくれ、腕も上がってきたので、我が家にとって、彼女は欠かせぬ人となっていた。創業時の父の油揚げ業は、彼女なしには成り立たなかったと言っただけ。

一年ほど経ったある夕べ、薄暗い土間で父と母がこんな話をしているのを耳にした。

「またあの子が、給金を前借りさせてくれ言うてるぞ」

「そう、困ったねえ。きちんきちんと仕事をしてくれる子ならいいんだけど、最近ちよくちよく休むようになってきたしねえ」

それでも何度かは言われるままに貸してあげたようだが、やがてそのまま来なくなってしまった。

ある朝、父が呼びに行くど、

「昨日の晩、男とどこかに駆け落ちしてしもうたらしい」

父親が出てきてそう言われたと、がっくり肩を落として帰ってきたことがあった。

話の意味は、五歳になったばかりのぼくにわかりはしなかったが、父と母のひそひそとした口ぶりから、何か人生の暗部につながる出来事らしいことは想像できた。

それを境にスエ子さんは本当に来なくなった。代わって父の妹の幸子さんが来てくれるようになった。

■時計屋のおばさん

父が油揚げ業を始めた当初から手伝いに来てくれていた人に、もう一人、近くの時計屋のおばさんがいた。

東一万町に引越したときから、父はなぜか時計屋と親しくなり、暇ができると時計屋に行って、世間話をしながら仕事を眺めるのを楽しみにしていた。一緒にぼくもついて行き、おじさんの仕事を、魔術でも見るように、じっと見つめていることがあった。時計をバラバラにし、細かい構造にメスを入れているおじさんの指先は、見てもみても見飽きない秘技だった。

油揚げ業を始めたとき、父にはおばさんが外回りの仕事の適任者に見えたのだった。ぜひにと頼みこんだ。直ちに応じてくれた。

何ととっても、おばさんは女ながらの巨体で怪力。力仕事に向いていた。しかも、いつでも男用

のズボンに男用の紺の前掛け。

この人、女だろうか、男だろうか。いつも迷ってしまうのだった。

お婆さんは、油揚げが詰まったパン箱のような箱を、二段、三段と自転車の荷台に積み上げた。それを太いゴムベルトで力いっぱい締めつける。そして、得意先へと漕ぎ出していく。

得意先は、大きく分けると二種類あった。

一つはいなり寿司屋。食堂などにいなり寿司を卸す製造元だ。毎日数百枚の油揚げを買ってくれる上得意だった。

もう一つは八百屋。今ではスーパーやコンビニにとって代わられたから、町で八百屋を見かけることはほとんどないが、当時は八百屋の全盛期だった。大通りはもちろんのこと、狭い裏通りにも、八百屋はいたるところにあった。

家庭に冷蔵庫がなかった時代である。どの家でも、奥さんが日に一度といわず、二度、三度と八百屋に買い物に出かけた。八百屋はいわば、家庭の冷蔵庫だった。

八百屋と言うと、野菜や果物がイメージされるが、当時の八百屋は小商いながらも総合食品店だった。肉と魚を除いた、庶民のあらゆる食料品が、狭い店内にびっしりぎゅうぎゅう並べられていた。

子供のお菓子や、ちょっとした文具類まであった。

油揚げももちろん八百屋で売られていた。だが、売れる枚数は、日にたかだか五枚か十枚。しかし、何と言っても八百屋の数が膨大だから、これらは大事な得意先なのであった。

お婆さんはルートを決めて、契約している八百屋を順々に回る。現金売りはしない。掛け売りだ。帳面に「〇〇屋、何月何日何枚」と記入していく。

途中で箱が空っぽになると、戻ってきては詰め直し、また出かけていく。回る店が多いので、これはなかなかの大仕事だった。

戻ってくるたび、必ずたばこに火をつける。それをうまそうに吸いながら、父とよもやま話にひと花咲かせる。タバコが終わると、

「さて、出かけるか」

と、自分にと、父や母やスエ子さんにともつかない声を上げてから、自転車にまたがって出かけていく。そこにぼくがいると、決まって頭をポンと叩く。そんなお婆さんが好きでたまらず、角を曲がって消えていくまで、後ろ姿を見送るのだった。

昼までに八百屋の巡回は一通り終わる。その後はいったん家に戻っておじさんと昼食をとる。一休みしてからもう一度やってくる。

今度はいなり寿司屋だ。契約している店は五、六軒だが、一軒あたりの枚数が多いから、店の数だけ往復しないといけない。

これが終わると、お婆さんの一日の仕事は完了となる。女の仕事としては、なかなかの大仕事、重労働だった。

■パンツにウンチ

ある日、かくれんぼに熱中するあまり便意に気づかず、突然パンツが重く垂れ下がった不快感で、漏らしたことに気づいたことがあった。

四歳だったぼくは、もちろんオムツは外れ、一人でトイレに行けるようになっていた。だが、気づかぬうちに漏れてしまったものはどうしようもない。仲間の誰にも言えなかった。

気づかれないよう、こっそり遊びから抜けて座敷に上がり、パンツに異物の重みを感じつつ縁側まで歩くと、スエ子さんと並んで仕事をしていた母に

「うんこが出た」

と告げたのだった。母は振り返ると、縁側に立っているぼくの様子ですべてを察知。仕事をスエ子さんにまかせると、そばまで急ぎ足でやってきた。縁側の下からパンツを脱がせ、ウンチをトイレに捨てに行った。続いてパンツの汚れていない部分を水に濡らして、

「頭を下げてごらん」

と言う。えっ、どうして頭を下げるの？ わけがわからなかったが、言われた通りにすると、お尻が母の目の前に突き出した。母はパンツでお尻をきれいに拭いた。

瞬間、スエ子さんがちらっと振り返った。そんな気がした。母にお尻を突き出すのは何でもないが、スエ子さんにお尻を見られるのは、言いようもなく恥ずかしい。

スエ子さんは気づかぬふりで、仕事に向かっていた。だけど、きつとぼくのお尻を見たにちがいない。そう思うと、得体のしれない恥ずかしさ、いやもつと言えば、罪の意識さえ覚えたのだった。

でも、それはほんの一瞬。母に新しいパンツをはかせてもらって、仲間のところに戻ったときには、もうすっかり忘れて、遊びに没入しているのであった。

■リヤカーショック

竹馬の友と呼ぶべき親しい遊び仲間の存在を自覚したのは、父が油揚げを始めたときだった。四歳になって間がないころだ。だが、彼らがいきなり現れたはずはなく、その前に、幼い遊びの時期があったのだろう。それも、かなり長く……。

遊びの場面が記憶にくつきり焼きつくようになったのが、四歳のころからというわけだ。

ドンゴロスによじ登ったり、ミカン箱でかくれんぼをしたりするようになったのがその時期だった。

そんな春四月、ショックな出来事が起こった。リヤカーショックと呼んでおく。

そのころの友だちは、同年のミノルちゃん、ユウちゃん、ヒサキちゃん、そして、一つ年上のトシちゃん、タカちゃん。一つ下にはヨツちゃんとサトルちゃんがいたが、この二人はまだ仲間と意識するには幼すぎたように思う。彼らはみんな、ぼくの家から数軒以内に住んでいる竹馬の友だった。

朝、家の前の通りで、いつものように追いかけてっこをして遊んでいた。いつもと変わらぬ、いつもの光景だった。

そこに突然リヤカーが現れた。タカちゃんのおじさんが自転車で引いてきたのだ。

タカちゃんの家は荒物屋。白や火鉢など、重くて抱えられない品物を注文主の家まで運ぶのにリヤカーを使っていた。

おじさんは、

「さあ乗れよ。行くぞ」

と声をかけた。トシちゃんとタカちゃんが飛び乗った。つられてぼくもピョンと飛び乗った。何

のためとか、どこに行くのかなど、考えもせず……。

ところがだった。乗ったとたん、

「おまえは違うじゃろが」

と、いきなり子ネコをつまむように、首根っこをつかまれて放り出されてしまった。

わけもわからず放り出されたあの屈辱感。いまだに心の奥に傷となって刻まれている。

トシちゃんとタカちゃんは、低い柵でぐるりを囲まれたリヤカーの中で跳ね回っていた。それを下から見上げたときの、言いようのない悲しき、疎外感！ 涙を必死でこらえた。

思えばそのとき、ミノルちゃんとユウちゃんも下にいたのだった。仲間はずれにされたのはぼく一人ではなかった。だけど、ミノルちゃんとユウちゃんは、乗ってはいけないことを、どうしてだか、すでに知っていた。何も知らずに屈辱の罠に落ちたのはぼく一人だった。

二歳のころから宿命的にとりついてきた疎外感、劣等感、取り残された感覚。そういったものが、そのときどつとあふれ出てきた。

よく見ると、トシちゃんとタカちゃんは肩から斜めに、小さなバッグを掛けていた。それによく気がついた。

「幼稚園に行くんじゃ」

トシちゃんが言った。

当時、幼稚園はたいいてい一年保育だった。一つ年上のトシちゃんとタカちゃんにとって、その日はきつと幼稚園の初日だったにちがいない。

リヤカーは進み始めた。

「バイバイ」

二人は手を振り、なおも動物園の猿のように、リヤカーの柵に手をかけてびよんびよん飛び跳ねていた。リヤカーはみるみる小さくなっていった。彼らが行くところは、遠いはるかな夢の国。そう思えた。

幼稚園というところがあることを、ぼくはそのとき初めて知ったのだった。

■ヒサキちゃん

ぼくの幼年期をあこがれの光で照らし出したまま、ある日突然いなくなった子がいる。ヒサキちゃんだ。

ヒサキちゃんちはぼくの家の北隣。東側の路地を奥に入ってすぐの家だった。

ヒサキちゃんは、なぜか戸外でぼくたち仲間と遊ぶことはなかった。もつぱらぼくらが（というより、たいいていはぼくが）ヒサキちゃんちに遊びに行った。ヒサキちゃんがぼくの家で遊ぶこともなかった。荒々しいドンゴロス登りなど、ヒサキちゃんのイメージにはそぐわない。

そのころぼくの大的仲好しだったトシちゃん、タカちゃん、ミノルちゃんは、職人や商売人の子。ぼくももちろんそうだった。ぼくらにとって、家はそのまま仕事場だった。父親も母親も、いつでもぼくらの視野の中で、手や服を真っ黒に汚して働いていた。

手を汚すことなく、子供の世話だけに明け暮れる母親なんていなかった。それを当たり前として育ったぼくには、ヒサキちゃんの家は神秘だった。憧れだった。

お母さんはいつもきれいな服で、子供たち（ヒサキちゃんと妹）の面倒を見ながらすごしていた。

お父さんは、夕方になると決まった時間に、背広やワイシャツ姿で帰ってくる。家の中が労働の場になることはなかった。

ヒサキちゃんにとって、外とつながる唯一のチャンネルがぼくであったように思う。ほかの子と遊ぶことは滅多になかった。お母さんは、柄の悪い職人の子がヒサキちゃんの遊び仲間になることを、あえて避けさせようとしていたのかもしれない。そんな気さえる。

ならば、なぜぼくだけが許されたのだろう。そこが不可解なところだ。

ぼくには職人臭がなかったのだろうか。いやそんなはずはない。だが、柄の悪い職人臭というのはぼくにはなかった（と自分で思う）。口数の少ないおとなしい子。人のすることを、ただじっと見つめている子。荒々しさの感じられない子。そんなぼくが、お母さんのメガネにかなったことは考えられる。

一つ年上のトシちゃんとタカちゃんは生粋の職人と商売人の子。はた目には粗野で、聡明な輝きなんてチラリとも感じられない子たちだった。しかし、心の奥はその逆で、彼らは繊細すぎるほど繊細で、誰よりも人の心のよくわかるやさしい子たちであった。だが、見かけでしか人を見ない大人たち、中でもヒサキちゃんのお母さんには、彼らはメガネにかなわなかったのだろう。

ぼくと同い年の子に、ミノルちゃんとユウちゃんがいた。

ミノルちゃんのお母さんは、お父さんと別居だか離婚だかして、昼も夜も働いていた。昼はどこかの店に働きに出たり、内職の油紙貼りをしたり。夜は夜鳴きそばの屋台を引いていた。苦勞一筋のお母さんだった。

ぼくとミノルちゃんは気の合う大の仲好しだったが、ミノルちゃんにも知的な輝きは感じられなかった。根は、明るくひょうきんな、やさしい子であったが、ヒサキちゃんのお母さんのメガネにはかなわないのであった。

ユウちゃんの家にもお父さんがいなかった。お母さんが一人で子供たちを育てていた。だが、ミノルちゃんの家とは様子がまるで違っていた。

お父さんは大きな会社に勤めていたが、ユウちゃんが生まれて間もなく病死したらしい。年金などが入って生活には困らなかつたようで、食べるために働いているお母さんの姿を見かけたことがない。

ユウちゃんには、三つ年上の兄さんと、うんと年の離れた兄さんと姉さんがいた。ぼくらが小学生のころ、一番上の兄さんはすでに大学を出て就職していた。その会社というのがお父さんが勤めていた会社と同じだったようで、新居浜に本社があり、ときおり休暇で松山に帰ってきた。帰ると必ず二階からトランペットの音が聞こえてくるので、すぐにそれとわかった。

姉さんもすでに大人であった。勤めには出ず、家で子供たちの勉強を教えたり、趣味の裁縫をしたりしていたようだった。

職人の家とは暮らしぶりが明らかに違っていた。

そんなこともあってか、ユウちゃんはぼくとの間には何の隔てもないのだが、他の子供たちとはどこかなじみきれない雰囲気があった。それを本人も、周囲の子たちも感じ取っていた。洩垂れ小僧がたむろしていた界限で、ユウちゃんはぬきんで聡明な子なのであった。

不思議なことに、ぼくは生粋の職人の子に対しても、知的で聡明な子に対しても、自分の中に流れている血との間に不自然な隔てや違和感を覚えることがなかった。どちらのタイプの子とも仲よ

くできたし、どちらからも自分たちの仲間だと認められているのを自覚していた。

自分からはなんの働きかけもしない子であったにもかかわらず、というよりも内気で引っ込み思案な子であったにもかかわらず、どちらのタイプとも仲よくなり、敵を作らない。どうやらそれがぼくの特質らしかった。

ユウちゃんとはその後も長い／＼つきあいとなった。同じ私立中学・高校に入学し、同じ大学の同じ学部に進学したのだった。

子供の遊びネットワークは、幼さからはとても想像できないほど、複雑に錯綜している。背後には、親の思惑や暮らしぶり、持って生まれた気質の違いなどが深く関わっている。

ユウちゃんは、なぜだかヒサキちゃんとは遊ばなかった。

ドンゴロス登りやミカン箱のかくれんぼは、喜々としてぼくらと一緒に楽しむユウちゃんだった。このことがヒサキちゃんのお母さんに、ユウちゃんを遠ざけさせる原因になったのだろうか。ユウちゃんできえも、鼻を垂らした職人の子と同一視されてしまったのだろうか。だとすると、ドンゴロス登りの張本人であるぼくがなぜメガネにかなない、ユウちゃんがメガネにかなわなかったのか、そこがさらに神秘となる。

ユウちゃんは幼いぼくから見ても、頭の切れがとびつきり鋭く、しかもぼくのように誰にでもつき従って、誰とも交わってしまいうタイプではなく、孤高という言葉がぴったりな子であった。ヒサキちゃんにもそれに近いものがあつた。電極の同極同士のような排斥関係が、無意識のうちに二人を遠ざけていたのかもしれない。それをヒサキちゃんのお母さんも敏感に感じ取っていたのだろうか。

さらに言えば、一緒に遊ばせると、もしかするとヒサキちゃんがユウちゃんに圧倒されて、劣った側へと突き落とされる。そんな思いもあつて、ヒサキちゃんのお母さんがユウちゃんを警戒していたことも考えられる。

その点ぼくは、生粋の漬垂れ小僧ではないし、かといってヒサキちゃんを負かす相手でもない。お母さんにとっては、安心して遊ばせることのできる手頃な相手だったのであろう。

ぼくがヒサキちゃんと遊ぶようになったのは、父が油揚げを始めた四歳の頃からだったと思う。彼は幼稚園に入る直前、どこかへ引っ越してしまった。だから、彼と遊んだのは長くとも一年間だ。にもかかわらず、彼と遊んだ数々の場面が、いまだにぼくの内部を赤い炎で照らし出している。消えることのないあつたかな炉のように燃えている。

ヒサキちゃんちに初めて上がった日、真っ先に目に飛び込んだのは、玄関の三畳間にあつた大きな足踏みミシンだった。それは巨大で、黒々として、奇妙な曲線模様で飾られていた。

いったい何じゃろう。不思議に思つて見つめているぼくに、お母さんが、

「ミシンというのよ。これでお洋服とか縫うの」
とでも教えてくれたものと思う。

ミシンの横をすり抜けて奥の三畳間に入り、さらにその横の座敷に入っていくと、部屋の真ん中に、今の今までヒサキちゃんが遊んでいたと思われる鉄道の線路が、敷かれたままになっていた。

そばには電車や汽車もころがっていた。

線路を走る電車や汽車は初めて見る遊具だった。やってみたいな、その思いがお母さんに伝わったのか、

「一緒にやったらどお？」

即座にお母さんが声をかけてくれた。カタカタ押しのおばあさんに味わわれた屈辱感、疎外感とは真反対の、その言葉だった。

機関車はゼンマイじかけ。ヒサキちゃんがするのをまねて、ネジを差し込み、力を込めて巻いた。線路に乗せてスイッチを押すと、車輪が回り出した。連結した汽車や電車が走り出す。途中に、駅があり、踏切があり、トンネルや鉄橋まであった。

初めて味わう楽しさだった。別世界だった。

だが、何度もネジを巻いては走らせているうちに、飽きてきた。次は積み木だった。三角や四角の色鮮やかな積み木。この積み木でさえ、初めての体験だった。

そもそも畳の上での遊びというものが、ぼくやトシちゃんやタカちゃんやミノルちゃんたち、つまり職人や商人の子たちにとってはなかったことだった。遊びといえば、家の前の通りとか、横手の路地とか、わが家の土間とか、つまりクツを履いて遊ぶ場だけが遊び場であって、そこで追いかけて遊んだり、かくれんぼをしたりする以外の遊びは経験がなかった。

畳の上に座って遊ぶということを、そもそもぼくらは知らなかった。そのための遊び道具もなかったのだった。道具は、そのときそのとき目の前にある箱とか木切れとか石ころとか。

親に買ってもらった遊具で遊ぶいう発想が、ぼくらにはなかったのだった。

色彩豊かな積み木を見ると、それだけでもわくわくした。二人で競いあって高い塔を積み上げた。そのうちガラッと塔が崩れた。せっかく高く積み上げたのに、水の泡になってしまった。心にヒビが入ったようで、楽しさが一気にしぼんでしまった。

何度やっても同じだった。塔は必ず崩れてしまった。どうせ最後にはこうなるのか。それを知ったら、もう高い塔など作りたくはなくなった。

ヒサキちゃんは何ごともなかったように、崩れても崩れても平気で塔を積み上げていく。

崩れるのを楽しんでいるようでさえあった。ときには、わざと手でガシヤと崩してしまうこともあった。ヒサキちゃんの心の内にある残酷なものを見てしまったようで、いたたまれなかった。

ともあれ、こうしてヒサキちゃんとの遊びが始まった。

その後、ヒサキちゃんの家でなんとたくさん遊びを体験したことだろう。いちいち思い出すことさえできないほどたくさん。

ぼくら職人の子は、きれいな色で飾り立てた遊び道具など使わなくても、自分たちでいくらでも遊びを工夫することができた。ただ走り回るだけでも楽しかったし、道に落ちている棒きれや石ころや木の葉でさえ、立派な遊び道具になった。

しかし、それとは別種の、作られた遊びというものを、ヒサキちゃんの家で、さまざま体験させてもらったのだった。

ヒサキちゃんには妹がいた。初めてヒサキちゃんちをたずねたときには、まだ生まれて間もない赤ちゃんだった。ベビーベッドに寝かされていた。ベッドの上に、天井から鮮やかな飾り物が吊り下がっていた。セルロイド製の、シャンデリアのような飾り物。それがくるくる回って音を出す。メリーゴーランドというものだった。

以来、

「赤ちゃんにはメリーゴーランドがつきもの」

という潜在意識が植えつけられた。それから二十数年を経て、ぼくに長女が生まれたとき、真っ先にヒサキちゃんちで見たメリーゴーランドを思い出した。

赤ちゃんといえればあれだ。あれがないと赤ちゃんじゃない。潜在意識に駆り立てられて、まっしぐらにおもちゃ屋に走った。メリーゴーランドを買ってきた。

ベビーベッドの上に吊してみた。だが、長女はさほど興味を示さなかった。

なんだこんなものだったのかと、遠い日のメリーゴーランドへのあこがれが、どんどんしぼんで、失望ばかりが広がったのだった。

今思えば、やっと目が見え始めたばかりのころだ。メリーゴーランドに興味を持ってというのが無茶だった。

ある日、ヒサキちゃんちで遊んでいると、おやつの時間になった。缶に入ったドロップスをもらった。さらにお母さんは、鏡台の引き出しから小さな丸い缶を取り出してきた。中に薄茶色の粒が入っていた。ヒサキちゃんに一つ与え、ぼくにもまた、

「これカンユというの。体にいいのよ」

と、手のひらに載せてくれた。口に入れたが、あめ玉のように甘くはないし、おいしくもなかった。

たった一度のこの体験なのに、カンユは、記憶の襞にしみついた。

部屋の隅っこの薄暗い引き出しから魔法のように取り出された丸い缶。「カンユ」という名の奇妙な響き。おいしくはないが、なんだか特別な「体にいいもの」。

こうした印象が溶け合って、得体の知れない神秘がぼくを酔わせたのだった。

ヒサキちゃんちには、遊び道具を詰めこんでいる半畳ほどの押し入れがあった。それがぼくらは、心躍る宝の小部屋だった。遊びに飽きてくると、必ずお母さんが小部屋の扉を開けてくれた。

中には無数のおもちゃが詰めこまれていた。何を取り出してくれるかと、心臓をドキドキさせながら見守るのだった。

あるとき、幼児用の野球用具を取り出してくれた。ピンポン球のようなボールとプラスチック製のバット。お母さんも一緒になって、八畳間の座敷で投げたり打ったりして楽しんだ。ぼくが打ったピンポン球をお母さんが本気で走ってキャッチする姿がおかしかった。

パラパラマンガを取り出してくれたこともあった。子供の手のひらほどの小さな本で、パラパラめくっていくと、描かれている絵がアニメ映画のように、動く映像となる。今も覚えているのは野球のバッターのスイングだ。アメリカの何とかいう選手だと、お母さんが言っていた。絵が動いて見えるのが不思議でならず、何度も何度もやってみた。

おもちゃの船の記憶も鮮明だ。ある日、座敷で遊んでいると、裏庭から

「二人とも庭に出てきてごらん」

お父さんの声がした。ぼくらは玄関で靴を履き、細い通路を抜けて裏庭に回った。箱庭ほどの小さな庭に、水を張った行水桶が置かれていた。

お父さんはブリキでできた小さな船を水に浮かべて、船の上のロウソクにマッチで火をつけた。しばらくすると船がシュッシュと蒸気を吐いて動き出した。不思議な動きだった。進んだと思うと止まり、止まったと思うと、また進む。右に行ったり左に行ったり、方向もいっこう定まらない。見ていて、ハラハラドキドキするような動きだった。

これはボンボン船という、水蒸気で動くおもちゃの船だった。

こうした一種の科学的な遊びにも、ヒサキちゃんの家では触れることができたのだった。

ヒサキちゃんの家は南北に並んだ二軒長屋で、南にヒサキちゃんたちが住み、北におばあさんが住んでいた。おばあさんの家の軒下には鶏小屋があった。卵を産むとクワツクワツと鳴いて知らせるんだよと、おばあさんが教えてくれた。その卵、もちろん売り物ではなくて、ヒサキちゃんたちのおかずだった。

ある日、ヒサキちゃんちに遊びに行き、

「ヒーサキちゃん」

と、いつものように独特の節で呼びかけると、

「ちよつと待ってね」

ヒサキちゃんの代わりにお母さんの声が出た。玄関の上がり口から奥をのぞくと、いつもはふすまが閉められている茶の間が素通しになっていて、ヒサキちゃんのご飯を食べているのが見えた。横にすわっているお母さんが、

「卵かけご飯食べてるから、ちよつと待ってね」

卵かけご飯がぼくにとって珍しいわけではなかったが、ご飯にかかった卵の黄色が、見たこともないほどみごとだった。目の前に座って、小さな茶碗に盛られた卵かけご飯を口に入れているヒサキちゃん。その一口くを、まばたきも忘れて見つめていたのだった。

あのとぎのあの真つ黄色な卵かけご飯が、何十年も経った今でさえ、卵かけご飯を食べるたびに思い出されるのはなぜだろう。ぼくにとっては卵かけご飯の原風景なのだ、あれが。

おばあさんの家にはダーツがあった。

あるとき、ヒサキちゃんと遊んでいるとおばあさんが顔を出し、

「ちよつと来てごらん。おもしろいものを見せてあげるから」

行ってみると、ふすまに丸的が貼られていた。それに向かって、まずおばあさんが矢を投げた。

「さあ、やってごらん」

ぼくらにもやらせてくれた。なかなか当たらない。でも楽しかった。

あの場面もまた、ダーツの原初風景である。大人になった今でさえ、ダーツをするたび（意外にもダーツの機会が多い）、必ずあの場面が浮かぶのである。

ダーツをするおばあさん！ 彼女はどこかハイカラだった。科学に抵抗感のない人だった。そのハイカラがお父さんにも伝播し、ボンボン船という、ちよつと見なれぬ遊びにつながったりしたのだろうか。

日食もなつかしい思い出だ。ある日、おばあさんが、

「お日様が欠けてるよ」

とぼくらを外に誘い出した。煤を黒く塗ったガラス板で、まずおばあさんが空を見上げた。ぼくらにもまっ黒なガラス板を渡してくれた。

「これで見んといかんよ。お日様をじかに見たら目が焼けてしまうけんね」

おばあさんを真似てぼくも空を見上げた。

「ほら、お日様がまん丸じゃのうて、欠けてるでしよう」

実際、そのときぼくは、まん丸でない太陽を見たはずだ。見たように思う。

だが、欠けた太陽に感動するには幼すぎた。もっぱら興奮していたのはおばあさんだった。空を見上げて、さかんに何か言っていた。それがただならぬ事態に思えて、そのため、この場面が忘れえぬ記憶となって焼きついたので。

あれはいつだったのだろう。調べてみると、該当すると思える日食は昭和二十八年二月十四日しかない。ぎりぎり四歳だ。五歳の誕生日の三日前である。

その日、松山では午前九時三十三分に太陽が最も欠け、最大食分は四九%だったとのこと。ほぼ半分になったわけだ。もちろんその程度の欠けようでは、あたりがはっきりわかるほど暗くなったりはしない。厚い雲に空を覆われたほどにも暗くはならなかったと思う。いや、多少は暗くなって、突然冷え冷えした風が吹いてきたりしたのかもしれない。

こうした体験を、身をもって味わわせてくれたおばあさん！ 感謝する。

日食からひと月あまり経った三月末、ヒサキちゃん一家は引越していった。気づいたときには、いなくなっていた。

「本当はヒサキちゃんじゃなくて、ヒサアキちゃんだったのよ」

ヒサキちゃんとはもう遊べないと知ったときに母が言ったこの言葉が、手品の種明かしのように、心の底に虚ろに響いた。

■幼稚園に行きたかったのに

ヒサキちゃんが引越して、まだ幾日も経たないころ、ぼくの成長に強い打撃を与えたある出来事が起こった。

前段階から説き起こそう。

油揚げ業を始めた一年目、父も母も段取りがつかめず、無我夢中で走った。

「はじめのうちは毎朝三時か四時には起きて仕事にかかっとなったかのう。今思うたら、あそこまでやることはなかった。今はだいたい五時じゃ」

これは、ぼくが目覚める六時には、すでに仕事場に湯気がもうもうと立って豆腐作りの真っ最中である父に、

「何時に起きるん」

と尋ねたときの父の返事だった。

母の仕事が始まるのは父が一番豆腐を仕上げてからだから、父より少し遅い。その前に食事の用意をし、父と母はすばやく朝食を済ませていたのだろう。「だろう」というのは、父と母が朝食をとっている姿を、ただの一度も見かけたことがないからだ。

そのうちスエ子さんもやって来る。兄やぼくが起きてくると、スエ子さんに仕事をゆだね、二人にそれぞれ食事をさせる。

我が家の朝は、こうしてあわただしく始まるのだった。始まってしまえば、夕方まで、ゆっくり体を休める暇もない忙しさであった。

さてそれで本題だが、油揚げ作りの一年目、つまりぼくが四歳の頃、母は慣れない仕事のためにゆとりがなく、あわただしさの中で、ついつい大きな過ちを犯してしまった。

ぼくを幼稚園に入れ忘れたのである。あっと気づいたときは、時すでに遅し。どの幼稚園も新年度が始まる目前だった。

もうダメと知りつつも、もしかしたらと望みをかけて、母はぼくの手を引き、農事試験場の先にあった幼稚園に出かけて行った。一年前の「リヤカーショック」の際、トシちゃんとタカちゃんが「バイバイ」と手を振りながら向かった幼稚園であった。

試験場の田畑を抜けると、鮮やかな植え込みの中にぼつんと古城のように、その幼稚園はあった。表通り（といっても幅二メートルほどの畑中の道だが）から幼稚園まで、植え込みの中を細い小道が続いていた。お花畑のような植え込みの奥に正門があった。

正門はきれいな花々や、とりどりの装飾物で飾りつけられていた。幼稚園の門というのは、いつもこんなにきれいに飾られているものなのか。門をくぐりながらそう思ったことが、今も記憶に生々しい。

今にして思えば、それは入園式のための特別な飾りつけだった。

母と訪れたその日は、おそらく入園式の前日か前々日だったのだろう。

園内に子供はいらず、ひっそりと静まっていた。母は門をくぐり、園舎の呼び鈴を押した。中から女の人が現れた。幼稚園の先生か、あるいは園長先生だったのか。前もって連絡していたのかどうかはわからない。

ひとことふたこと話をすると、先生はにやかな笑顔で、ぼくらをがらんとした部屋に招き入れた。棚には絵本が並び、部屋の隅には、大きな乗り物とか、さまざまなおもちゃが積み上げられていた。初めて見る幼稚園の教室だった。

立ちすくんでいるぼくの背中に手を当てて、

「ここでちょっと待っててね。ご本を見てても、おもちゃで遊んでもいいのよ」

先生は言った。言うが早いのか、母を連れて出て行ってしまった。

がらんとした部屋にぼつんと一人取り残された。寂しさが、哀しさが、さらには恐さがつのってきた。巨大な魔物が襲ってきそうな気さえた。

たまらなくなつて、教室を出た。

廊下は教室よりもいっそうひっそりとしていた。物音一つしなかった。電灯さえ灯っていない、暗がりに包まれていた。浮かんできたのは、二階に上がる広い階段だけだった。それが魔物の世界に向かう入り口に見えた。

そら恐ろしくつて、ふたたび教室に逃げ帰った。

教室には大きな窓があった。傾きかかった太陽が強い光を射し込ませていた。ほっとした。

絵本を抜き取り、ページをくつた。心は絵本には向かわなかった。

幼稚園に入れるんじやろうか、入れないんじやろうか、見当がつかなかった。母は、

「だめかもしれないけど頼んでみるね」

と言っていた。

やがて母が戻ってきた。肩に手を置くと、目を潤ませながら言ったのだった。

「ごめんね。だめだったの。もういっぱいで入れないんですって」

幼稚園は届かぬ彼方に消えてしまった。

帰り道、夕焼けが鮮やかだった。赤、朱、オレンジ、紫……、さまざまな色合いが層をなして並んでいた。刻々とそれが変わっていった。みごとだった。母に手を取られて歩きながら、心の底からきれいと思った。

悲しみを流してくれた。永遠に忘れられない夕焼けとなった。

ぼくは幼稚園に行きそびれた。

決定的な落伍であった。

落伍がもたらした最大の問題は、集団の中に身を置く経験をスルーパスしたことだった。これは小学校に入ったとき、いかんともしがたい劣等意識となって噴き出したのだった。

■桜の木の下で

幼稚園に行きそびれたために、たちまち襲ってきた不運は、遊び相手を失ったことだった。同年のミノルちゃんとユウちゃんは幼稚園に通い始めた。一つ年上のトシちゃんとタカちゃんは小学生になった。遊び相手は年下の子だけとなった。

この悲しい状態を生み出したのは母のうっかりだった。仕事に追い立てられたがためのうっかりだった。

母は後悔した。たぶん泣きたいくらい後悔した。今さらどうなるものでもないが、罪滅ぼしにと、まだ桜が残っていたある日、ぼくを遊びに連れ出してくれた。

仕事に追われている母が、一緒に外で遊んでくれることなど、それまでないことだった。なんだから気恥ずかしかった。

親が遊び相手になってくれないのは、ぼくだけではなかった。職人や商売人の子たちはみなそうだった。幼いころから、子供の遊びはいつも子供だけ。それが当たり前だった。

ユウちゃんを、賢すぎて自分たちの仲間になじみきれないと感じたり、ヒサキちゃんを、どこか自分たちとは違うと感じたりしたのは、彼らがぼくらと同類の子でないことの無意識の勘づきからだった。

ぼくらは親から自立することを、幼いころから宿命づけられていた。

いつも道端を遊び場に行っている、粗野で下品な漬垂れ小僧。それがぼくたちだった。対して、ユウちゃんとヒサキちゃんは、親の目の届くところで育てられた、上品で理知的な「よくできる子」であった。

母は深い悲しみを胸に仕舞って、ぼくを春の野に連れ出してくれた。そこは小さな公園の中、桜の大木の下だった。花は少し散り始めていた。

花びらを拾い集めた。

母ちゃんはなんでこんなところに連れて来てくれたんじやろう。そのとき頭にあった思いはそれだけだった。

母に手を引かれて遊びに出たことが、嬉しいけれども、恥ずかしくてたまらなかった。

「見てごらん、幹に白い筋が入ってるでしょう。こういう筋があるのが桜なんよ。これで桜かどうか見分けがつくの」

このときの母の言葉は、今も消えずに残っている。桜かどうか迷ったときには、いつも必ず縞模様を探すべくなのである。

桜の根元は、あったかな日だまりだった。母と二人だけにいる恥ずかしさに堪えながら、ゴツゴツした幹に足をかけたり、集めた花びらをつぶしてみたり。生まれて初めて味わう甘えの喜びを堪能したのだった。

「桜は昔から特別な木なの。桜の枝は絶対に折ったらいかんのよ」
そう教えられたのもそのときだった。

「ツバメも特別。いじめたり殺したりしたらいかんのよ」
と教えられたとも、そのときだった。

これらが本当に昔から言われている一般的な教訓なのか、それは知らない。だが、ぼくにとっては絶対不可侵の規則となったのである。

■池のほとりの公園

たぶん同じ日だろう。桜に続いて、池のほとりの公園に行った。

その池は、かつて松山城の東を守っていたお堀の切れ端だった。堀は長い年月のうちに大方が埋められ、小さな断片だけとなり、さらに空堀となって、周囲より一段低い公園になって、今に至ったのである。底に残ったわずかな水が池を作った。

公園には滑り台とシーソーとジャングルジムがあった。どれも初めて目にする遊具だった。

最初に滑り台に上った。上がると母の頭より高かった。そこからこわごわと滑りおりた。ぐんぐんスピードが出た。足で必死にブレーキをかけた。

次はシーソーだった。母が片側を押さえてくれて、ぴよんぴよん跳びはねながらギツコンバッタンを楽しんだ。いつまでやっても飽きない遊びだった、

最後はジャングルジム。フレームの間をくぐり抜けたり、一段か二段上ったりしたが、最上段までは、とてもこわくて上れなかった。

不思議でならないのは、このときの遊びの一つ一つが、その順序とともに、今もそのときのまま思い出されることだ。

あまりの現実感に驚いてしまう。よほど新鮮な体験だったにちがいない。

池の公園には一本の裸木があった。新芽がまばらに顔を出し始めていた。母はそれを見つけると、うれしそうに、ぼくをそばまで連れて行った。

「触ってごらん、幹がツルツルしてるでしょう。どんなに木登りが上手なおサルさんでも、これではすべて上まで登れないの。だからこの木はサルスベリというのよ」

こう教わった場面も、今に生々しい。

サルスベリが母にとって特別な思い出の木であることを知ったのは、うんと後のことだった。大小学時代に高野山を訪れたときである。

小学生時代の半分を高野山のお寺で過ごした母が、僧である叔父にさまざまな本を読み聞かせてもらったのが、サルスベリの木の下だった。そのことを、学生時代、その寺を訪れて初めて知った。

母は、叔父の影響で文学少女まがいの女の子に育っていった。女学生時代に母親を亡くすという悲劇がなかったなら、母の人生は、よほど違ったものになっていただろう。

母にとって、甘く、切なく、悲哀に満ちた思い出の木、それがサルスベリなのだった。

ぼくを幼稚園に入れそこねた母の悔恨は、無心に遊んでいるぼくを見て、少しは溶けて流れて、やわらいだのであつたらうか。

■兄の運動会

幼いころの記憶を掘り起こしていると、つくづく思うことがある。四歳（まで）の記憶がどれも躍動的で、無我夢中なのに対して、五歳の記憶が色褪せていることだ。埃をかぶったようで生気がない。後ろ向きとまでは言わないまでも、下を向いている。

理由はもちろん幼稚園に行けなかったこと。この一点につきる。

遊び相手が年下の子ばかりになって、外での遊びが楽しくなくなってきた。必然、家の中での一人遊びが多くなった。

同年の友人たちが幼稚園で喜々として遊び、喜々として学んでいたはずのとき、ぼくはただ一人、土間にしゃがみこんで、土いじりなどで時をすごしていた。

仕事場の隅で蟻の行列にちよつかいをかけている記憶がある。行列の途中に木切れなどを置いて、困った蟻がどう動くかと観察する。観察は大げさだが、様子を見る。これはなかなか楽しかった。楽しいといっても、一人しゃがみ込んでする遊びだ。陰気で生気のない遊びであったのは否めない。

あるいは、行列の途中におがくずで城門のあるお城を作り、城の中に蟻を導いて遊ばせている記憶。これも楽しかった。

小さな起伏が砂丘のように波打っている玄関土間でビー玉を転がしている記憶もある。ビー玉は最後に勢いをなくし、どの穴に入ろうかとためらっている。左の穴に入るのか、右の穴に入るのか、それとも落ちずに丘の上にとどまるのか。そんな最後のためらいを見つめているのも楽しかった。

だが何と言おうと、どれもこれもうつむいた遊びだ。友人たちとはしゃぎ回った、四歳のころの活気ある遊びからはほど遠いものだった。

成長の大事なステップであるべきこの時期を、ぼくは集団の中で遊ぶ体験から切り離されたのだ。一人、うつむいたまま過ごしていた。ぼくの五歳は、冬の寒さに耐えている樹木、年輪の成長が止まった冬の樹木であった。逼塞の時代であった。

とはいえ、逼塞の中にも、ほのかな光明を放つ記憶がないわけではない。

思い出されるのは、母に連れられて兄の運動会を見に行ったときのこと。

兄は、その春設立されたばかりの中高一貫男子カトリックスクールに、一期生として入学した。「一流の国立大学に入学し得る深い知性と、世界のどこへ出しても恥ずかしくない高い徳性を涵養する」

ことを目標とした学校だった。はっきり言えば、進学校の空白地域であった四国の地にカトリック系の進学校を作ろうという、ドミニコ修道会四国管区の方針のもとに作られた学校だったのである。

ぼくが五歳のとき、兄は中学一年生だった。

その春設立されたばかりなら、この年、学校には兄たち中学一年生しかいなかった考えるのが自然だ。だがそうではなかった。というのは、廃校を予定して新たな生徒を取らなくなった女子高を、法人ごとそっくり引き継ぐ形で、ミッションスクールが設立されたのだったから。

兄が入学したとき、高二と高三に女子がいた。彼女らが卒業してしまうまでの二年間、兄たちはいわば、高校のお姉さんたちとの共学だったことになる。

そして、秋、最初の運動会が開かれた。母に連れられて見学に行った。

この一日だけは、逼塞の五歳の中で、記憶が特異に輝き、鮮明である。

上一万から古町駅まで市内電車の城北線に乗った。古町駅は市内電車と郊外電車が交叉する結節点の駅である。加えて電車の修理工場や、格納庫などもあって、なかなか大きな駅だ。駅を出ると、学校まで五分か十分。

途中の光景に強い好奇心をそそられた。それが郷愁とさえ呼べる記憶となって、後々まで頭の隅に焼きついたのである。

なにが好奇心を引いたかと言えば、それは線路に沿った柵だった。学校までの半分ほどは郊外電車の線路に沿っている。線路沿いの柵が延々とどこまでも続いていた。幼い目に、それは地の果てまで続く長い柵だった。

柵の柱は、使わなくなった枕木とか、古い線路を切断した鉄柱とかで作られていた。それらが等間隔に並んでいた。柱と柱の間には、太い鉄線が横に何本も張り渡されていた。針金という名では呼べそうにない太さだった。

大人の目にはなんの興味も引かないであろうその柵に、ぼくは言いようのない魅力、誘惑の力を感じたのだった。初めて見た得体の知れないもの、不思議なものだったのである。

鉄線を握って、足を乗せ、渡り歩いた。幼い子なら誰もがするであろうこの遊び。当たり前この遊び。だけどそのとき、どこまでも続く無限の難所を渡って歩く、ぼくだけの神秘、ぼくだけの冒険になったのである。

うつむいてばかりだった日常が、突如、外に向かってはじけ散った。

この柵渡りの記憶は、よほど強く頭に焼きついたようで、後に東京からUターンして、そのミッシェンスクール（ぼくが卒業した学校でもある）の数学教師になったとき、なつかしくって、あの柵の風景が今もあるだろうかと、探しに行ったことがある。

なんと当時のままのたたずまいでそこにあった。無限を感じることはもうなかったけれど、ふつと涙が出そうになつakashくなつた。

学校に着くと、木造校舎の真ん中にトンネルのような通路があった。それを抜けると運動場だった。

運動会は始まっていた。父兄用のテントは満席だった。立ち見の客も多かった。

母は後方に立ち、ぼくは隙間をくぐって、最前列に出て行った。だが、競技には大して興味が湧かなかった。砂ぼこりが立つ運動場で、次々に、同じように走るばかりだったのだから。

競技の様子はほとんど記憶に残っていない。

覚えているのはただ一つ。母にトントンと肩を叩かれ、

「小さい子が出る種目があるんですって。キヨシも出てみる？」

そう言われたことである。首を横に振ったが、無理やり運動場に押し出されてしまった。

何が何だかわからないで、キヨロキヨロしながら立っていると、係の女子生徒がやって来た。

「あつちよ」

と、ずんずん手を引かれて運動場の真ん中まで連れて行かれた。

小さい子が大勢集まっていた。みんな訳知り顔に張り切っていた。何だかさっぱりわからないで、ぼんやり立っているのはぼくだけのようだった。

横一線に並ばされた。そのときになつても、何をするのかわかっていなかった。いきなりピストルがズドンと鳴った。横にいた子が走り出した。そうか、走ればよいのか。ようやく事情が呑み込

めた。一呼吸遅れてスタートした。

前方で手を振っている係の人たちの方へと走っていった。距離はせいぜい三、四十メートル。だがゴールがとてつもなく遠くに感じられた。

着順などはどうでもよい。とにかくゴールした。ゴールすると、待ち受けていた係の女子生徒から、おみやげの袋を手渡された。それを手に提げ、恥ずかしいような、嬉しいような、情けないような、誇らしいような、複雑な気持ちで、母の元に走って戻ったのだった。

兄が走る姿は、

「兄ちゃんが走つとるよ。あれよ、あれよ」

とでも母が言ったので、多分気づいただろうし、見もしただろうが、覚えていない。昼の弁当も兄と一緒に食べたはずだが、なぜかそれさえ覚えていない。

そうだ、もう一つ覚えている。仮装行列だ。下駄を履き、偉そうにちよびひげを生やした人とか、着物を着て竹馬に乗った人とか、いろんな人が次々に歩いた。やはり兄がどれたったのかは、覚えていない。

次に思い出すのは、帰りの道で、またもあの柵に、今度はなんだかなつかしささえ覚えて遭遇したことだった。

同じ道を駅まで歩くのだ。出逢わないはずがない。だが、幼いぼくには思わぬ遭遇だった。「あっ」と声を上げたくなるほどなつかしく感じた。またも鉄線渡りに熱中した。

逼塞の五歳にあつて、あの一日だけは、澄んだ青空のもと、身も心も解き放たれた一日となった。鉄線がぼくを解放してくれた。今もその一日が神々しく輝いている。

■天皇さんを見たぞ

もう一つ、強く印象づけられている五歳の記憶に、昭和天皇の行幸がある。

土間で土いじりしていると、

「天皇さんが通るけん、見に行こう」

学校から帰った兄に突然言われ、手を引かれて出て行った。

我が家は電車通りから一筋北の裏通りにある。電車通りに出てみて驚いた。何重もの人垣。人、人、人。何も見えない。

人垣の後ろをうろろ歩いて、空いたところを探しまわった。どこまで行っても黒山の人。とても隙間などありそうになかった。ところがだ。歩いて行くうち、割り込めそうな隙間を発見した。上一万交差点の広々とした広場の一角だった。そこは隙間と言うより空間だった。簡単に最前列に出ることができた。

なんじゃ、空いとるじゃないか。馬鹿じゃなあ、みんな。

秘密の裏口を発見したような気分になった。

やがて道後方面から車の列がやって来た。

「あっ、あの自動車じゃ。あれに天皇さんが乗つとるぞ」

兄に言われて、車の中を凝視した。車内は薄暗くてはつきりしない。それと定かでないまま、通りすぎてしまった。道が左に折れる角に陣取っているから、見えると、たちまち後ろ姿に転じてしまう。その付近に人がまばらであった理由はこれだった。

だがほんの一瞬、数秒のことだが、影のように、車の中の昭和天皇を目に納めた気がした。確信はないが、最も上等な車の中に、かすかに手を振る人影を見た。天皇でなくて、誰が手を振ったりしよう。

「天皇さんを見たぞ」

兄は誇らしげに言い、しかも確信ありげだった。やはり、そうだったのだ。今となつては、夢のようにぼんやりした残像である。それでいて、間違いないと断言してもよさそうな姿であった。

昭和二十八年十月、第八回国体が愛媛で開かれ、その開会式に出席するための天皇の行幸だった。ぼくには、天皇さんを見たことよりも、待ち構える黒山の人だかりの方が、よほど衝撃だった。あれほどの人の群がりを見たのは初めてだった。それ恐ろしくてたまらなかった。

■祖母の死

五歳の記憶でもう一つ忘れられないのは、父方の祖母の死である。人の死というものを、そのとき初めて目にしたのだった。

母方の祖母は、ぼくが生まれるよりはるか昔、母が女学校三年生のとき、世を去った。祖母とも呼べない若さで世を去った。母から

「キヨシにはおばあさんがいたのよ。今生きてたら、○△歳くらいになってるかねえ」
と何度も聞かされたが、想像さえできなかった。

ぼくにとつて、祖母はただ一人。父方の祖母のみだった。祖母のかすかな記憶はいくつもあるが、どれもあまりに幼いところで、霞か霧のようにぼやけている。

濃密に接した思い出はただ一つ。五歳の秋のことである。

その日、父と母とともにバスに乗り、父の実家に出かけたのだった。地の果てに行くように遠い旅だった。

降りたバス停には、埃をかぶった古いベンチがあった。

地の果てまで来たと思っていたのに、ぼくらを降ろすと、バスは坂道を、もっと遠い地へと下って行った。えっ、まだ向こうに行くの。驚いた。不思議でならなかった。

バス停から狭い小道に入った。林の中だった。両側から高い生け垣が迫っていた。薄暗かった。父の手を握って恐怖に堪えた。やがて道が開けて、地蔵の前に出た。地蔵から坂道を下ると、父の実家だった。

表座敷で父と母が祖父に挨拶を始めると、いつもなら、すぐに表に飛び出して、庭で遊んだり、屋敷の前の水車を眺めたりするはずなのに、その日は祖母が、

「まあちよつとここにお座り」

と、ぼくをつかまえ、茶の間で珍しい話を始めたのだった。代々伝わる家の歴史とでも呼ぶべき話だった。二つあった。

一つは、箱膳のことだった。

「昔は大人も子供も、みんなめいめい自分のお膳箱を持ってね、それを前に置いてご飯を食べたんよ。引き出しがついた箱みたいなもの、箱膳っていうんだけどね。中にお箸やお茶碗やお皿

が納まるようになって、なかなか便利なもんじゃった。今みたいに、みんなでちゃぶ台を囲んでご飯を食べるようになったんは昭和になってからじゃろうかねえ」

そう言って、納戸の奥から何かを取り出してきた。

「ほら、こういうもんなんよ。ええと、ここにあんたの父ちゃんの名前が残ってる。父ちゃんが子供のころ、これで毎日ご飯を食べとったんよ」

父がこの家で生まれ、この家で育ったことを知らないわけではなかったが、毎日ここでご飯を食べたという生々しい事実を突きつけられると、なんだか不思議で、信じられない気持ちになった。だって、父ちゃんは昔からずっと、ぼくと一緒に、ぼくの家でご飯を食べてるじゃないか。

父には、ぼくの知らない遠い昔があることを、痛烈に知らされたのだった。

もう一つは、先祖代々伝わってきた刀剣だった。裏座敷の長押の上に掛かっていた。

父の実家は藩政期からの古い農家だ。ありきたりの農家だ。だけど、ありきたりに似つかわしくなく、神々しくも勇ましく、刀剣は鎮座していた。

「昔、ご先祖様が、伊予の殿様からいただいた大事な家宝なんよ」

祖母は言った。それがいつのことで、なぜいただいたのかは語らなかった。今なら見当がつく。

幕末の長州征伐の際、幕府方についた松山藩は、父の実家付近の農民を集めてにわか仕立ての軍を作った。長州の寄せ手を防ぐためにと、瀬戸内海と松山平野を一望できる村の台地に陣を張った。

さらに勇者を募り、軍船で兵を長州まで送った。長州ではさんざんな目に遭ったのだったが、長州に渡った者には、太刀が一振り与えられたと伝えられている。

長押の刀剣は、きつとそのときのものにちがいない。

祖母がどうしてその日、こんな話をしたのかはわからない。体の奥に察するものがあつたのだろうか。

季節が一つ巡った、この年の冬十二月、祖母は帰らぬ人となった。

葬儀が終わると、柩は村の若い衆の肩に乗せられ、家を出た。葬列が蕭々と野道を進んだ。空っ風が舞う寒い日だった。水車の脇の細道を抜け、坂を登って古い地蔵の前を過ぎ、村はずれの墓地までやって来た。

人夫が二人、ちょうど穴を掘り終えたところだった。噴き出す汗を手で拭い、二人は穴の縁から中を覗きこんでいた。

柩に縄がかけられた。僧侶の読経が響く中、柩は静かに穴の底へと下ろされていった。父にうながされ、最後にぼくも一握りの土をお棺にかけた。

祖母の死は強烈な印象となって、記憶の襞に焼きつけられた。

初めて目にした人の死であった。しかも、最初にして最後の土葬であった。忘れられない五歳の記憶なのである。

第二章 小学生時代

■悲しい思い出

五歳の一年間を、小枝にぶら下がった糞虫のように逼塞してすごしたぼくは、まるまる一年間の発達遅れとも言える状態で入学したのだった。しかも二月生まれだ。ただでさえ一年遅れ。つまり、二年遅れで小学校に入ったも同然だった。

昼休み、子供らは一人残らず校庭に出て遊んでいた。追いかけてっこをしたり、地面に線を引いて陣地ごっこをしたり、ジャングルジムによじ上ったり、ブランコをしたり、なわとびをしたり。動き回る彼らの影と歓声で、校庭はめくるめく光の渦をなしていた。

それを廊下の窓から、一人ぼつんと眺めていた。
悲しかったのか。寂しかったのか。

いやそんな思ひさえ、頭には浮かんでこず、彼らの中に加わりたいたいと思わなかった。加われるものとも思っていなかった。そもそも加わらせてもらえるものと思っていなかった。彼らと対等の地平にいたとは、考えてもいなかった。

彼らとの間には越えられない一線がある。一線というより、高い壁がある。それにはつきり勘づいていた。

住んでいる世界が違っていた。

彼らはみんな入学前からの仲間なんだ。幼稚園からの仲間なんだ。ぼくが入りこむ余地なんて、最初からありつこないのだ、入れてほしいと言ったって、追い払われるだけだろう。

彼らは一段上の世界に住んでいる。ぼくは下の世界。入学したときからそうなっているのだ。孤独と疎外感と劣等感に、入学当初からがんじがらめに縛りつけられていた。

映画のスクリーンを見つめているように、廊下の窓から、めまぐるしく動く光の渦を眺めていた。そこにあるのは、手の届かない向こう岸の世界だった。無縁な世界だった。

そのときである。肩にあったかなものが触れた気がした。かすかな重みさえ感じられた。振り返ると、担任のI先生が、腰をかがめて立っていた。

「どうしたの。外に出てみんなと一緒に遊ばないの」

ぼくは黙っていた。答えようがなかった。答える言葉がなかったのである。

先生はにっこり微笑んで、言葉を継いだ。

「一人でいるよりも、みんなと一緒に遊んだ方が楽しいのよ」

それでも黙っていた。思いを伝える言葉は見つかりそうになかった。

本当は遊びたいのだ。だけど、仲間に入れてくれるはずがない。彼らは一段上にいるのだから。それをどう伝えればよいのだろう。涙がこぼれそうになるのを必死にこらえて、ぼくはやはり黙っていた。

「大丈夫よ、心配しなくていいの。先生と一緒に行ってあげるからね。みんなもきつと仲間に入れてくれると思うよ」

先生は手を取って、校庭に連れ出してくれた。クラスの男の子たちが遊んでいるところまで行くと、声をかけた。

「みんな、奥村君も入れてあげてね」

彼らはびつくりして振り返った。何人かが「うん」とうなずいた。

ぼくをのけ者にしようとしている子など、一人もいなかった。というより、ぼくのことなど気にもかけていなかった。それだけのことだった。

彼らは直ちに、元の遊びの世界に戻ってしまった。

先生は、陣地ごっこに夢中になっている彼らの方へ、そっとぼくを押しやった。半歩、また半歩、腰が引けた犬のように前に出ていった。

先生の圧力に押されるうちに、とうとう輪の中に入ってしまった。

彼らはぼくが入ろうが入るまいが、気にもかけなかった。ことさら「おいでおいで」ともしないかわりに、「あっちに行け」ともしなかった。仲間はずれにされていると思っていたのは、勝手な思い込みだった。彼らはぼくのことを、仲間とも、仲間でないとも思っていないかった。一緒に遊ばないなら遊んだらいい。それだけのことだった。

これを知ったのは、大きな前進だった。

Sケンと呼ばれていた遊びだった。輪に入りはしたものの、遊び方がわからず、ぽつんと立っていると、

「ぼくらの方に入れや」

誰かが言ってくれた。初めて存在が認められた瞬間だった。うれしかった。

だが、ルールがわからず、人を真似てピョンピョン跳ねている自分が哀れでならなかった。

先生はニコニコしながら見つめていた。きっかけは作ってくれたが、一線を越える手伝いはしてくれなかった。崖から突き落とされた子ライオンのように、必死にもがき、必死に真似た。次第にルールらしきものがわかってきた。やがてはついに、みんなの中で嬉々として駆け回っていたのだった。

その日のぼくは、悲しみ半分、喜び半分だった。片面にはべったりと先生への感謝の思いが貼りついていて、もう片面にはわずかばかりの恨めしさが貼りついていて、何もわからないのに、いきなり背中を押されて崖下に突き落とされたことへの恨めしきだった。

存在がほんの少し認められただけだった。劣等感と疎外感を振りほどくには、まだまだ長い試練の日々が必要だった。振りほどけるのかどうかもわからなかった。

彼らとは住んでいる世界が違う。彼らは上の世界に、ぼくは下の世界に住んでいる。これは、振りほどきようなない感覚だった。そして現実だった。「ぼくらの方に入れや」と言ってくれた子も、上の世界の子であった。食卓の下をうろついていた犬に、ホイと憐れみの肉片を投げってくれた、それだけのことだった。悲しかった。

無意識の底に貼りついていて劣等意識は、結局、今にいたっても払拭しきれない気がする。時折ふっと表に出てくる。

自分を人の輪の外へ、部外者へと追いやろうとするその性向は、青年期から大人へと成長する過程で、さまざまに粉飾され、糊塗されていった。だが、それは所詮、ペンキで上塗りされただけのこと。真実のところ、消えずにいつまでも残っている。ワイワイ騒いでいるよりも、孤独でいることを好む性向。それが心の奥に宿命的に貼りついていて、

人に向かって自己を主張するとか、そのための策を練るとか、つまり人の中で身を処すことに労

力を費やすよりは、一人机に向かって、読んだり書いたり考えたりしている方が、よほど楽しいのだ。それが性に合っているのだ。性分だから、これは変えようがないのだ。いかに努力しても、がんばっても、根本のところは決して変えることができないのだ。

それもこれも、五歳の冬の、あの逼塞の一年間が、ぼくの心の根っ子に載せた重しなのかもしれない。人よりも劣っているという意識がそうさせるのだ。

■稲村君

I先生は、今にもこぼれ落ちそうなぼくの危うさに、入学当初から気づいていたにちがいない。授業中も、話を聞いているのか聞いていないのかわからないほど、ぼんやりしていることが多かっただろうから。

先生の質問に、多くの子が「ハイ」、「ハイ」、「ハイ」と元気よく手を上げた。背筋から指先までまっすぐ伸びたその姿。初めて見たとき、あっけにとられた。異様だった。すぐ横にいた女の子のピンと伸びた背と指先が、今も脳裏から離れない。

ぼくが住んでいる世界とはまったくかけ離れた、異次元の世界が、初めからそこにあった。取り残されている感覚、落ちこぼれている感覚が、体の芯にずしんとのかかってくる。

彼らは、幼稚園でか、親によってか、手の上げ方を十分すぎるほど練習させられていた。何の訓練もせず、そのようなことをするものだとも知らないのは、ぼくだけのようだった。

遊びの世界だけでなく、勉強の世界においても、すでに出発点から、最下段にいた。

「すごいなあ、みんな。ぼくとはちがうなあ」

どうしようもない劣等意識の芽生えであった。

思い起こせば、小学校の六年間を通して、「ハイ」と手を上げたことは一度もなかった。

とはいえ、先生の話や授業の内容がわかっていないのではなかった。自分で言うのもなんではあるが、授業はちゃんと理解できていた。問いかけに対する答えも、たいていの場合、用意できていた。名指しされれば答えられただろう。しかし、わざわざ手を上げて答えないといけない必然が、感じられないのだった。

どうせ誰かが答えるはずだ。その答えがぼくの考えよりも賢いなど思えばそれもよし。なんだその程度かと思えば、それもまたよし。それだけのことだ。それでよいではないか。自分からわざわざ言い張るほどのことではないではないか。

学年が進むにつれて、そんな横着な考えさえ意識するようになってきた。

だが、一年生のその当時、ぼんやりした元気のなさや、みんなの中に溶けこむことのできない内気さとか、孤独な様子などといったものが、I先生の心配事にならなかったはずがない。何かのところに、先生から母にもそれが伝えられたのだろう。

母も気に病んで、ぼくを一人のクラスメイトと親しくさせることにした。おそらくPTAの会合のときにでも、母親同士が先に親しくなっていたのだろう。

ある日、家から歩いて十分あまりの閑静な住宅街に、母はぼくを連れて行った。ぼくの町とはたわずまいがまるでちがっていた。高い塀に囲まれた豪壮な屋敷が、偉容を誇って並んでいる。どの家もしんとして、怒鳴り声や笑い声が響いてきたりはしない。ぼくが知る「町」というものにぎわいや生活感がそこにはなかった。眠った町、死んだ町、息をしない町、そんな気がした。

そのうちの一軒の門を母はくぐった。呼び鈴を押すと、母親とともに出てきたのは、意外にも教室で顔見知りの子、稲村君だった。何だかちよつと照れくさかった。

彼はぼくに似て、恥ずかしがり屋で、口数の少ない子であった。親近感と安心感を抱くことのできる数少ない子の一人だった。といっても、一緒に遊ぶことはなかった。隔てる段差はやはりあった。彼はおとなしくて恥ずかしがり屋だが、明らかに上の世界に属していた。ぼくは勝手にそう思いこんでいた。なぜなら、彼には上の世界の子にも友だちが多く、一人でぼつんとしていることが少なかったから。ぼくの世界の子ではなかった。

彼が玄関口に出てきたのにはびっくりした。ほっと安心もした。

誘われて、家上がった。玄関も廊下も、置かれている家具類も、何もかもがぼくの家とは違っていった。段違いだった。初めて見る上流階級の家という感じだった。

二階の子供部屋に上がっていった。自分に近い子という気分は常に感じていても、格別親しくしていたわけではなかったが、遊んでいるうち、心が通じ合ってきた。おだやかでおとなしい子であるにもかかわらず、何かの拍子に突然わがままになったり、荒々しくなったりする。ヒサキちゃんに似ているなと思った。

しばらくすると、近所の子が遊びに来た。二人いた。豊川君と松尾君という子だった。クラスが別で、初めて見る子たちだった。

こんな状況になると、新しい二人に稲村君を奪われたようで、嫉妬を抱き、疎外感に沈んでしまうのがぼくだろう。実際、そんな気分になった。しかし、それはいらぬ心配だった。不思議なくらい自然に、彼らはぼくを受け入れてくれた。瞬く間に四人のグループができた。

ぼくら四人は、実を言うと、後々までずっと、高校生から大学生、さらには社会人になるまで、長いつき合いになるのだった。雪だるまのように周りに新たな親友をくつつけながら。

最初の出逢いの瞬間から、不思議な縁^{えん}で結ばれていたぼくらだった。

やがてみんなで下に降り、廊下や座敷でかくれんぼをした。そのときつくづく思った。置かれている家具や装飾品は、ぼくの家では考えられない高級品ばかりだなど。ぼくが住む世界とは二段も三段も家の格が違うなど。子供ながらにそう感じた。

にもかかわらず、一緒に遊べるのが、不思議でならなかった。嬉しかった。教室で味わう劣等感や寂しさは、稲村君の家にいるとすっかり吹き飛んでいた。

上の世界に受け入れられている。というより、上の下もない世界で遊んでいる。この事實はまったく新しい発見だった。ほんの少し、少しだけだが、自信めいたものが生まれたようでもあった。

稲村君の家には、高尚な文化の香りが満ちていた。ヒサキちゃんの家にもそれがあって、四歳のぼくを魅惑し続けたのだったが、ヒサキちゃんちと比べても、香りは段違いに深く芳醇だった。思わず知らずその芳香に酔っていた。

極めつけは、居間に敷いていた巨大な地図だった。一枚の地図ではなくて、小さな地図を何枚も貼り合わせて作った、畳二枚分ほどの巨大な地図だった。

「愛媛県の地図なんよ」

お母さんが教えてくれた。

「このくねくねした道をこう登っていったら、ほらホケツ峠というところに着くの」
などと、あれこれ教えてくれたが、そんなことはどうでもよかった。興味も湧かなかった。それ

よりも、こうした世界があることが、つまり部屋いっぱい巨大な地図を広げて、それでお母さんが何かを調べているという、こんな世界がぼくの家からさほど遠くもないところにあるということが、ぼくにはロケットでいきなり天空高く打ち上げられたほどに衝撃だった。なんとも言えず魅惑的だった。あまりの高尚に失神してしまいそうだった。

思い返すと、あれは国土地理院の五万分の一の地図だった。山歩きには必須のアイテムだ。それを継ぎ合わせて、裏から貼ったものだった。あれほど大きな愛媛県の地図を、あのとき以来、いまだに見た覚えがない。

その後、稲村君の家には何度遊びに行ったかしのれない。

こうして大親友になった稲村君だったが、二年生からはクラスが別になり、いつの間にか疎遠になった。どうしてそうなったのか、自分でも不思議だった。

ぼくらの学年は十クラスほどもあり、しかもどのクラスにも生徒が六十人くらいいた。クラスが別になってしまうと顔を合わせる機会がなくなって、疎遠になっていくのは仕方なかったのかもしれない。

六年生まで、もはや稲村君とは同じクラスになることがなかった。ときたま廊下ですれ違っても、互いに恥ずかしそうに照れ笑いを浮かべるだけとなった。

中学も高校も一緒ではなかった。彼は公立中学から公立高校に進み、ぼくは兄と同じ私立中学・高校に進学した。そのまま永遠に友だち関係が消えてしまっても不思議ではなかった。だが、偶然の働きによって、高校一年のとき再会した。仲立ちは松尾君だった。

松尾君とは五、六年生のとき同じクラスになった。彼のひょうきんな性格よって、ぼくらはたちまちかつての親友関係を復活させ、それが高校生まで続いていたころ、彼に誘われて稲村君の家に行っただった。すっかり疎遠になって、存在さえ忘れかかっていた稲村君に久しぶりに会った。

子供時代の姿は一変し、引っ込み思案の性格さえも脱ぎ捨てて、彼は立派な高校生に成長していた。ぼくもまた、彼の目にはそう見えたのではないか。互いに目を見張り、気恥ずかしさに堪えながら、かつての親しみの情を復活させた。

豊川君とは同じ私立中学・高校に進んだため、浅くもなく深くもない遊び関係を続けていたが、稲村君との再会を機に、ふたたび昔の仲間意識を取りもどした。

こうしてぼくら四人は、休日になると集まって、馬鹿笑いをしたり、野球を楽しんだりするグループになっていた。ぼくらの周りには、その友人、そのまた友人と集まってきて、いつの間にか草野球ができるほどになっていた。もちろん指導者はいない。土曜の午後や日曜日に広場に集まり、そこに別のチームが来ていれば試合を申し入れ、いなければ自分たちで、投げたり打ったりする。そんなことが好きでたまらぬ連中の集まりだった。

大学に入ると、再びバラバラになった。しかし長期休暇で帰省するたび、必ず集まって、野球や麻雀を楽しんだのだった。

思えば、母親同士がたまたま気心が合って親しくなったという偶然と、I先生による「誰か親しい友だちを見つけてあげてください」というアドバイスがなかったならば、稲村君との親密な関係は成立しなかっただろう。さらには、稲村君の家に連れて行かれた日、たまたま豊川君と松尾君が遊びに来たという第二の偶然がなかったならば、ぼくら四人の親友関係は成り立たなかったにちがいない。

人生は偶然の積み重ねによって作られていくものだ。つくづく思う。予見された道を必然のごとく歩む人生なんてあるわけがない。あれば、それはなんとつまらない人生だろう。

■ラジオ体操

一年生の夏休みの初日だったと思う。幼稚園に行っていないぼくはラジオ体操というものを知らなかった。学校でもらったカードを首にぶら下げ、どうしようかとためらいながら、家の前に立っていた。そこに近所の子たちが通りかかった。奥でぼくがどうするかと見守っていたと思える母が、すつと顔を出し、

「この子も一緒に連れて行ってね」

と声をかけた。連れ立ってきたのは、幼い頃からの遊び友達であるトシちゃん、ユウちゃん、それにトシちゃんの二つ上の兄さん、ユウちゃんの三つ上の兄さんだった。

普段は一緒に遊ぶことのない兄さんたちがいるのに気後れし、その一行が人さらいか何かのように見えてしまった。怖くてそつと母の後ろに隠れた。すると、一瞬のためらいもなくトシちゃんが近づいてきて、ぼくの手を取り、

「一緒に行こ」

と声をかけてくれた。その声のなんとやさしく、あたたかかったことか。心はまたたく間に和んでとろけ、不安はどこかに吹き飛んでしまった。

トシちゃんの繊細な気配りと、人の心の奥まで届くやさしさは、ぼくら遊び仲間の中で出色だった。この場面を思い起こすたび、マツチ売りの少女が雪の中でマツチを擦って手を温めるほのかなぬくもりと明るさを感じてしまうのだ。今でもトシちゃんには感謝するばかりだ。

首にかけたカードをぶらぶらさせながら、トシちゃんについて行った。

こんなとき、不思議にも、同い年のユウちゃんは、うんと年上の先輩に思えてしまうのだった。ぼくのことなどまったく気にかげず、一人で川の中をのぞいたりしながら先に立っていく、一つ年上のトシちゃんの方が、ユウちゃんよりもはるかにぼくには近い存在なのであった。

途中、ミノルちゃんとタカちゃんが、それぞれの家の前で合流した。

みんなでぞろぞろ歩いて、着いたところは上一万交差点。

そこは交差点であり、もちろん道路なのだが、だだっ広い広場でもあった。朝のその時間、通る車などあるはずはなく、広場は町のラジオ体操会場なのだった。すでに近在の老若男女が広場を埋めていた。

まもなく角の電気店から、大きな拡声機で歌声が流れ始めた。

「あーたーらしい朝が来た、きぼーの朝だ。……………」

続いて、体操指導のアナウンサーが張りのある声で

「全国のラジオの前の皆さん、おはようございます。今朝は○○県△△町にお邪魔しております。ここは全国一の生産高を誇る□□で名高い町でございます。……………。すでに私の前には、何百人もの方々が集まっております。みなさん、おはようございます」

すると、一斉に

「おはようございまーす」

と、集まった人々の（特に子供の）大きな声がラジオから響いてくる。事前練習が行き届いてい

るのがわかる。

それが静まると、アナウンサーの声とともに、ピアノ伴奏に乗って体操が始まるのだった。

そうか、これがラジオ体操というものなのか。事情が呑みこめてきた。なんだかわくわくしてきてた。まわりの人たちの体操を見て真似ながら体を動かした。中には、体を曲げるところで曲げもせず、ただ腕をブラブラさせているだけのふざけ者もいた。こういう子はどこの世界にも必ずいるものだ。

終わると、トシちゃんに手をとられ、今度ははんこ押しの子の前に並んだ。はんこ押しは三、四人いた。どの子の前にも長い行列ができていた。

はんこ押しは六年生の、それも女の子の仕事であった。なぜ女の子だったのか。女の子ならきちんとやるが、男の子だとふざけていい加減。そんな先入観がラジオ体操を指導する大人たちの中にきつとあったにちがいない。そうした偏見が当たり前の時代であった。

名前の入った認め印を押してくれる子もいれば、竹筒の丸い印だけを押してくれる子もいた。ぼくにはどちらでもよかった。毎日、カードにはんこが一つずつ増えていきさえすれば、それでよかった。それがなんだか出世していくようで、誇らしくてたまらなかった。

ラジオ体操の帰り道、それぞれの家の前まで来ると、

「バイバイ、またあとで遊ぼう」

互いに声を掛け合って、一人また一人と抜けていく。

これが夏休みの一日の始まりであった。

■鞍馬天狗だあと見えなかったぼく

二年生の冬だった。路地の奥に空き家があった。そこがぼくらの絶好の遊び場になった。

なぜそうなったかと言うと、大工の棟梁であるトシちゃんが空き家の修理を依頼され、若い衆がそこで仕事を始めたからだだった。

修理のため、玄関は施錠されずに開け放たれた。そこからぼくらは侵入し、隅から隅まで探検して回った。あらゆる場所が冒険ごっここの舞台になった。

若い衆はしばらく黙認していた。といっても、すぐに叱られて追い出されたから、空き家が遊び場だったのは、せいぜい一時間かそこらだったのだろう。だけど、それがあまりに楽しかったものだから、記憶の中では、一日中、いや何日もそこで遊んだように思われる。不思議なものだ。

家の中はがらんどうだった。家財道具はすっかり運び出されて、押し入れから何から、どこもかしこも空っぽだった。ぼくらは納戸やトイレや風呂場さえ隠れ場にして、思う存分かくれんぼをした。つるつるした廊下のスケートリンクですべり回ることもできた。

一緒に遊んだのは、トシちゃん、タカちゃん、ミノルちゃん、それとぼくの四人だった。ユウちゃんは、こういう「いけない遊び」には加わらないのである。

二階で走り回っていたとき、トシちゃんがおもしろい遊びを思いついた。押し入れはふすまが取り外されて中がむき出しになっている。その上段を舞台にして鞍馬天狗の真似をしようというのである。

トシちゃんが手本を見せた。上段に這い上がると、舞台の上で棒きれを構え、ひとしきり架空の敵と斬り合いをしたのち、見得を切り、「鞍馬天狗だあ」と大きく叫んで、棒を振り下ろしながら舞

台から飛び降りた。

ぼくは畳の観客席に座り、うまいなあと感心する。まさか自分がやることになろうとは夢にも思っていないかった。すると、

「さあ、これをみんなでやるんじゃないぞ。わしはもうやった。次は誰がやる」

どきっとして心臓がパクパクし始めた。だが、心配するより先に、タカちゃんが立ち上がった。タカちゃんは気が小さくて恥ずかしがり屋だ。でもミノルちゃんやぼくに先を越されては三年生の顔が立たないとも思ったのだろう。

舞台上上がった。そして、トシちゃんのように斬り合いをした。だが、照れくさそうにやるものだから、剣さばきも身のこなしもぎこちない。腕が縮こまって、何とも情けない鞍馬天狗になった。見得もうまくは切れず、最後に小さな声で「鞍馬天狗だあ」と叫んで飛び降りた。それでも、なんとかやるにはやった。

タカちゃんにできたんなら、ぼくにもできるかなあ。そう思ってみるが、やっぱりできそうになかった。逃げ出したい気持ちだけがふくらんでくる。

こんなぐずぐずした思いを蹴散らかすように、ミノルちゃんがさっと立ち上がった。やりたくてうずうずしていたのだ。

ミノルちゃんはひょうきん者だ。こういうことは得意中の得意。目の前に本物の敵がいるかのように、にらみ合ってじりじりと間合いを詰めたり、突然斬りかかったり、ピョンと跳び上がって相手の剣先を避けたり、腰をひねってよけたり、また上段から斬りかかったりと、みごとに鞍馬天狗を演じていく。

「うつつつぶ、貴様もさすがよのう。じゃがそこまでじゃ」

こんなアドリブまで加えたと思うと、最後はバサツと相手を斜めから切り倒した。そのときの腰の入れようも、切ったあと、にたつと笑みを浮かべて見得を切ったところも、本物の映画スターそっくりだった。最初にやったトシちゃんの手本がかすんでしまうほどだった。そして最後に、

「どうじゃ、まいったか。わしは鞍馬天狗じゃあ」

そう叫んで、剣を振り下ろしながら舞台から飛び降りた。

あつけにとられて見とれていたが、ミノルちゃんが飛び降りると、いよいよ心臓が破裂寸前になってきた。最後は自分の番だ。そう思うと、トクトクと音を立てていた血が、急にすうっと引いていきさえた。

この遊びはもうここでやめになってくれたらええのになあ。強く念じるが、子供の世界に容赦などない。

「さあ、次はキヨシちゃんじゃ。やってみい」

みんながはやし立てる。ぼくは手足がこわばって立ち上がることもできない。それでもさらに

「キヨシちゃんじゃ、キヨシちゃんじゃ」

はやし声はどんどん高まっていく。こうなってはもう逃げられない。しかたないから、膝をガクガクさせながら立ち上がった。そしてなんとか舞台に這い上がった。

押し入れの上段に立つと、下から見上げていたのとは別世界だった。ぽつんと一人、雲の上に突っ立っているようで、全身から血がさらに引いていく。

「さあ、キヨシちゃん、やれやれ。鞍馬天狗やれやれ」

谷底から一斉に声が轟いてくる。

突っ立ったままじっとしているわけにはいかない。覚悟を決めた。棒きれを構える。だけど手足が動かない。相手もいないのに斬り合いの真似などできるわけがない。

ぼくは持って生まれた性分だろうか、自分以外の誰かになりきってフリをするということが絶対にできない質たちのだった。恥ずかしいから、照れくさいから。そうかもしれないが、ちよつと違う。ただ恥ずかしいとか、照れくさいというのはなかった。

自分ではない他人になりきって、その人のようにしゃべったり、身振りをしたりすることが、人間の根本のところではできないのだ。

大げさに言えば、自分を生きることしかできないのだ。必死に素のままに生きることしかできないのだ。自分を大きくも、誇らしくも、えらそうにも、情熱的にも、賢そうにも、物思わしげにも、自然の哲理に触れたかのようにも、万能であるかのようにも、要するに、自分をありもしない架空の人物に見せかけることができないのだ。

ひとと言えうなら、演じることができない人間なのだ、ぼくは。自分以上にも、以下にも、まして自分とは異質なものに自分を見せかけることができないのだ。た。

「さあ、キヨシちゃん、やれやれ」

はやし声は高まる一方だ。なんとかしなないと。

まずは棒きれで斬り合いだ。頭の中でそう思う。舞台の端に立っていたぼくは、棒きれを構え、少しだけ前に進んだ。だけど剣士のように構えることができない。すでにそれが演じることなのだ。とてもできそうにない。

ほんのちよつびり構える真似をすると、斬り合いもせず、「ヤア」と聞こえるか聞こえないかに叫んだと思うと、「鞍馬天狗だあ」と言いもしないで、そのままストンと押し入れの上段から飛び降りてしまった。

思いもよらない事態に、満場から拍子抜けの吐息が洩れたのがわかった。がっかりしたのか、あつげにとられたのか、みんな発する言葉もなく黙りこんでいる。ぼくもまた何も言わずに突っ立ったまま。海の底のような静寂があたりを包みこんでいる。

そのまましーんと静まったままであつたなら、ぼくの自尊心は立ち直れないまでに痛めつけられ、芯の芯まで劣等感に打ちのめされていたことだろう。

だが、とつさにトシちゃんが叫んだ。一瞬のためらいもなく叫んだ。

「よーし、みんなようできた。今度は下に行って遊ぼう」

間抜けな「ヤア」など忘れたかのように、みんな一斉に階段を駆け下りていった。そして、下でまた追いかけてこやかにけんぼに興じたのだった。

ぼくの心に生じた深い悲しみを、トシちゃんは瞬時に察知して、救い出してくれた。

こうしたときのトシちゃんの鋭い共感力ととつきの行動力は、いったいどこから来ていたのだろう。ラジオ体操のときもそうだった。ぼくはトシちゃんに何度救われたかしれない。

トシちゃんは中学を出ると見習い大工になった。そして数年後、足場から足を踏みはずして死んでしまった。人生の喜びも哀しみも、まだ何も知らないうちに、彼の生はあつけなく幕を閉じてしまった。

このトシちゃんの生と死を、いったいどう形容すればよいのだろう。何にたとえればよいのだろう。

■麦畑の思い出

学年が上がるにつれて遊び仲間の範囲も広がってきた。三年生のころには、電車通りを渡った反対側にも、あるいは明治の鉄道の廃線跡を越えた先にも、友だちができてきた。十人を超える遊び仲間になってきた。

親の職業もさまざまだった。職人や商人が大方ではあったが、電車通りの反対側には草花の研究をしている大学の先生がいた。廃線跡を越えた先には音楽の先生もいた。この先生は、小学校合唱コンクールで何度も子供たちを全国大会に導いた指導者で、金賞を取ったことさえあった。全国にも名の知れた合唱指導者だった。

まだ初夏には早い春たけなわの時期、ぼくら十人ばかりは連れだって、農事試験場に遊びに出かけた。

圃場には麦畑が広がっていた。甘い香りが漂って、なんとも言えず心地よかった。

休耕田もあり、レンゲやシロツメグサに埋め尽くされていた。そこには誰もいないと見えたのに、近づく先客がいた。女の子たちのグループだった。

まわりの道から一段低くなった休耕田で、彼女らは、レンゲやシロツメグサを引き抜いてはつなぎ合わせ、首飾りや冠を作っていた。

どの子も同じ町筋の顔見知りだった。だが、男の子と女の子が一緒に遊ぶことなどないものだから、道路で遊んでいるのを互いに視界の端に納めるだけ。見えないヴェールが互いを隔てていた。

だのに、なぜかそのとき、女の子たちの方から近づいてきた。あたたかな春の日差しと、休耕田の空っぽの解放感が、隔てるヴェールを思わず知らずはぎ取ったらしい。

彼女らは、頼みもしないのに花輪の作り方を教えてくれた。ぼくらもまた、どういうわけか習う気になった。王冠を作って頭に乘せたり、首輪を首からかけてみたり、女の子の遊びに恥ずかしさを覚えながらも、しばらくは時を忘れて熱中した。

どうしてこんなことになったのか、わけがわからなかった。でも楽しかった。

そうこうするうちに、女の子たちが、かくれんぼをしようと言出した。

かくれんぼといっても、一面のレンゲ畑と麦畑だ。隠れるところなどありはしない。あるとしたら、一段低くなった田畑を仕切っている土手の陰か、麦畑の中くらい。麦の穂がぼくらを隠すのにちょうどよい丈に伸びていた。

鬼になった子が数を数えている間に、ぼくは麦畑に突入した。敵はまっすぐ一直線に伸びているから、敵と敵の間にいたのではすぐに見つかってしまう。そう思って穂の中に分け入った。すると、なんとということだろう。そばに女の子がいた。あっと思ったときは、もう手遅れだった。鬼が見回っている。

女の子と触れ合わんばかりだが、じっとしているしかない。彼女のハーハー吐く息までが聞こえてくる。

鬼は通りすぎた。ほっとして身を離した。すると、一瞬のためらいもなく、

「ねえ、次も一緒に隠れよう」

女の子が言った。ぼくより一つ年上の子であった。手足がすわり長く、背の高い子。見知ってはいたが、一緒に遊んだことはなかった。

別の子が鬼になって数を数え始めると、その子は麦畑を飛び出した。そして、土手道を思い切り走った。ぼくも釣られてあとを追った。女の子は畑に飛びこみ、穂の中に身を隠した。躊躇するべくを、

「さあこっちこっち」

と、無理やりそばに座らせた。

何が何だかわからずに、ただ恥ずかしさと、少しばかりの罪悪感を覚えつつ、じっとしているしかなかった。

記憶はここで切れている。この先、どうなったかはわからない。たしかなのは、別に何ごとも起こらなかったこと。それだけだ。

これを思い出すたび浮かぶのは、スコットランド民謡「故郷の空」の替え歌である、ドリフターズの歌だ。

誰かさんと誰かさんが麦畑

チュツチュ チュツチュしている

いいじゃないか

僕には恋人ないけれど

いつかは誰かさんと麦畑

替え歌の情景は、おそらくうんと昔からのものだろう。日本では遠い昔から、麦畑は、こうした小さな罪をはらんだ胸騒がしき場所であったのだろう。それが麦秋近い麦畑への日本人の原型的イメージ、集合的無意識ともでも言えるものになっていたのであろう。この替え歌が独特の哀愁をはらんで多くの日本人の心に響いたのには、わけがあったはずである。

■チンネンさん

毎年、年度末が近づくと、学校をあげての一大イベント、学芸会があった。地域ぐるみの催し物で、広い講堂には、親はもちろんのこと、祖父母までがやって来て、熱気むんむん、一寸の余地もないすし詰め状態になった。

三年生のとき、ぼくは「チンネンさん」という踊りの班に入れられた。

学芸会の出し物には、歌、踊り、劇の三つがあって、劇をやる子は、クラスの中で賢い子、しっかりした子、華がある子、目につく子と決まっていた。当然ながら、ぼくは六年間を通して劇の班に入れられたことはない。やれと言わたって、できっこない。押し入れの舞台で、たった三人の観客を前にして「鞍馬天狗だあ」とさえ言えなかった子なのだから。

踊りは、ひょうきんな子、活発な子、運動が得意な子のためにあった。いわばクラスの人気者がやるのが踊りだった。

残りが歌。その他大勢だ。表情も身振りもいらぬ。整列写真のように、ただ大勢の中に埋もれて、歌ったり、楽器を演奏したりしていればそれでよい。

となれば、おのずと明らかだろうが、ぼくは毎年、歌だった。ただし一度だけ、先生が何をどう間違えたのか、踊りの班に入れられた。三年生のときだ。

理由はわからない。活発でもなければ、目につくわけでもなく、ひょうきんでもないぼくだ。先生がぼくの名前を誰かほかの子と取り違えて班分けしたくらいしか、理由は浮かばない。

さてその踊りだが、練習の初日から、いきなり大失態をやらかした。チンネンさんはクラス単位ではなく、クラス横断でやる踊りだったから、練習の教室は自分の教室ではなかった。授業が終わったとき先生から

「チンネンさんに出る子は○組の教室に行きなさい」

と言われた、これはたしかに聞いていた。だが、

「すぐに行きなさい」

とは聞かなかった。

すぐと言われただけ、ちょっと遊んでからでもええじゃろう。

こう考えて、学校中が学芸会の準備でざわわしているのを見て回った。ひととおり廊下を歩き回った後、そろそろ始まるころかなと思つて、言われた教室の扉を開けた。

すると練習はすでに始まっていた。

「あなた、奥村君でしょ。いったいどこに行つてたのよ。みんな早くから来てるのよ。あんただけよ、こんなに遅いのは。ちゃんと言われたでしょう、すぐにこの教室に来るようになって。何してたのよ」

たたみかけるように攻撃してきたのは、体育を専門にしている女の先生だった。

「すぐになんか言われなんだのに」

そう言いたかったが、もちろん言葉にはしなかった。同じクラスのほかの子もみんなすぐに来ていたのだから、やっぱ悪かったのはぼくみたいだ。

「まあいいでしょう。次から遅れるんじゃないのよ。じゃあ、この列の一番後ろに並びなさい」
 そう言つて並びされたのは、六、七列ほどある列の一番左端の一番後ろだった。そこがぼくの定位置になった。

練習が再開された。ほかの子はすでに多少なりとも説明を受け、練習もしていたから、何もわからないのはぼくだけだった。もちろん一人のために、もう一度一から説明してくれるはずはない。いきなり何が何だかわからない世界に突き落とされてしまったのである。

こうして初日から思いきり劣等感と落伍感を味わわされた。

なぐさめだったのは、ミノルちゃんとユウちゃんが同じチンネンさんの班にいたことだった。ミノルちゃんが踊りの班にいるのは当然だった。学校でもひょうきん者で通っていた彼である。だけどユウちゃんがいるのは意外だった。彼は当然劇だと思つていた。二年生のときには主役をやった。彼がどうして踊りに入ったのか不思議でならなかった。

この日から二、三週間、練習の日々が続いた。いくらぼんやり者でも、これだけやれば体に染みつく。

「チンネンさん」のレコードも、毎日飽きるほど聞かされた。同い年くらいの女の子が歌っていた。曲はもちろん、歌詞までも、いまだに頭の隅から消えることがない。

チンネンチンネン、チンネンさん

チンネンさんはどこの子

山のお寺の

かわいいお小僧さん、お小僧さん（二つ目はバックの子たちの合唱）
ことし七つの

かわいいお小僧さん、お小僧さん（同様）

お経もお上手

お絵かきお上手

お習字お上手

掃除もお上手

おりこうなお小僧さん

こんな調子で、たしか三番までであった。

やがて学芸会が近づいてきた。そのとき思わぬ事態が発生した。チンネンさんの衣装をそれぞれの親が自前で用意せよとの通達が来たのである。上は白の袴、下は黒の袴。寸法や裁ち方、縫い方までが指定されていた。

ミノルちゃん、ユウちゃん、それとぼく、三人の母親が急ぎよ相談し、三人分の布地を共同購入することになった。仕立てはユウちゃんのお姉さんがやってくれた。

それにしても、たった一度の学芸会のために衣装を自前で用意せよとはどういうことなの。済んでしまえば、何の役にも立たず、ボロキレにするしかないというのに。親たちは不平たらたらだった。

いよいよ当日を迎えた。

出番の前に母が衣装に着替えさせてくれた。悲しいくらい、というより笑いたくなるほど、ツルツルペラペラのいかにも安物丸出しの衣装だった。もちろんミノルちゃんもユウちゃんも同じツルツルペラペラだ。ほかにそんなのを着ている子はいなかった。

舞台上立つと客席は真つ暗。正面から照明が直射して、目がくらむ。

だが、何と言ってもぼくは左端の一番奥だ。前には何人ものチンネンさんが重なっている。しかも、どの衣装も羽のように広がっていて、練習のときは様子がちがう。ぼくから客席が見えないのだ。つまり、お客さんからも、ぼくの存在が見えないというわけだ。

それに加えて、踊っているうち、どういうわけか、列が左へ左へと寄り始めた。ついには最後尾のぼくの前にカーテンが立ちふさがった。歌が三番にさしかかったころには、長い練習の成果を、孤独にカーテンの陰で披露しているのだった。

終わってから、母は

「よくがんばったね」

と言ってくれたが、それよりほかに、チンネンさんの感想が語られることはなかった。語るべき言葉がなかったのだろう。

「前の子が邪魔をして、あんまり見えなんだよ」とか、

「最後は、カーテンの奥に隠れて、全然見えんようになってしまった」

などは、口が裂けても言えなかったわけだ。ぼくの悔しさはそのまま母の悔しさであり、ぼくの哀しみはそのまま母の哀しみであった。

■算数委員

ぼくがぼくらしくと言おうか、いや元来のぼくからすればぼくらしくなくと言うべきか、少々積極的になり、自信をもって振る舞いだしたのは四年生からだだった。小学生時代の最も楽しく、また充実した記憶の大半はそこから始まっている。

ぼくを変えたのは、担任のS先生だった。結婚して子供もある小柄な女の先生で、にこやかな笑みが一秒たりとも絶えることがなかった。先生が最初に教室に入ってきたときから、やさしさにあふれた先生のことを、ぼくは言いようもなく好きになった。笑うと糸のように細くなる目には慈愛の心があふれていた。

それに比べると、三年生の先生は好きになれなかった。どこかつっけんどんな感じのする男の先生だった。実を言うと、先生の顔も姿も、今は思い出すことができないのだ。ぼくが学芸会で踊りの班に入れられたのは、先生がぼくのことをまったくわかっていなかったからにちがいない。

先生を好きになり始めると、勉強も好きになってきた。

漢字の勉強は、実は三年生のとき、

「何度も口で言いながら手で書いて覚えるのよ」

と母に教わって以来、好きになっていった。夏休みや冬休みに学校で与えられる漢字の練習帳に、同じ漢字や文章を何度も書くのが、一見面倒で面白くなく見えるが、ぼくには楽しくてならない作業だった。

それに加えて、四年生になると、算数が好きになってきた。

ある日、ドリル帳の一段（一ページが三段に分かれていて、各段に十問ほどのかけ算の問題があった）を誰が一番早く解き終えられるかを競争することになった。もちろん早くても間違えたら失格だ。その競争で、なんと一番になったのである。

真っ先にでき上がって先生に見せに行くと、みごと全問正解だった。先生は目を細めてぼくを見つめ、

「すごいね。よくできたね。奥村君が一番よ」

と、なんだか意外なものを発見したように大仰に驚き、これ以上ないほどの笑顔でほめてくれた。ひよっとすると三年生からの引き継ぎで、「いつもぼんやりしていて、手を上げたこともなく、何をやっても人並みにはできない」と、伝達されていたのかもしれない。この偏見の言葉に、そのとき先生は疑いの目をもったのではなからうか。

この子は見かけはぼんやりしているけれども、内には何か鋭いものを秘めているのかもしれないと（自分で言っちゃあ元も子もないが）先生は思ったのかもしれないし、ぼくもまた、人より劣っている、いつも自分のことを思ってきたけど、案外そうではないのかもしれないと、初めて自信めいたものを感じたのかもしれない。

おおいかぶさっていた土くれをはねのけて、雑草の芽がびよこんと顔を出した瞬間だった。

大好きな先生から「よくできたね」と言われた以上、それを裏切ることにはできない。できる子を演じ続けたいといけなくなった。妙な義務感のようなものさえ芽生え始めた。

本気で机に向かうようになった。高校二年の兄の勉強ぶりを真似ているようで、誇らしくもあつた。楽しくもあつた。

母はそんなぼくを見て、突然悟りを得たかのように、ぼくの勉強のことに熱心になってきた。さ

さまざまな本を買ってくれるようになった。買ってくれた本は、大別すると二種類あった。

一つは理科や社会の図鑑だった。図鑑といっても、シリーズものをセット買いたくはないが、ときどき本屋でひよいと一冊抜き取るように買ってくれるのだった。全部は思い出せないが、記憶にあるのは、日本の地理、古代の人々の暮らし、交通図鑑、地球の成り立ち、宇宙の図鑑、石の図鑑、動物図鑑、魚の図鑑、草花図鑑、各県の郷土自慢、朝日子供年鑑など。それらをくり返し眺め、かつ読んだ。

もう一つは西洋の読み物だった。覚えているのは、「家なき子」、「母をたずねて三千里」、「アムンゼン探検記」、「赤毛のアン」、「小公女」、「若草物語」、「ああ無情」など。これらはどれもけっこう分厚い単行本だった。

これらを通して、知らない世界への憧れがつのつたの言うまでもない。

ドリル競争は、その後、何度やっても一番になった。

二番は花田さんという女の子だった。顔がぼっちゃりと丸く、いつもニコニコしている。リンゴのような赤いほっぺの女の子だった。勉強がよくできて、しかもしっかりしていると、誰からも認められる存在だった。出しゃばらず、控えめで、心やさしい子であった。ぼくがひそかに憧れていた子でもあった。

あるとき、クラスで算数委員と国語委員を選ぶことになった。どちらも男の子と女の子が一人ずつ、みんなの投票で選ばれた。ドリル競争がものを言ったか、圧倒的な票数で、ぼくと花田さんが算数委員に選ばれた。こんなことは初めてだった。人から認められたり、選ばれたりすることの、まったくないぼくだったのだから。

本当にぼくでいいのか。不安になった。だがまた、「よし、やってみよう」と心の昂ぶりを覚えたのもたしかだった。

実を言えば、心底の思いは、お門違いの人間がお門違いの役についたという、いわば場違い感、身分不相応感だった。

委員の主な仕事は、みんなに算数と国語の宿題を出すことだった。

花田さんと宿題の相談ができると思うと、天にも昇る心地になった。はるか高みでほほ笑んでいた雲の上の存在に手が届いた気分だった。

さっそく仕事が始まった。休み時間に花田さんと「今は〇〇を習っているから、△△ページの問題を宿題にしよう」などと考えるのだ。二人が考えたことは必ず生かされた上で、先生が

「それはまだむずかしすぎるから、代わりにこちらにしたらどう？」とか

「ドリル帳二ページは、ちょっと分量が多すぎやしないかしら。こちらのページは次に回そうよ」などと言って、たいていは宿題を誰にでも解けるように、やさしくしてくれるのだった。

最初はぼくが発表し、花田さんがそれを黒板に書いた。

それまでは、みんなの前で発表するなんて特別な人だけのもの、自分とは無縁なものと思い込んでいた。なんだか身分不相応と言われそうに思えて、気が引けた。誇らしい気分もなくはなかったが……。

これをきっかけに、S先生からは、さまざまな仕事を任されるようになった。

こんなこともあった。四年生の学芸会では、定位置の歌に戻ったが、そのころハーモニカが好き

で、家でよく吹いていた。学校の音楽の時間にも吹き、「なかなか上手ね」と音楽の先生にほめられたことがあった。それを伝え聞いたのだろう。S先生が、器楽演奏の中にぼくのハーモニカ独奏部分を入れてくれたのである。

当日、ぼくは誇らしい気持ちと、腹のあたりがむずむずする気分を味わいながら、とにかく無我夢中で吹いた。それが何という曲の、どの部分だったのか、今はまったく思い出せないのが、不思議なほどだ。

これは先生のえこひいきではなかった。先生は、どの子に対しても、中でも消極的で目立たない子に対しては特に、その子を持っている能力や実力を無理にでも探し出し、ときにはさりげなく、ときには際立たせて、それを発揮させるように努めていたのだった。

クラスのどの子をも、決して孤独に沈ませることがなかった。人から認められている存在だと自信をもたせ、ほめられる喜びを必ず味わわせるのだった。すばらしい先生だったと思う。

S先生のおかげで、劣等感という、二、三歳に始まって、五歳の逼塞時代に固まった足かせから、ようやく少し解放されてきた。

上も下もなく、誰に対しても対等に接することが許されるという、当然の認識に初めて立ったのだった。びくびくせずにあるのままの自分を出していけば、周囲もまた、ありのままのぼくを受け入れてくれる。みんなと同じ地平に立っているんだという、当たり前のこの意識構造が、先生のおかげでようやく形成されてきたように思う。

とはいえ、対人関係における押し弱さや、自分を主張できない遠慮意識は、ぼくの本性であった、今に至っても抜けきれていない。これはタマネギの皮のようなもの。剥いても剥いてもなくなる。内向性や消極性は、持って生まれた人の宿命的性向だ。受け入れるしかない。それが自分だと、納得して受け入れるしかないものである。

逆にミノルちゃんのような外向性、積極性、ひょうきんさは、これもまた持って生まれた性向だろう。近づこうとして、近づけるものではない。

内向性と外向性は、努力で切り替えられたり、乗り越えられたりするものではない。せいぜいペンキで上塗りをして、見かけを変えることくらいしかできはしない。

■セキセイインコ

四年生の初夏だった。学校から帰ると、土間でチツチツと聞きなれない声があった。見ると靴箱の上に鳥かごがあり、二羽の小鳥がいた。背と尾羽が、青とも緑とも黄ともつかない不思議な色合いに輝いていた。

駆け寄って覗きこんだ。鳥は止まり木や金網などにトントン飛び移ったり、葉っぱをついばんだり、小さなエサの粒を器用に殻を剥いて食べたり、水を飲んだり、羽を梳いたり、一瞬たりともじっとしていることがない。

奥の仕事場から母が現れた。

「かわいいでしょう。今日父ちゃんが買ってきたんですよ。セキセイインコというの。世話はキヨシちゃんがしてね。母ちゃんも手伝うから」

帰りを待ち受けていた様子だった。世話の仕方は母が教えてくれた。葉っぱは毎日二、三枚、かごに取りつけた葉っぱ入れに差してやる。水も毎日交換してやる。主食の稗は、四角い木の箱に入

れて置いておく。鳥が食べると、剥いた殻が表面につもるから、ときどき取りだして、ふっと吹いてやる。吹くと軽い殻だけが箱から飛び散る。

「強く吹きすぎたら実まで一緒に飛んでいってしまうから、軽くそつと吹くんよ」

殻を吹き飛ばすと、新しい稗を補充して、またかごに戻しておく。

フンの始末もある。かごの底は引き出し式になっていて、ときどき引っぱり出してきれいに洗ってやる。

なかなかの大仕事だが、これらすべてがぼくの仕事になった。面倒だなあとちつとも思わなかった。楽しかった。

セキセイインコは、父が小鳥屋の前を通りかかったとき、ふと気をそそられて買ったらしい。衝動買いだ。小鳥屋は上二万交差点の近くにあった。子供の足でも四、五分のところ。

その店は、その後、ぼくのなじみの店になった。月に一度は稗を買いに出かけたのだから。

おじさんが分量を量って紙袋に稗を詰めてくれている間、店の中をぐるぐる巡って珍しい小鳥を眺めるのが楽しみだった。セキセイインコのほかに、カナリヤ、オウム、メジロなど、さまざまなお鳥がいた。真っ赤な色をした熱帯産の鳥が売られていることもあった。

毎朝小鳥の世話をしてから学校に出かけるのが日課になった。帰ってくる時また、水を換え、稗を吹き、フンの始末をした。

やがてセキセイインコが卵を産んだ。ワラで編んだ巣の中に、直径一センチほどの卵が数個産みつけられた。親鳥は卵の上に座り続けて温めた。だが、何日経っても孵る気配がない。親鳥もあきらめたのか、そのうち卵を放棄した。仕方ないので、巣から取り出した。親に見捨てられた卵を、土間の隅に穴を掘って埋葬した。

秋が深まった。セキセイインコは再び卵を産んだ。今度も親鳥は温めた。

数日したころ、夜になって鳥がけたたましい叫び声を上げた。

「チーチー、キーキー」

聞いたこともない切迫した声だった。父と母が飛び起きた。ぼくも起きた。兄も二階から駆け下りてきた。蛇だった。かごの間から頭を差し入れている。どうやらすでに卵を呑み込んでいらしい。かごから頭を引き抜くところだった。

ぼくは恐怖に震え、声も出なかった。

「どこから入ってきたんでしょうねえ。これまで家の中で蛇なんか見たことがなかったのに」

母はぶるぶる震えながら父に尋ねた。

「心配しないでええ。アオダイショウじゃ。アオダイショウはどこにでもおる。人にかみついたりしません。大丈夫じゃ」

昔の農家なら、縁の下や天井裏に必ずアオダイショウが棲みついていたと父は言った。家の守り神とさえ思われていたと言う。そう言いながらも、父は火ばさみで蛇を押さえつけると、おもての川に持っていき、息をしなくなるまで水につけた。そのうち、そのまま川に流してしまった。

冬休みがやって来た。終業式の日、ランドセルに大きな風呂敷を入れて登校した。式が終わり、通知表をもらってみんなが帰る支度を始めたとき、S先生がそばに来て、

「じゃあお願いね。一緒にこっちに来て」

ぼくを連れて校庭に出た。先生に手を引かれて歩く気恥ずかしさに堪えながら、鳥小屋まで行っ

た。気づいた友人たちがまわりを囲んでいた。

鳥小屋は縦・横・高さとも二メートルはある立派なもので、管理している理科の先生が待っていた。着くと、中に入ってセキセイインコを二羽つかまえた。それを用意していた鳥かごに入れ、

「さあ、これだ。大事に飼ってあげるんだぞ。頼んだよ」

ぼくはそのころ課外活動で動物飼育クラブに入っていた。当番の日には、いつもより早く家を出て、学校の鳥やウサギに餌をやるのが仕事であった。

「この冬休み、先生は用事があって、学校に来られない日があります。だから、飼育クラブの人に鳥やウサギを持って帰ってもらい、冬休みの間飼ってもらいたいと思います。おうちの人に相談して、飼ってもいいと言われた人は言いに来てください」

S先生からも

「飼ってみたらどう？」

と言われたのだった。心躍らせながら家に帰って、母に話した。

「学校の鳥？ 大丈夫？ ちゃんと飼えるの？ でもいつもやってることだから、やれるでしょうね」

母はOKを出してくれた。

こうして、鳥を興奮させないように鳥かごを風呂敷で覆い、それを胸の前に抱えて校門を出たのだった。いつも一緒に帰る友人たちが、

「ちょっと見せてくれや」

何度も風呂敷をめくろうとするが、その都度ぼくは、

「馬鹿なことするな。鳥がびっくりするじゃろが」

そう言っただけの手から鳥かごを守った。

鳥たちは無事、家に着いた。靴箱の上に鳥かごが並んだ。鳥は見なれない相手に興奮し、威嚇しあっていたが、やがて相手を受け入れ、静かになった。

その冬休み、大事なものを預かっている責任感で、自分が少しだけ大きくなった気がしたのだった。

■花田さんのこと

花田さんと同じクラスになったのは、四年生の一年間だけだ。

教室で初めて見たときから気になる子であった。といっても、別に美人顔ではない。ぽっちゃりと、お月様のように丸い顔。そして、ほっぺはいつも赤らんでいる。目は三日月のように細く垂れ、笑うと新月のように細くなる。いつもニコニコしていて、争いごとなど決してしない。

女の子同士でも、キャッキヤと騒ぎまわったりすることは少ない。控えめでおとなしく、少し離れたところから、にこやかな笑顔でみんなを見守っている。そんな感じだった。

目元は、時と場合にに応じて微妙に色合いを変える。明るく楽しそうに輝いたり、愁いに沈んで悲しげな陰を作ったり。

前髪は眉毛の上でまっすぐ切りそろえられ、耳の後ろに二本の三つ編みが垂れていた。

清楚。そうだ、清楚で控えめ。それが彼女の一番の形容語だ。誰とでも楽しそうに交わるけれども、必要以上に接近することはない。内部には、守るべき立場や居場所をしっかりと保持している。

それでいて、あつたかなオーラを常に発散し、誰からも信頼される子。それが花田さんだった。

勉強はよくできた。国語も算数も理科も社会も、オールマイティだった。彼女の清楚で落ち着いた物腰は憧れだった。だが、ぼくには決して真似できない、いや、真似する気になれないことが一つだけあった。

それは文字を一字一字丁寧に書くことだった。ぼくのような乱雑な走り書きなど、彼女は決してしない。真似できないし、真似ようとも思わなかった。思いついたら、すばやく書かないと、彼女のようにゆっくり丁寧に書いていたのでは、書いているうちに忘れてしまう。そう思って、というより無意識にそうなってしまふのだが、きれいに書くよりも速く書くことにこそ文字の命があると、ぼくは感じていた。

これは父の影響だ。仕事場には小さな黒板があつて、仕事の予定や、注文の内容などを、白墨で書きとめていた。そのときの書くスピードはすさまじかった。文字は乱雑に見えるが、すばらしく整っていた。みごとに文字だった。そのようにして書くのが文字というものだと、子供のころから無言で父にすり込まれていたのだった。

花田さんと一緒に算数委員になりはしたけど、彼女のことを、実は何も知っていなかった。話す機会など一度だつてなかったのだから。話しかけるには、敷居が高すぎた。

授業中、彼女はいつもぼくの視界の隅に納まっていた。だがそれだけのこと。背筋をピンと伸ばして、手は膝に置き、ときどきノートをとるときにだけ手が動く。目と耳はじつと真剣に先生の声に集中している。それがなんだか崇高な仏像のように見えるのだった。

算数委員になつてからは、ずいぶん近い関係になり、話す機会はもちろんできた。だが、仕事以外のことを話す勇気がぼくにはなかった。やるべきことが終わったなら、なんだか物足りなさを覚えつつ、いつもそのまま別れてしまふのだった。

ある夏の夕暮れ、たぶん夏休みだった。いつものように近所の仲間たちと家の前で遊んでいると、東の方から見覚えのある姿が現れた。花田さんらしい。まさか彼女がこの道を通るとは思いもしていなかったから、人違いかと、一瞬ぎゅっと疑いの目で見つめた。間違いない。花田さんだ。心臓がパクパクし始めた。向こうもぼくに気づいたらしい。

思いもよらない事態の出現に、身動きできなくなつてしまった。じつと立ったまま、彼女が近づくの、ただ待っていた。彼女の方も、いまさら引き返すわけにもいかない様子で、ゆっくりと近づいてきた。とうとう向き合った。小声でも届く距離になった。

笑いかけた。彼女も応じて、笑みを浮かべた。目は新月のように細くなり、えくぼがくるつと赤いほっぺに食い込んだ。

風呂帰りなのが一目でわかった。入浴道具を風呂敷に包み、スイカを抱えるように腹の前で抱えていた。いつもの赤らんだ顔が、湯上がりの上気で、いつそう赤くほてっていた。

「風呂帰りか」

声をかけた。

「うん」

「いつもここを通るん？」

「ううん、今日が初めて」

彼女の顔が夕陽を受けて、さらに真っ赤に染まっていた。

彼女が城山の麓にあるケーキ屋の娘であることは知っていた。風呂に行くといっても、道後温泉までは遠すぎる。わが家の前の道が電車通りに鋭角にぶつかった少し先にある小さな銭湯だろう。ぼくもよく行く銭湯だ。

それにしても、花田さんがどうしてただ一人、ぼくの家の前の道を歩いてきたのか、それがわからなかった。この道は界隈の住人以外には通ることの少ない、一筋奥まった道である。たいていの人は、表の電車通りを通る。しかも彼女にとって、この道はわずかとはいえ、電車通りよりも遠回りになる。

おそらくお母さんと二人で、あるいは家族で、銭湯に行ったのだろう。なのに、お母さんたちは電車通りから帰り、花田さん一人、裏通りから帰ることにした。妙なことだが、それしか考えられない。

わざわざ遠回りをしてぼくの家の前を通ったのにはわけがある、そう思うのが自然な感覚だ。だが、うぶなぼくには、そんな考えはちっとも浮かばなかった。

少し立ち止まって話をしたいな。ふっと衝動がかすめはしたものの、それは噛み終えたガムのように吐き捨ててしまい、引き止める勇気も出ないまま、しかたなく、

「そうなんか、じゃあな」

向こうも、

「うん、それじゃあ」

その声はまだ虚空に響いているうちに、彼女はゆっくり通りすぎて行った。ずんずん小さくなっていく後ろ姿を放心したように見つめているしかないぼくだった。

秋になった。

紅葉の季節になると、城山の東の登り口（東雲口）が、ぼくらの絶好の遊び場になった。東雲口には、白馬の雪渓のように、広くて真っ白な石段がわずかにカーブを切りながらなだれ落ちている。そこにドングリを拾いに徒党を組んで出かけるのだ。

東雲口に向かう道筋に花田さんのケーキ店がある。

店が近づいてくると、心臓はトクトクと高鳴ってくる。

花田さんいるかなあ。いたらいいなあ。だけど本当にいたらどうしよう。こわいなあ。いない方がいいくらいだなあ。

そんなことを考えながら、一瞬間店内に視線を向ける。彼女の姿はなかった。なければないで、気が抜けたサイダーみたいに、安堵とも虚しさともつかない息を吐くのであった。

ぼくらは、石段を登った先にあるクヌギやカシの林でドングリを下足袋に詰めこんだ。探すとか、拾い集めるとい言葉は当たらない。両手で掻きこんで詰めこむだけだ。それほどに、ドングリは所狭しと落ちていた。学校にいつも持って行く下足入れの袋が、ドングリ袋にちようどよい。

袋がいっぱいになると石段に戻ってくる。今度は両側の側石が遊び場になる。大きな葉っぱをソリのように尻に敷き、ヒヤーツと掛け声もろとも滑りおりのだ。最初は足で漕がないと滑らないのに、次第次第に傾斜がきつくなり、最後には奈落に落ちるような急傾斜となる。ヒヤーツがいっしかヒョーツとかギャーツに変わっている。

石段は今も昔のままだ。東雲口から城山に登るたび、よくぞこれを滑り降りたものと、垂直落下のようなその急斜度に、いつもわが目を疑ってしまう。恐れを知らないぼくたちの、それは肝試し

の関門、勇者への通過儀礼なのであった。

遊び疲れて帰る道すがら、またもケーキ店の前を通ることになる。心臓がふたたびトクトクと鳴る。だが、花田さんの姿はやはりなかった。あたりは小さな商店街だ。そもそも商店街で遊ぶ子を見かけることがないのだった。

やがて五年生になった。教室から彼女の姿は消えてしまった。姿が消えると、不思議なことに、彼女という存在が意識からずんずん薄れていった。ときおり廊下ですれ違ったり、運動場の向こうに姿を見かけたりすることがあっても、懐かしさがふつとよみがえるだけ。

本当は泣きたいくらい話しかけたいのに、その勇気がなく、あえて意識から遠のけ、無関心を装うのであった。

その彼女が、ぼくの眼前に燦然と姿を現したのは、五年生の学芸会の時だった。あまりに唐突な出現であった。

団塊の世代が怒濤の大波となって押し寄せていた学校には、教室が圧倒的に不足していた。だが、増築しても、数年でその大波は去って行く。ならばというので、我々が在校している間だけ、いつもは使われることのなかった道具置き場や、講堂や、ありとあらゆる空間が、ベニヤ板で仕切られて、教室になったのだった。

講堂が教室になったため、学芸会は、毎年、北隣の中学校の講堂を借りて行われた。一年生のときからそうだったから、それが当たり前、そういうものだと思っていた。

ところが五年生の冬休み、中学校の講堂が火事ですっかり焼け落ちてしまった。そこで、その年だけ、西隣にある大学の講堂を借りて学芸会が行われることになった。長年親しんだ、ぬくもりのある木造の黒い講堂から、白亜の石の講堂に場が移り、その冷んやりした感触にぼくの気分は沈んでしまった。こんなに真っ白で冷え冷えした石の講堂では、楽しいはずの学芸会がちっとも楽しくないではないか。

ところがその戸惑いは、プログラムが進むうちに、突然、雷に打たれたように吹き飛んだ。白々しい思いで見つめていた舞台が、いきなり燦然たる光に包まれたのである。

カーテンが開いたとき、舞台の中央に立っていたのは、なんと花田さんだった。堂々たる劇の主役として立っていた。

四年生まで、学芸会で花田さんの姿を見かけることはなかった。それにはわけがあった。中学校の講堂で行われていた例年の学芸会では、校区を東と西の二つにわけ、東は午前、西は午後といった案配の二部制で行われていた。親や祖父母まで呼ぶものだから、一度に全員は入らない。分けるしかなかったのである。

花田さんは西で、ぼくは東。花田さんの姿を学芸会で見かけないのは当然なのだった。

ところが大学の講堂で行われたその年は、親や祖父母は呼ばないで、子供たちだけで行われた。そのため東と西に分ける必要がなく、全校生徒が一堂に会した学芸会になった。

幕が開くと、花田さんがたった一人、舞台の中央に立っていた。彼女のナレーションで物語が始まった。

まさか眼前に彼女の姿が現れるとは思ってもいなかったものだから、そのあでやかさ、美しさにあつけにとられ、ただうっとり見つめていた。

劇の筋など、もうどうでもよかった。彼女の姿に見ほれ、その声に聞きほれていた。事実、どう

いう劇であったのか、いまだに思い出すことができない。

控えめな花田さんが、はつきりとよく通る声で、いじらしいばかりみごとに主役を演じきった。覚えてるのはそれだけだ。そこにいるのはたしかに花田さんだった。だが、ぼくの目には、天女、天翔る天女としか映らなかつた。

しばらく見ないうちにずいぶんきれいになったなあ、大人に近づいたなあと、つくづく思った。かわいいえくぼは、美しいえくぼ、やさしいえくぼへと変化していた。相変わらず子供のまものぼくなんか、とうの昔にゴミ箱に投げ込まれてしまったんだろうなあとも。

それからさらに数年が経ち、彼女がふたたび懐かしく思い起こされたのは、新聞に載った大学合格者名簿に彼女の名前を発見したときだった。

当時は、今とは違い、個人のプライバシーなど問題にならなかつた。主要大学の合格者名は、本人の同意もなしに、地方紙や全国紙地方版に掲載されるのだった。地元の国立大学の合格者中に、偶然彼女の名前を発見したぼくは、懐かしさに胸を締めつけられた。目の前がぼうつとかすみ、万感の思いでその名前を見つめたのだった。

同じころ彼女がぼくの名前をK大学の合格者中に発見し、懐かしく涙ぐんでくれたかどうか、それは永遠に謎だ。

■地方祭のころ

(一)

「今朝はちょっと寒いから、長袖にしとこうね」

寝間着を脱いでパンツ一つになったキヨシに、母親がそう言って、メリヤスの長袖シャツを手渡した。キヨシはそれを頭からすっぽりかぶると、白のトレパンをはき、大急ぎで土間に飛び下りた。

外では先ほどから何度となく「キーヨシちゃん」と、独特の抑揚をつけたトシオの声が響いていた。キヨシは靴に足先をつっこむと、かかとを浮かせたまま土間を走って、玄関のガラス戸を引っぱった。外は真っ暗だった。濃紺の空に無数の星が瞬いていた。トシオのそばには、タカヨシ、ミノル、ヨシキの三人が寝起き眼をこすりながら立っていた。

「キヨシちゃん遅いなあ、待ちくたびれたがや」

「ごめん、母ちゃんが起こしてくれなんだんじゃ」

「お前とこ、父ちゃんも母ちゃんも朝は早いんじゃろが」

「今日は休みなんじゃ。父ちゃんはまだ寝とる」

「ほうか。まあええ。よし行こか」

トシオは歩きだした。タカヨシたちも、小石を蹴ったり、小川の中を覗いたりしながら、トシオの後に従った。

町筋が電車通りに鋭角にぶつかる地点には、闇を焦がして真っ赤な炎が燃えていた。炎を受けて、人影がいくつもゆらゆらうごめいている。

炎は薪を一斗缶に放りこんだ焚き火だった。それを囲んで男たちが、大声で怒鳴ったり笑ったりしながら手を揉みかざしている。浴衣の胸をはだけ、首から手拭いを垂らしている男たち。火の当たらない闇の中にも、いくつも人の群れがあるようで、ガヤガヤと声だけが騒がしかった。

出陣を前にした野武士集団のようだった。猛々しい緊張感がみなぎっていた。

キヨシが大人たちの隙間からもぐり込んで一斗缶のかがり火を見つめていると、ユウキもやって来た。裏通りの子らや、電車通りの子らも集まってきた。キヨシの知らない中学生もいた。子供の群れは何十人にもふくらんできた。

「さあ、みんな集まったな。よし行くぞ」

大工の棟梁が凜と声を張り上げた。若い職人が一斗缶に水をバサツとかけて、出発だ。電車通りを巨大な集団が東に向かって進み始めた。

真っ暗だった空が、ほんのり淡く青みがかってきた。

昭和三十二年十月七日、松山地方祭の朝である。キヨシは四年生だった。

祭りは毎年十月五日に始まって、提灯行列などで心を昂ぶらせた後、本祭りは七日と決まっている。本祭りの日には松山の公立小・中学校は一斉に休校となる。会社や工場もたいは休みだ。

町の若い衆にとっては、羽目を外して騒ぐことのできる、年に一度の発散の日である。この日はかりは親方も職人もなく無礼講。飲み、かつ騒ぐことができるのだった。

ミコシが格納されている道後の神社まで、一キロあまりの電車通りを、子供は子供で、大人は大人でかたまつて、にぎやかに騒ぎながら歩いていく。

キヨシの町は、江戸の昔、北小唐人と呼ばれていた。北小唐人には、立派な大人ミコシと、他のどこにも負けない巨大な子供ミコシがあった。北小唐人は、年に一度、地方祭のときにだけ復活する、今はなき古地名なのだった。

「あつ、大唐人のやつらじゃ」

子供グループの大將格であるミツアキが叫んだ。ミツアキは大工の棟梁の息子であつて、トシオとヨシキの兄。中学一年生だ。

ミツアキの声に驚いて振り返ると、後方からやってきた市内電車に人が鈴なりにぶら下がっている。前にも後ろにも横にも、振り落とされんばかりびっしりと。

乗降口の踏み段と、前後についている障害物よけの金網とが、彼らの足場であつた。この日ばかりは運転手も車掌も、とがめ立てはしない。毎年恒例の無賃乗車なのだった。

大唐人は北小唐人同様に、祭りの日にだけ復活する古地名である。大唐人から道後までは二キロ以上ある。歩けば遠い。無賃乗車で電車に鈴なりに取りついているのは、大唐人ミコシの担ぎ手たちにはない。ミツアキと同級の中学生もいるらしく、

「おおい○○○、ただで電車に乗っとんか。いんちきするなよ。あした先生にゆうたるぞ」

「馬鹿、脳タリンのミツよ、のこのこ歩かずに、ちよつとは頭を使つてみい、ちよつとは」

「ちえつ、あほたれが」

「あほはお前じゃ」

キヨシは動転するほど恐怖に震えた。キヨシにはこうした啖呵や捨てぜりふを吐く勇氣はとてもなくあつた。ミツアキが日々暮らしている厳しい闘いの世界を垣間見た思いがした。

電車はまたたく間に走り去った。

道後には古い神社がいくつもあつて、ミコシはそれぞれの格納殿にしまわれていた。北小唐人ミコシは、伊佐爾波神社の石段横にあつた格納殿にしまわれていた。今はこの格納殿、取り壊されて、跡地が駐車場になっている。

キヨシたちが到着したとき、すでに多くのミコシが運び出されて道後界限を練っていた。神社か

らの運び出しを宮出しという。

道後の狭い町筋では、あちらでもこちらでも、

「ヨイサ、ヨイサ、ヨイサ、ヨイサ、ヨイサ」

「ヨイ、ヨイ、ヨイ、ヨイ、ヨイ」

勇ましいかけ声がとどろいていた。

(二)

格納殿は扉が半開きになっていて、中は真っ暗な空洞であった。これから何かが始まるというよりも、すでに何かが終わったあとの虚ろな静けさに包まれていた。残っているのは北小唐人ミコシだけのようだった。

大人に続いてキヨシも足を踏み入れた。中はぐるっと一巡りする回廊構造になっていて、黴臭い空気と身震いするような冷気に満たされていた。胸の奥まで思い切って空気を吸い込む気にはとてもなれない、底気味悪い空気であった。長い年月の中で沈殿し、濃さをましてきた太古の香りとも言うておこう。

床は頑丈な荒板敷き。足音が板に吸いとられて、綿雲の上を歩くような無音の感覚が不気味だった。明かりは、入り口にぽつんと灯った裸電球ただ一つ。奥に向かうと、自分の影で視界が閉ざされ、何かがそこにあることさえも疑わしい。

壁に沿って半周した頃、棟梁がようやくランプをともしてくれた。黒い物体が見えてきた。二体の北小唐人ミコシ。大人ミコシと子供ミコシであった。

佻しい姿に見えた。まるで路ばたで眠る野良犬のよう。闇に這いつくばってあごを地面につけた野良犬だった。

これが華麗で勇壮な祭りの裏側なのか。空虚なものをキヨシは感じた。だが、この空虚な佻しさを一年間耐え忍んだミコシにしか、年に一度の華麗と勇壮と賑わいはないのだろう。耐え忍ぶ一年間が真実なのか、壮麗な一日が真実なのか、キヨシにはどちらとも答えようがなかった。

実を言うと、二体のミコシは昨夜キヨシたちの町からトラックで格納殿に運び込まれたのだった。昨日は、家の近くの空き地に据えられていた。

北小唐人では、本祭りに先立ってミコシを町に呼びもどし、一年の埃を取り払って、磨き上げることになっていった。磨きの音頭取りはブリキ屋の棟梁だった。住み込みのブリキ職人を使って磨くのだ。

子供たちにも手伝わせた。子供ミコシは子供たちで磨いた。

ミコシを磨くには、最初にシンナーを含ませた布きれで汚れを落とし、次にクリーム状の研磨剤を振りかけながら布で丁寧な磨き上げていく。このときの独特の匂いを、キヨシは毎年、この時期がくるたび楽しみにしてきた。ときめくようなミコシ磨きの匂いであった。

子供ミコシの今年のまとめ役は五年生のトシオだった。日が落ちかかるころから始まることになっている。

空き地には煌々と裸電球が灯された。まさに出陣前の篝火だ。子供たちの興奮は否が応でも高まっていく。

北小唐人の子供ミコシは、どこの子供ミコシにも負けない大きさだった。大人ミコシと遜色がな

い。造りも本式だ。しかも、いつ作ったともしれない古色と風格に包まれていた。誰もが認める松山一の子供ミコシであった。

キヨシの気に入りは屋根磨きだった。四方からそり上がった屋根は金色に輝く真鍮板で、頂点にはきらびやかな鳳凰が取りつけられていた。

ミコシは二脚の床几の上にすえられている。長い二本のかき棒はキヨシのへその高さだ。その上に立ち上がると、四囲を睥睨できて、なんだか殿様になったような気分になる。

研磨剤をつけながら丁寧に磨いていく。

「力を入れすぎたらキズになるぞ。丁寧にやわらこう磨くんじゃぞ」

トシオが下からしょっちゅう注意する。

「わかっとる。去年もやったんじゃ」

キヨシが答えるそばで、ミノルも屋根を磨いていた。物心ついたところから、いやたぶんもっと前から、いつも一緒に遊んできた幼友だちだ。

ミノルの両親は離婚していて、家にいるのは母親と二人の姉とミノルだけ。母親は昼間はどこかに働きに出かけ、夜は夜で夜泣きそばの屋台を引いていた。上の姉は中学を終えると働き始め、下の姉は中学生だった。

家にはめったに母親がいないため、ミノルの家は子供たちのたまり場になっていた。家中引っかき回して走り回ったり、かくれんぼをしたり。かくれんぼでは、押し入れの中や洋服ダンスの中まで隠れ場になって、手内職の油紙を破ってしまうことさえあった。

こうしたことをミノルはいやがるどころか、一緒になってやるものだから、この遊びはとどまるところを知らずエスカレートした。

ミノルが一言「やめてくれ」と言いさえすれば、こんなに家の中を引っかき回されずに済むのに、キヨシはいつも思うのだが、ミノルはただの一度もそれを言わなかった。

ミノルの家に、ただ一つ、子供たちが決して立ち入らない部屋があった。姉たちの部屋だった。二人の姉が留守であることを知って、キヨシは襖を少し開いて覗いてみたことがある。中は、布団が敷きっぱなし。脱いだ衣服も脱ぎっぱなし。壁には一面、映画俳優のポスターが貼りつけられていた。息苦しいまでの毒々しさに堪えられず、開くと同時に襖を閉じてしまった。

またあるとき、何気なく襖のそばに近づくと、二人の姉のささやくような話し声が聞こえてきた。

「昨日の晩、お客さんにぎゅっと抱かれてしもうたんよ。チュウもされたんよ」

「へええ、すごい。どんな感じやった？」

いつもなら雑音にすぎない姉たちのささやき声が、このときだけは妙に心に沁み通った。触れてはならない禁断の果実。それは子供心にもわからないはずがないのだった。

「鶏はわしが磨くぞ」

突然ミノルが言った。

「なんでじゃ。鶏はわしじゃ」

キヨシも負けていない。屋根磨きの最大の楽しみは、最後に頂上の鳳凰を磨くことだった。

「去年はお前が磨いたじゃろ。今年はわしじゃ」

ミノルは食い下がる。

「おおい、喧嘩するなよ。どっちにするか、じゃんけんで決めいや」

トシオが取りなした。

ミノルがじゃんけんには勝った。するとキヨシは、

「ほんならちよつとだけやらせてくれ」

鳳凰の尾羽のひらひらをさつと一拭き、手で撫でた。

そこに美奈子がやってきた。美奈子は魚屋の娘で、キヨシより一つ年上、五年生だった。空き地の入り口で男の子たちのミコシ磨きを眺めている。キヨシも気づいて美奈子を見た。半袖のブラウスにスカートだった。いつもは浴衣なのになあ。キヨシは思った。

その年の夏、美奈子は日本舞踊のおさらい会にキヨシを誘ってくれたのだった。

「ねえキヨシちゃん、明日の晩来てね。お願いよ。七時からじゃけんね」

翌日、まだ日の残る夕暮れ時、キヨシは近くの公会堂に出かけていった。階段を上がると、二階の講堂にはびっしりイスが並んで、すでに空席がないまでに人で埋まっていた。ユウキとミノルも来ていた。彼らも美奈子に誘われたのだろうか。たぶんそうだろう。

太い電気コードが足元を縦横に這い、大きな照明器具や音響器具が設置されている。技師が照明や音響の調整をしている。見なれない光景に、キヨシの心は昂ぶった。

子供らが興奮しながら通路を走り回るうちに、やがて音楽がかかって、観客席がすうつと暗くなった。キヨシもユウキもミノルも隅っこに立ったまままで舞台を見つめた。おさらい会が始まった。どこかに美奈子がいるはずと探すけれども、出てくる人出てくる人、皆一樣に顔は真っ白、衣装はあでやか。どれが誰だか区別がつかない。結局、あれが美奈子だったと確信できる姿をとらえることができないまま、全曲目が終わったのだった。

みんなで帰り道をぶらぶら歩いていると、後ろから浴衣姿の美奈子が追いかけてきた。

上気した顔に、ほんのり化粧の跡が残っている。花柄の浴衣が似合っていた。端っこを歩いていたキヨシの横にさつと寄りそう。ほんのりいい香りが漂ってくる。

「今夜は、みんな来てくれてありがとう」

誰にともなく美奈子は言うのと、にこつと笑った。早春の梅の香のようなさわやかな笑顔だった。キヨシはそれまで、美奈子の存在を意識したことはなかった。出会うことも滅多になかった。なのに、おさらい会を境に、なぜか美奈子と道でしばしば出くわすようになった。美奈子は決まってもいつも浴衣姿だった。

ゴム縄跳びをする女の子の中に美奈子を見かけたときのこと。視線を避けて通りすぎようとしたのに、見つかってしまった。

「あっ、キヨシちゃん、一緒に入らない」

ゴム縄跳びなんて生まれて初めてだ。歌を歌いながら跳ぶのだが、一度やってみるなり、これは男の子の遊びではないと後悔した。どう見ても、跳ぶかっこうが女の子だ。

美奈子は上手だった。浴衣の裾をはしょって帯に差し込み、ひらりひらりと蝶のように跳ぶ。すらりとした足と甘い香りがキヨシの心をキュンとさせた。

美奈子はしばらくミコシ磨きを眺めていたが、気がつくのと、いつの間にか姿を消していた。

(三)

大工の棟梁がミコシに上がって「ヤーレノ」と一声叫ぶと、空気がぴりつと震え、「ヨイヤサ」と

ミコシが持ち上がった。子供ミコシもそれに続いた。薄暗くて気づかなかったが、よく見ると、大人ミコシにはロープが強く巻きつけられていた。おそらく昨晚、ミコシ磨きが終わったあとで、子供らが知らないうちに大人たちの手で巻かれたのだろう。そのうち、トラックで格納殿に運び入れられたのだ。

ロープが巻かれていることは、ミコシが臨戦態勢にあることを意味していた。

ミコシの胴体は神社の本殿を模して造られていて、精巧な細工が施されている。鉢合わせによってそれが破壊されることがないように、胴体の周囲にロープを巻くのである。戦士の鎧のように、このロープがミコシの本殿を守ってくれる。

ロープを巻いたミコシは殺気だつて見えた。猛々しい殺気を包みかくすように、屋根の上から真っ赤な飾り布をすっぽりかぶせることもある。これでロープは隠されるが、これでは爪を隠した鷹だ。飾り布を掛けられたミコシはかえって異様な凄みを周囲にまき散らすことになる。

今、北小唐人の大人ミコシは血気にはやる若獅子であった。ロープを強く巻きつけて、闘志と戦意を露わにしている。

格納殿を出た。

「ヨイヨイ、ヨイヨイ」

地鳴りのようなかけ声とともに石段を下っていく。子供ミコシもそれに続いた。

石段の下で、ミコシは頭上高く持ち上げられた。

「マワセ、マワセ」

ミコシはぐるぐる回される。さらに左右に揺すられ、再びぐるぐる回される。何度もこうして激しくミコシを揺さぶるうちに、かき手はいつしか陶醉境に入っていく。

再び肩にのせると、

「ヨイヨイ、ヨイヨイ」

足をふらつかせながら、道後の町を練り始めた。

そこに別のミコシが現れた。にらみ合いになる。しばらくにらみ合っていたが、やがてどちらからともなく、

「やるか、もてこい」

挑発し合い、そのうち

「もてこい、もてこい」

の大合唱となる。互いの興奮が頂点に達し、機が熟したとみるや、屋根に乗っている棟梁同士が「よーし」と大声で合図をし、勢いをつけてどすんとミコシをぶつつけ合う。ミコシは必ず横からぶつつける。

「よんじゅうごーど、よんじゅうごーど」

のかけ声で、ミコシを横に四十五度傾けると、そのまま相手に向かってカニのように横向きに走り込み、ガツンとぶつつけるのだ。ロープを強く巻いていないと、衝撃でミコシは粉々に砕け散ってしまう。

その後、しばらくもみ合ったのち、やがて離れる。再び「もてこい、もてこい」の大合唱となる。

「ガツン」とぶつつける。二度三度とこれを繰り返した後、二台のミコシは激しい捨てぜりふの応酬とともに、すれ違っていく。

キヨシは口をぽかんと開けて見入っていた。子供ミコシを担いでいることも、肩にずしんとくる重みも、すっかり忘れて見入っていた。

ミコシの鉢合わせは、のちには大勢の見物人を集めて演じられる一種のショーと化していった。しかし、当時はまさしく出会い頭のケンカであった。そのため、ロープを巻いたミコシはケンカミコシと呼ばれていたのである。

道後の温泉街を抜けると、大人ミコシには真っ赤な飾り布が掛けられた。これは戦う意志のないことの宣言である。戦う意思がないとは言っても、真っ赤なミコシはキヨシの目には異様な迫力だった。

子供ミコシのかき手は三十人ほど。学年がまちまちで肩の高さが揃わないので、背の低い子には座布団が与えられた。一枚で足りなければ、座布団を半分に分けて肩に当てるか、もう一枚座布団が与えられた。キヨシは半分に折った座布団の上に両手の平を当て、それでようやくミコシの重みを感じる事ができた。

「わっしょい、わっしょい」

精一杯の声を張り上げながら大人ミコシについて行く。キヨシのかき位置は左後方だった。すぐ前にミノルがいた。後ろはタカヨシだった。タカヨシは意気地のない子で、すぐにかくのをやめてぶら下がろうとする。

「あつ、重たいが。ちゃんとかけや」

その都度キヨシが後ろを振り返って、文句を言う。

「へへ、わかったか」

タカヨシはそう言うけれども、一、二分もすると、またぶら下がる。

「ええかげんにせえよ」

キヨシが言うと、ミノルも振り返って、

「タカちゃん、やめいや。そんなんするんじゃったら、後ろからついて歩け」

タカヨシは荒物屋の子で、キヨシたちより学年は一つ上だが、歳の差を誰からも意識されていない。気が小さくて、おとなしかった。それでいていたずら好きで、妙に我を張り、人と違うことをしないと気が済まないところがあった。

あるとき、路地で遊んでいると、タカヨシがいきなりポケットからバナナの四つ切りを取り出した。これ見よがしに皮を剥いて食べ始めた。まわりの子らはあっけにとられて、遊びをやめて取り囲んだ。

「うまいぞ。お前らにはやらんぞ」

鼻をしゃくってそう言うと、うまそうにかじった。当時、バナナは最高級のおやつだった。いつも鼻汁を垂らしている三年生のヨシキは、

「タカちゃん、なんでそんなもつとるん。ちよつとかじらしてや」

鼻汁とよだれを舌先で練り合わせながら、そう言った。

キヨシも、思わず唾を飲んだ。だが、タカヨシの突然の行動が自分に起因していると知っているキヨシは、バナナをかじるタカヨシを、ただらやましそうに眺めているわけにはいかなかった。タカヨシがバナナを一口かじるたびに、キヨシの心には、悪いことをしたと、慚愧の思いが噴き出すのであった。

彼らはカン蹴りをして遊んでいた。オニになったタカヨシはいつまで経ってもオニから抜け出せないでいた。カンが誰かに蹴られると、つかまって捕虜は逃げて行って、オニはその都度カンを元に戻して、また始めから子供たちをつかまえないといけない。あと一人か二人というところまでくると、決まってキヨシがカンを蹴飛ばしてしまうのだ。それが三度も四度も続いていた。

蹴飛ばす快感はキヨシにはたまらなかったが、蹴られたときのタカヨシの今にも泣きだしそうな表情も、キヨシには見えていた。次にはおとなしく捕まってしまおう。そう思った矢先、蹴られて遠くへカラカラ鳴っていくカンを追いかけてやうとせず、タカヨシがポケットからバナナを取り出したのだった。

カン蹴りでオニがいつまでもオニから抜け出せないのは、この遊びの宿命だった。誰がオニになっても、カンは執拗かつ巧みに蹴られ続けた。意地悪ではない。子供たちが知恵を絞った結果がそうなるのだ。必然、オニになった子は懸命に堪えることを学ぶことになる。

タカヨシは遊びの虚構を、もはや虚構とは受け止められなくなっていた。こしらえてもこしらえても、完成間際に波にさらわれてしまう砂の楼閣。これは虚構と言うより、あらゆる現実を背後であやつる宇宙の摂理であった。タカヨシはその摂理に打ちのめされた。悲しみが虚構の堤防を打ち砕いてしまった。

「今度はぼくがオニになる」

キヨシは誰にもなくそう言った。タカヨシは上目遣いにキヨシを見つめ、ポケットからバナナをもう一切れ取り出した。

「悪いけん、お前らにもちよつとやろうわい」

差し出したバナナをキヨシはひったくった。皮を剥いて一口かじると、そばにいたミノルに手渡した。順に回って、最後にはよだれを舐めていたヨシキがかじって、バナナは消えた。

タカヨシはミコシの重みに耐えかねていた。まわりの子らより少し背が高い分、食い込んでくる重みは大きい。その重みが、「わっしょい、わっしょい」と声を揃える喜びの陶酔からタカヨシを押し出してしまふのだ。自分で自分を制御できなくなったタカヨシの悪ふざけは、手がつけれられない状態になっていた。

「勝手にせい」

キヨシは腹の内でそう思った。

ミコシは電車通りを道後から公園前へ、そして南町停留所までやって来た。そこから先は北小唐人のテリトリーである。

「下ろせー」

やがて大工の棟梁の合図でミコシは空き地にすえられた。肩にかかる重圧から解放された。朝の太陽がまぶしかった。

「九時から巡幸じゃ。それまでに朝飯食うてこい」

棟梁が子供たちに叫んだ。大人ミコシのかき手のためには、ブリキ屋の作業場に握り飯と酒と肴が用意されていた。

(四)

キヨシは家に戻ると、大急ぎで朝食を掻きこんだ。そして表に飛び出したときには、トシオとヨ

シキはもう外を駆け回っていた。三人で追い駆けっこをしているところに、ユウキが現れ、続いてタカヨシが。さらにマサシもクツをトントンさせながら外に出てきた。裏通りの子らや電車通りの子らも集まってきた。残るのはミノルだけとなった。呼びに行くことにした。

「ミーノルちゃん」

キヨシがいつものように玄関の外から呼びかける。すると、少し間をおいて、

「ちよっと待って」

ミノルの声が出た。しかし、すぐ上の姉の声が、それにかぶさってきた。

「ほんとに行かんのじゃね。母ちゃんにあとで怒られても知らんよ。あたしは行くけんね。お昼はこれであんパンでも買って食べて」

「うん、わかった。わかったけん、はよ行けや」

「二十円わたすよ。落とされんよ」

キヨシはなんだか切なくなってきた。ミノルの家が複雑な事情にあるらしいことは、子供ながらに勘づいていた。子供らが家の中を引っかけ回しても、それがいつまでも片づけられずに、そのままになっていることが多かった。こうした家の荒れように言葉にならない悲しみを覚えるのだった。

母親は昼も夜も外で働き、めったに家にはいなかった。上の姉も家にいることは少なく、キヨシはその顔をまじまじと見つめたことはなかった。ミノルの世話をするのはもっぱら中学生であるすぐ上の姉だった。だが、彼女も学校から帰ると、また出かけてしまうことが多かった。

彼女が自転車を出かけるところをキヨシは何度も見かけていた。派手なスカート、髪には大きなリボン、唇は真っ赤に塗られて、頬は化粧でほの白く照っていた。とても中学生とは見えなかった。退廃の匂いが漂っていた。制服姿で帰宅する彼女に出会うこともあったが、そのときさえ、退廃の色を思わずその上に重ねてしまうのだった。

母親が近々再婚するらしいと、町に噂が流れていた。男の人がやってきて泊まっていたとか、母親が夜も帰ってこないとか、尾ひれのついた噂が口から口へとさざ波のように伝搬していた。

「朝は食べたん」

玄関から出てきたミノルに、キヨシはそっと聞いてみた。

「うん、食べた。姉ちゃんがおいも焼いてくれとった」

ミノルとキヨシは物心つくより前からの大の親友だった。ミノルは勉強はできなかったが（とキヨシは勝手に想像していた）、根はキヨシよりもはるかに正直で、隠し立てをせず、心やさしく、ひょうきんだった。とても人には言えない恥ずかしいことでも、本当のことなら、隠したり、飾ったりはしなかった。芯から正直だった。

そんなミノルに比べると、キヨシは引つ込み思案で不正直。ありのままの自分を外にさらすことを無意識のうちに抑えてしまうことがよくあった。自分だったら、お芋だけ食べたなどはとても人には言えないだろうなあと、即座にキヨシは思うのだった。

集まった子供らはブリキ屋の作業場に入っていた。

作業場では、大人たちが一升びんを片手に、まるでケンカをしているように、大声で罵り合ったり、笑い合ったりしていた。

握り飯と盃を交互に口にしながら管を巻く人、上がり口に腰掛けて誰にもなく大声で叫びかけている人、土間にじかに腰を下ろして一人でぶつぶつ何かを言っている人……。作業場には、無数

の怒声や笑い声が飛び交っていた。

子供らには、これは鬼の巢か怪物の世界にしか見えなかった。身を縮めて土間の隅に固まっていた。すると、棟梁の奥さんが近づいてきた。

「みんな、こっちにお出で。さあさあ、お食べ、お食べ」

奥さんが差し出す皿には、薄く切ったかまぼこが刺身のように並んでいた。トシオが一枚つまんだ。キヨシも黙って手を伸ばす。みんなそれぞれつまんでいった。つまんだまま、食べないでいると、

「なに遠慮しとるん。はよ食べんかね」

奥さんに言われて、キヨシはかまぼこの赤い背中に前歯で歯形を立てた。ウサギのようにちびりちびりとかじっていく。かじりながら外に出た。

キヨシの手にはまだ何枚か、かまぼこが握られていた。それをそっとミノルの手に握らせた。

子供たちが外でさんざん遊び回ったところ、ぐだぐだと管を巻きながら、大人たちがようやく裏口からあふれ出てきた。空き地に向かう。子供らもあとに続いた。空き地には、いつの間にしつらえられたのか、小さな祭壇ができていた。白装束に袴を着けた神主もいた。

神主が御幣を振って、祝詞を上げると、いよいよミコシの巡行である。

「ヨイヤサ」

ミコシがかき上げられた。

「ヨイヤサ、ヨイヤサ、ヨイヤサ、ヨイヤサ」

怒濤の掛け声がとどろき始める。子供ミコシもかき上げられた。

「ワツシヨイ、ワツシヨイ」

大人ミコシの後に続いて空き地から出る。

角は自転車屋、向かいは左官屋。いつもの道を、ワツシヨイ、ワツシヨイ。

左官の隣は大工の家だ。資材置き場が長々続く。ワツシヨイ、ワツシヨイ。

次はブリキ屋。一人娘が顔を覗かせ、ワツシヨイ、ワツシヨイ。

向かいには油揚げ屋。キヨシの家だ。新しい看板が朝日に照って、ワツシヨイ、ワツシヨイ。

油揚げ屋の隣は小さな八百屋。亭主が丸顔見せて、ワツシヨイ、ワツシヨイ。

八百屋の向かいには貸本屋。怪盗ルパンがキヨシの気に入り。ワツシヨイ、ワツシヨイ。

貸本屋の隣はうどん屋だ。一杯十円。甘い香りに腹が鳴る。ワツシヨイ、ワツシヨイ。

続いてたきぎ屋。屋根まで届くたきぎの山だ。炭も売ってる、ワツシヨイ、ワツシヨイ。

向かいには駄菓子屋。新店だ。ピカピカすぎて子供は寄らない。ワツシヨイ、ワツシヨイ。

隣も駄菓子屋。古店だ。にこにこ笑顔のおばあさん、戸口に立って、ワツシヨイ、ワツシヨイ。

向かいには洗濯屋。白い蒸気がシューシュー噴いて、ワツシヨイ、ワツシヨイ。

洗濯屋の筋向かいには荒物屋。あらゆる生活道具がびっしりぎゅうぎゅう。ワツシヨイ、ワツシヨイ。

こうしてミコシは町筋を進んでいった。

陶酔しているキヨシには、見なれた町が異世界に見える。半分くらいの店が閉まっていた。時が止まった死のポンペイを、ミコシの列は怒濤のように進んでいく。

荒物屋をすぎると、隣の隣が魚屋だ。キヨシの胸がキューンと一瞬鳴った気がした。

「ヨイヨイ、ヨイヨイ」

「ワツシヨイ、ワツシヨイ」

空気を揺さぶるこの掛け声を、きつと美奈子は聞いている。鍍戸が下りた店の奥で聞いている。妹と二人で聞いている。

ミコシを見ようと美奈子はきつと出てくるだろう。浴衣姿で出てくるだろう。

キヨシの目には、おさらい会で見た美奈子の残像が、いまだにくつきり焼きついていた。帰りの道でほのかに匂った甘い香りもよみがえってきた。

浴衣をブルーマーのように腰のまわりにたくし込み、白い足をすらりと伸ばしてゴム縄跳びをする美奈子の姿も浮かんできた。

ミコシを磨いていたとき、空き地の入り口で「あれっ」という顔をした、昨晚の美奈子の表情も鮮烈だ。

美奈子に手を取られてどこか遠くに行くような、このドキドキ感は何だろう。思い返すだけで心がずきずきするのはなぜだろう。

(五)

キヨシの父親が玄関土間で長い木の棒にカンナをかけていた。削りカスが勢いよくしゅっしゅつと刃の間から飛び出してくる。くるっと巻いては土間に散る。ざらざらだった木の表面がたちまち艶を帯びて光り始めた。

一本仕上がり、二本目の棒を台の上に取りつけようとした父親に、

「ぼくにもさせて」

キヨシが言った。

「難しいぞ。子供には無理、無理」

「ちょっとだけでええけん、させて」

「カンナがすべって怪我でもしたらおおごとじゃ。やめとけ」

「大丈夫、父ちゃんがするん見よったんじゃ、おんなじようにするけん」

「ほうか。まあ、ちょっとだけやってみるか。氣いつけてせいよ」

キヨシは、父親からカンナを受け取った。刃を棒の表面に押しつける。両手を添えて手前に引いた。削りカスがしゅつと飛び出してきて、棒の表面がつるつるになる、そのイメージで手前に引いた。

ところが、カンナはちっともすべってくれない。カタカタ音を立てて、棒の表面につつかえる。力をこめると、カンナは棒に食い込んで、にっちもさっちもいかなかった。

「木にはのう、順目と逆目ゆうもんがあるんじゃ。キヨシは逆目に削つとる」

父親が棒の表面を指先で撫で、

「こっちから削れ」

棒を反対に向けてくれた。今度は少し削れた。しかし、まっすぐ引くことができないで、かえって表面はキズだらけになる。

「子供には刃が出すぎとるんかもしれん。ちよつと引つ込めてやる」

父親は金槌で刃の横をとんとんと叩いた。そして、目を細めて確かめる。

「よし、これくらいでええじゃろ」

抵抗が減って、すべりやすくなつた。これなら削れそうだ。しゅっと引く。ようやく削りカスが始めた。だけど、やればやるほど、つやが出るより、キズが深まる。

「ハハハ、なかなか難しいじゃろ。最初からうまいこといくはずがない。貸してみい」

父親にバトンタッチした。途端にしゅっしゅっと表面がリズミカルに削れていく。キヨシがつけたへこみキズもたちまち平らにならされていく。

「父ちゃん、すごい」

思わずキヨシは叫んでいた。これはもう神業だ。

キヨシの父親は若いころ、下駄工場で下駄を作っていた。木の扱いはプロ級だ。プロ級どころか、本物のプロだった。父が下駄作りをしていたことを知らないわけではなかったが、その技術が今、目の前に展開されているとは思ってもよらないキヨシには、ただびっくり仰天、目を見張るしかないのだった。

長い棒が二本できた。表面はつるつる光って、とがった角も丸く削られている。

「これ何にするん」

「まあちよつと待つとれ」

父親は二本の棒を平行に並べ、真ん中に、板を数枚渡して釘付けした。筋かいも入れて釘づけした。さらに板の上に木の箱を置く。

木の箱はよく見ると、キヨシが幼いころ使っていたおもちゃ箱だった。分厚い板でできた頑丈な箱だ。中から何が出て来るかと、いつもわくわくする魔法の箱だった。

いつもは押し入れにしまわれていて、遊びたいとき母親が取り出してくれた。中にはわけのわからないガラクタが入っていた。手を突っ込んで手当たり次第に引っ張り出した。壊れたおもちゃ、手足のもげたぬいぐるみ、得体の知れない機械の部品、途中でやめてしまったぬり絵、……、キヨシの目には、出てくるあらゆるものが夢色に輝く宝石だった。

忘れていた遠い昔が蘇ってきた。この箱から夢を取り出さなくなって何年たつんだらう。忘却の彼方に置き捨てていた懐かしい箱だ。

成長の記念碑のように、箱は板の上にしつかり固定された。

続いて、箱の上にフタが取りつけられた。さらにそのてっぺんに小さな直方体の木ぎれが打ち付けられた。

「ミコシじゃ、父ちゃん。そうじゃろう」

父親は笑ってうなずいた。

祭りの日から一週間ばかりたっていた。キヨシたちはいまだに祭りの興奮から醒めやらず、毎日、マサシの家にある小さなおもちゃのミコシで遊んでいたのだった。

だがこれは、みんなで遊ぶには小さすぎた。前後左右に一人ずつとりつけば、あとの者はついて歩くだけになる。それでも、交代しながら飽きることなく、毎日それで町を練り歩いた。

十月も中旬になると、蕭々と雨の降る日が増えてきた。濡れると身震いするほど肌寒い。それでもキヨシたちはミコシをかついで歩くのだった。

新しいミコシに子供たちは飛びついた。

「これなら大きいし、ケンカミコシになるぞ」

トシオが言いだし、さっそく大工の棟梁である父親から荒縄をもらってきた。タカヨシがぐるぐる縄を巻きつけ始めた。キヨシも手伝った。あらかた巻きつけ終わったところで、黙って見つめていたトシオが、もう我慢ならないという顔で、

「おまえらなにしとる、きちんと巻かんか。そんなんじゃ、すぐに縄がゆるゆるになつてしまふぞ」

言うなり、せっかく巻いた縄をほどいてしまった。そして初めからやり直した。まず前後と左右の縦方向に縄をかけた。コイルを巻くように隙間なくびっしり巻いた。ミコシの胴体は縄で覆い尽くされ、勇壮な縄ミコシになった。これで終わりかと思っていたら、さらに横にぐるぐる巻き始めた。強く強く締めつけていく。

トシオの几帳面さにキヨシたちはあきれてしまい、そのうち見ていることにさえ飽きてきた。

「もうええがあ。はよかつごうや」

みんなは何度も言うが、トシオは

「馬鹿、きちんと巻いとかんと、ケンカでやられるんじゃ」

道ばたにしゃがみ込んで熱中しているトシオをほったらかして、キヨシたちは追いかけて遊び始めた。

「できたぞ」

トシオの声に振り向くと、ミコシは勇壮そのもののケンカミコシに変身していた。すつと伸びた二本の柄のほかは、ぐるぐる巻かれた縄ばかり。それがなんとも勇ましい。

「トシちゃん、すごいなあ」

みんなは叫んだ。新しいミコシは、前後左右に三人ずつ、いや四人ずつでもかくことができた。

小さなおもちゃミコシとはわけが違った。

勇んできついで、「ヨイヤ、ヨイヤ」と突き上げた。雨上がりの秋の冷気を胸一杯に吸い、キヨシの心は浮き立った。

町を練るうち、美奈子の家の前までやってきた。

「わっしょい、わっしょい」

大きな声を張り上げる。だが美奈子が出てこなかった。

近ごろ、美奈子を見かけなくなっていた。あの祭りの日にも、美奈子が出てこなかった。

美奈子の母親が店番をしていた。氷の上に魚が並び、その上にさらに氷が振りかけられている。うろこが秋の日に虹のようにきらめいていた。

「ミナちゃん、どうしたん」

そう聞く勇氣はキヨシにはなかった。女の名前など口に出したら、みんなから笑いものになる。キヨシは息苦しくつてたまらなかった。

(六)

数日後、いつものようにミコシで遊んでいると、裏通りの子らがミコシを繰り出して来た。裏通りの子らは五年生がメイン。キヨシたちは四年生が大半。力が違う。しかも、彼らのミコシは樽ミコシだった。樽ミコシは胴体がずんぐり太くて頑丈だ。

普段から、彼らと遊ぶことは滅多になかった。彼らは乱暴者だ。キヨシの目にはそう映っていた。

彼らが群がり遊んでいるそばをすり抜けるときには、いつも背筋に緊張が走るのだった。祭りの日には、一緒に北小唐人ミコシをかついだ仲間ではあったが、やはり彼らと親しむ気にはなれなかった。

樽ミコシに縄は巻かれていなかった。ケンカをする気はないらしい。少し安心した。

ところがそれも束の間、五年生のトシオが

「次郎、どうじゃ、やるか」

ケンカをふっかけたのである。キヨシはミノルの顔を見、ユウキとも目を見合わせた。二人ともケンカはいやという顔をしていた。マサシもタカヨシもそうだった。電車通りのノブちゃんもヨツちゃんも、みんな平和主義者でケンカはいやという顔つきだった。

トシオに同調しそうなのはヨシキくらいのものであった。ヨシキはトシオの弟で三年生。やんちゃ者だった。今日は学校で何人泣かせてきたと、毎日自慢げに報告する子であった。

同じ兄弟ではあるが、トシオとヨシキは心根が真逆だった。トシオは元来、気のやさしい繊細な子で、人と争いをする性分ではなかった。腕のよい大工の血を引いていて、どんな物でも器用に作った。トシオが作った飛行機ダコは、風をはらんでぐんぐん上がった。

生き物を飼うのも大好きで、カナリヤ、金魚、メダカなどを飼っていた。世話を親や兄たちに焼かせることは決してなかった。餌やりから、鳥カゴの掃除、水槽の水替えまで、すべて一人でやっていた。いっぱいおるのに、こんな面倒なこと、ようできるなあと、キヨシはいつも感心しながら見ていたのだった。少し大きくなると、伝書鳩さえ飼うようになった。鳥や金魚を見つめているトシオの目には、うっとり夢を見ているような優しさがあつた。

「トシちゃん、なんでケンカなんかするん」

トシオの背中に尋ねようとした矢先、

「お前ら、ほんとにやるんか」

次郎と呼ばれた相手が言い、

「ほんとじゃ」

トシオが声を荒げた。

「よし、ほんなら三十分後に試験場の広場に来い」

あつという間に果たし合いの約束ができてしまった。キヨシは恐怖に震え、心臓が今にも飛び出しそうだった。

「やめようや」

樽ミコシが去っていくと、マサシが言った。ヨシキは鼻をすすりながら、

「おもしろくなったなあ、兄ちゃん。負けせんで、絶対に」

トシオがどうしてわざわざ自分からケンカを売ったのか、キヨシにはわけがわからなかった。五年生の意地だろうか。トシちゃんはぼくらの大将なんじゃ。大将というのは敵を前にしたら、威張ってみせんといかんのじゃ。そう考えて納得しようとした。だけど、向こうにその気がないのに、わざわざケンカを売ることにはなかるうに。

先日、一人で縄を巻いたときから、トシちゃんはミコシでケンカするつもりじゃったんじゃ。どのミコシでもええ、自分の腕を試してみたかったんじゃ。そんな気がした。

こうなったらもう後には引けない。トシオは事細かに作戦を授けた。ぶつけ合うときのミコシの

角度、柄と柄がからみついたときの力の入れようなどを説明した。

「押すだけじゃいかんぞ、相手が力を入れてきたときには、引いて相手を崩すんじや。怖がったらいかんぞ、なあキヨシ」

なんでわざわざぼくの名前を出すんじや。いちばん怖がつとるんはトシちゃんじゃないんか。キヨシは思った。トシオの悲壮感が伝わってきた。トシちゃんのためだ、やってやろうという気持ちになってきた。

こうなったら勝ち負けは問題じゃない。主君のために命を捨てる武士の心意気だった。

赤穂浪士の討ち入りのように、肅々とミコシは広場に向かった。広場というのは農事試験場のテニスコートのことだ。休日に独身寮の若い研究員がときどき汗を流していた。だがたいていはネットがはずされ、近所の子供たちの遊び場になっていた。

キヨシたちが着いたとき、樽ミコシはすでに広場の中央に陣取っていた。しかも縄が巻きつけられて、すっかりケンカミコシに変貌していた。それを囲んで屈強そうな五年生が群がっている。

「おう、来たか、待ったぞ」

彼らは樽ミコシをかつぎ上げると、「ソーレ、ソーレ」と氣勢を上げた。

トシオは恐怖を隠して声を振り絞った。

「次郎、くるか」

そして、味方に向かって、

「やるぞ、負けるなよ」

二つのミコシは氣勢を上げながらテニスコートをぐるぐる回った。やがて戦意が昂ぶってくると、どちらからともなく接近した。

「よーし、いけ」

相手の大将が叫んだと思うと、向こうが一瞬早くぶつかってきた。がつんと音がした。半秒ほどではあったろうが、先手を取られたキヨシたちは、あわや腰砕け。だがなんとかへっぴり腰で持ち直す。この瞬間、練りに練っていたトシオの作戦は吹っ飛んだ。わけのわからない戦いに突入してしまった。横からぶつかり、前からぶつかり、ミコシは激しくもみ合った。

もみ合ううちに、力の差は歴然としてきた。キヨシたちは押されに押されて、ミコシを持ち上げていることさえ、限界に近い。

相手はミコシの柄と柄をからませた。十分組み合ったところで力をこめた。

万力で締め上げられるような異様な力を感じたその瞬間、バリバリッと不気味な音がした。こらえていた力が突然ガクツと空を切った。気がつくともミコシが地に落ちていた。柄と胴体がバラバラになって、負け犬の死体のように転がっていた。転がっていたのはキヨシたちのミコシ。

思わぬ結果に、敵も味方も声がない。死の静寂があたりを包んだ。

しばらくは涙をこらえて立っていたが、やがて、残骸となったミコシを、みんなで何も言わずに引きずって帰った。

背後から勝ちどきと罵りの声が轟いてきた。

父親が丹念にカンナで削り、精巧に組み立ててくれたミコシが、負け犬の死骸になってしまったことをどう伝えればよいのだろう。せつかくの父の丹誠が穢されたようで、涙が止まらなかった。トシオも悄然とうな垂れていた。

負けるとは思っていなかったのだろうか。それが不思議でならなかった。この結果はわかっていたはず。大将としての力のなさを、いまさらのように見せつけられたトシオが哀れでならなかった。なんでケンカなんか思い立ったんだろう。トシオもまた、自分で自分が不思議でならないのだった。あのとき突然、自分の中から自分ではない何か飛び出した気がした。自分を包んでいた殻がいきなりはじけて、押し込められていた何か飛び出した気がした。

日は傾きかかっていた。西空が茜色に染まってきた。ミノルが大きな声で歌いだした。

「ぎんぎんぎらぎら夕日が沈む」

キヨシとトシオがあとに続いた。

「ぎんぎんぎらぎら日が沈む」

ミノルがさらに、

「まっかつかつかサルのかつ」

みんな、ワハハと笑った。涙が消えた。みんなで歌った。

「おサルのお顔もまっかつか

ぎんぎんぎらぎら日が沈む」

(七)

翌日、キヨシが学校から帰ると、土間に新しいミコシが据えられていた。父親が腕を組んで立っている。

「どうしたん、これ」

「直したんじゃ」

たしかにあのミコシだった。犬の死骸になったミコシが、前にもまして勇壮な姿となってよみがえっていた。

「どうじゃ、これならもうどこのミコシにも負けんぞ」

「うん、そうじゃなあ」

父親の満足げな顔と、見事に復活したミコシを見つめて、キヨシは目を輝かせた。だが、すぐに悲しくなってきた。喜んでいいのに、どうして悲しくなんかなるんだろう。父親がありったけの技術と丹誠をこめて修理してくれたことが、かえって悲しくてならないのだった。

いくら心をこめて直してくれても、あの連中には勝てっこないんだ。次にはもっとひどい目に遭わされる。父ちゃんの丹誠とやさしさは、そのたびに踏みにじられて、粉々に打ち砕かれてしまう。

底なしに恐ろしい連中なんだ、あいつらは。

もう直さんでええよ、父ちゃん。壊されたら壊されたままでええよ。直しても直しても、穢されるんは父ちゃんなんだから。

「父ちゃん、もうええ。ミコシ遊びはやめる」

上の空でそう言った。父親も、

「そうか。わかった。そんならこのまま物置にしようといてやる。来年になったら、またこれで遊びとうなるかもしれんからな」

キヨシはランドセルを外して外に出た。家の前をマサシが通りかかった。

「もうミコシはやめて、城山にドングリ採りに行こう」

ミコシがどうなったかと様子を見に来たトシオ、タカヨシ、ミノル、ユウキ、ヨシキらも加わった。みんなで城山に向かった。手にはみんな下足袋を抱えていた。

石段を登りきり、さらに少し歩いて脇にせれると、ドングリがびっしり、下草を埋め尽くすほど落ちていた。探すというより、手ですくうだけ。下足袋はたちまちドングリで一杯になった。

「馬鹿みたいに採れたなあ」

袋は一杯になっても、何か物足りない。落ち葉を尻の下に敷いて石段の縁を猛スピードですべり降りるスリルで野生を燃焼させてから、帰路についた。

花田さんのケーキ屋に、花田さんの姿はなかった。

平和通りに出、広い歩道を上一万交差点までやってきた。そこからキヨシたちの住む裏通りに入っていくと、角にたばこ屋があり、その隣はダンスホール。ミノルが扉の隙から覗きこむ。続いてキヨシも覗きこむと、赤や緑のほの暗い照明の下で、男と女が踊っていた。

「コレツ」

受付のおばちゃんに叱られた。

ダンスホールの隣は八百屋だ。その向かいも八百屋。二軒の八百屋が向かい合い、競り合っている。どちらも野菜や果物を道ばたにまではみ出して並べ、漬け物の匂いをつんつんさせている。

その横の肉屋の入り口には豚のポスターが貼りつけられていた。豚はまっ二つに切られて、頭と前足と胴体の前半分しかない。切り口はハムである。これを見て、ハムというのは豚を輪切りにして作るんだと、本気で信じこんでいたのも、遠い昔ではない。

幼いころ、熱を出すたび往診に来てもらった内科医をすぎ、保険会社か何かの事務所をすぎると、次は魚屋だった。

このところずっと美奈子の姿を見ていない。近ごろでは、前を通っても心臓がときめくことさえなくなった。なぜだか知らないが、美奈子にはもう会うことがないような気になってきていた。

裏通りの酒屋の奥さんが買物に来ていた。美奈子の父親が魚をさばっている。鱗を取り、はらわたを取り出し、三枚におろす。鮮やかな手さばきにキヨシは見入っていた。

気がつくのと、みんなは先を歩いている。

「ミナちゃんの具合どう」

酒屋の奥さんが聞いた。包丁を使いながら、父親が

「ようはわからんけど、難しいことになっとるらしい。一、二日前にいったん意識は戻ったんじやけど、また昏睡よ。三途の川を渡ろうかどうしようかと思案しとるみたいじゃ」

「ええつ、それはおおごとじゃない。あんなに元気じゃった子がどうしてねえ」

キヨシの全身から血が引いた。

「祭りの前の晩じゃったかいのう。晩飯食うたら、急に頭が痛い言い出してな。言い終わらんうちに、ふらふらつと倒れてしもうた。びっくりして日赤に連れて行ったんじや」

えつ、ぼくが最後にミナちゃんを見たんもその日じゃった。ミコシを磨いとおいたら、空き地の入り口にミナちゃんが立っとな。ぼくがそっちを見たら、ミナちゃんもぼくの方を見て、あれっという顔したんじや。次に見たときには、ミナちゃん、もうおらんかった。あの晩倒れたんか。

翌日、学校の帰りにキヨシは一人で日赤の門をくぐった。日赤は学校に隣接している。この門は一年生のとき何度かくぐったことがある。キヨシがいつもぼんやりしていて、話もしないのは耳が

聞こえにくいからかもしれないと言っ、母親に連れてこられたのだった。何日も通って、鼻から水を入られた。その都度つーんときて、涙が出たのを思い出した。

案内所で美奈子の部屋を聞いた。「面会でできませんよ」と言われた。それでも、部屋の番号は教えてくれた。

部屋まで行ってみた。そつと扉を開けた。美奈子の母親がベッドのそばに座っていた。キヨシに気づいて、

「あれっ、あんた揚げ屋の子じゃね、見舞いに来てくれたんかね。お入り」

心臓をどきどきさせながら、ベッドのそばに近づいた。美奈子は白い顔をさらに白くさせ、目を閉じていた。いろんな管が、鼻や腕に挿されていた。鼻と口には透明なマスクがかぶせられていた。

ミナちゃん、死ぬんじやろうか。このまま死んでしまんうじやろうか。もう遊べんのじやろうか。なあ、もういっぺん一緒にゴム縄跳びしよう。着物着て踊るの、また見せて。祈るように、そう思った。

「あんた、ようここがわかったねえ。ありがとう。今日は、朝ちよつとだけ目を開けたんよ。ようなつてくれたらええんじやけどねえ」

キヨシはどう答えたらよいかわからなかった。ただ「うん」とだけ言っ、美奈子の顔を見つめていた。ミナちゃん、目を開けたんか。そんなら大丈夫じゃ。ようなつたら、また一緒に遊ぼうな。

「美奈子」

母親が呼びかけた。そのとき美奈子のまぶたがかすかに動いたように思えた。

「揚げ屋の子が来てくれたんよ、美奈子」

かすかに開いたまぶたの奥で、黒い瞳がきらつと光った。そんな気がした。キヨシに気づいて、あれつと不思議がったようにさえ思われた。

翌々日、学校の帰りに魚屋の前を通ると、店が閉ざされ、黒い服を着た人が忙しそうに動き回っていた。

ミノルがぼつんと店の角に立っていた。

「キヨシちゃん」

ミノルの声がむなしく秋空に吸いとられていった。

■農業祭の楽しみ

十月七日の地方祭が済み、興奮の余韻のミヨシ遊びにも飽きてきたころ、子供らの前にちらつき始めるのは農業祭である。

農業祭は、十一月一日から三日まで、農事試験場で年に一度開かれる祭りだった。秋の収穫が済み、きつい労働からひととき解放された近郊の農家の人たちが、大波のようにどつと押し寄せる。信じがたいまでの混みようとなる。

農事試験場は、今は県民文化会館、障がい者施設、国際交流センター、広いグラウンドや駐車場などに姿を変え、当時の面影は残っていない。当時は大きな広場をぐるっと囲むいくつもの研究棟、牛小屋、馬小屋、さらには広大な田畑、花卉園、独身寮、テニスコート、講堂、養鶏研究所、化学実験棟などを備えた緑の楽園であった。中でもテニスコートは、近くに住む子供たち（つまりぼく

たち)にとって、絶好の遊び場であった。

農業祭の三日間、広場とテニスコートは、満員電車のようなすし詰め状態になった。松山近郊ばかりか、県内各地から、農家の人たちが最新の農業技術や農機具の情報を得ようと集まって来る。農機具メーカーや販売店にとっては、一年のうちで最も大切な宣伝・商談・販売のチャンス、かき入れ時。それがこの三日間だった。

そして、ぼくらもまた、まるで熱病にうなされたように、熱気と興奮にあおられながら、無我夢中で会場を歩き回るのであった。

広場とテニスコートにはテントがずらっと並び、その一つ一つが農機具メーカーや販売店の宣伝用ブースになっていた。どこも押すな押すなの人ばかり。テントの中では、農機具の展示や実演が行われていた。

農機具が発するエンジン音と、排気ガスの鼻をつく独特の匂いが、ぼくらを興奮の渦に巻きこんでいく。実際、農業祭の思い出の大部分が嗅覚の記憶なのである。

今思えば健康に悪いことこの上ないが、農機具が発する排気ガスは、うっとり夢見心地にさせてくれる芳香そのものだった。学校から帰ると、ランドセルをおっぽり出して、矢も楯もたまらず試験場に駆けつけた。そして、夕方までに何度となく家と会場を往復したものだ。

なにが目的かと言うと、研究棟の展示物を見る。いやいや、そうじゃない。それも楽しみだったのはまちがいないが、主な目的はチラシを集めることだった。おびただしい数のブースを次々に巡っては、積み重ねているチラシをもらって(盗んで)いく。

一巡しないうちに早くも抱えきれないほどの枚数になる。するといったん家に帰ってチラシを置き、また出かける。これを最低でも二度は繰り返し。友達どうし、誰が一番たくさんチラシを集めたかを、互いに暗黙のうちに競い合っている。学校の帰りが遅くなったときなど、帰宅の道にあるうちに、すでに手に一杯のチラシを抱えて家に飛んで帰る友達を見かけることがある。

「あっ、ユウちゃんにやられた!」

そんなときの焦りは尋常ではない。

こうして集めたチラシをいったい何に使ったのだろうか。それが思い出せないのが不思議でならない。チラシの使い道など、そもそも考えてもいなかった。ひたすら熱病にうなされたようにチラシを集めた。集めること自体が目的であった。ドングリ拾いと同じこと。集めたあとの目的などありはしなかった。

子供らがチラシを取って行っても何も言わない(気づきもしない)ブースもあれば、「こらっ」と一喝するブースもあった。チラシを集めることには一種の冒険心が必要だったのである。ごった返している大人たちの隙間からチラシの山にそっと手を伸ばす。その瞬間の罪悪感とヒヤヒヤ感を子供らは楽しんでいた。

集めたチラシで紙飛行機くらいは折った気がする。飛ばしっこをしたようにも思う。しかし、折っても折ってもきりが



農業祭の賑わい

ないほどチラシはあるから、すぐに飽きてしまう。結局は、多さ比べをしたならば、あとは親がいつの間にかやら処分するのを待つだけとなる。

馬鹿げた遊びといえば、これくらい無意味で馬鹿げた遊びはなかっただろう。紙資源の浪費。今思えば、それ以外の何物でもない。だがその無意味からさえ、ぼくらはきつと何か成長の糧を得ていたはずだ。それがどういふ成長なのか、短絡的にこれと指し示すことはできないにしろ、子供らはあらゆる（無意味な）経験の積み重ねを通して成長するものなのだ。

農業祭と言えば、もう一つ思い出すのはサザンカだ。

やはり四年生のときだった。父が農業祭の最終日に小さな苗木を買ってきた。

「サザンカと杉じゃ」

父は言った。どちらも苗の高さは四、五十センチ。杉はまっすぐ幹を伸ばしていたが、サザンカは弓のようにたわんでいた。おそらく売れ残って隅っこに押しやられていたのを買ってきたのに違いない。それを喜んで買うところがいかにも父だ。

「冬になったら真っ赤な花が咲くぞ」

そう言われても、家には植える場所がなかった。裏庭は、とうの昔から屋根がかけられて仕事場になっている。玄関土間の他には庭というものが無い。その土間も、雨が降れば水に濡れるという庭ではない。

「どうするんです？ 鉢植えにして、玄関先に置いておきましょうか」

母も思案顔だった。

「まあまあそう言わずに、ちよつと見とけ」

父は二階に上がって仕事を始めた。

二階の北窓から張り出している屋根と、それと向き合っている仕事場のトタン屋根の支柱とを支えにして、その間に水平に何本かの丸太を差し渡し、板を乗せ、みごとなベランダを作り上げたのだった。空中庭園だった。家の北側だから、日差しの点では最高級といえないまでも、雨が降れば雨に濡れる待望の庭の出現であった。一坪あまりの広さがあった。

最初は杉とサザンカの鉢植えだけだったけど、次第次第に鉢は増えていった。色とりどりの草花を植えた。夏が近づくと、朝顔を植え、ヘチマを植え、キュウリやナスも植えた。空中庭園はたちまち足の踏み場もないほど、植物で埋まっていった。

世話係はぼくだった。あとから植えた野菜や草花が茂るにつれて、最初に植えたサザンカの影が薄くなってきた。だが、それに反比例して、サザンカへの愛着は深まっていった。毎日水をやり、成長を見守った。一年目に咲かなかった花が、二年目には咲いた。紡錘形にふくらんだつぼみから、ある日突然バツと花が開いた。父が言った通りの真っ赤な花びらだった。翌日、また一つ開いた。

父が作った小さな庭園。そこに限りない夢を乗せていたのだった。毎日何度も、重いバケツで二階に水を運ぶ。空中庭園の生き物に如雨露で水をかけてやる。それがぼくにはこの上ない楽しみになっていった。

加えて、セキセイインコの世話もあった。

生き物を育てる喜びが身体に自然にしみついていった。

ところが高一の夏、サザンカが突然枯れてしまった。

九月一日の日記に、下手な短歌と長歌もどきが残されている。

さざんかははや六年も咲きたれど今年は枝も葉も落ちにけり
 六年前、農業祭の最終日、父の買いきしさざんかと杉の苗木を鉢に植え、肥料もやって手入れをし、初めて咲いた花びらの、その喜びは今もお思い出深き十二月。これら二本をもといとし今では立派な花壇でき、ほっとひと息ついた間に、哀れさざんか枯れにけり。杉の苗木はすくすくと常盤木の名をほしいまま大きくなってさかえれど、小さく弱きさざんかはついにこの世を去りにけり、ああ。

■亥の子

農業祭の次の楽しみは亥の子だ。

亥の子は子供らにとって、わくわくするような年中行事の一つだった。近づく冬を予感させる、夜寒と闇の神秘の行事であった。家々から漏れるかすかな光が狭い通りをいつそう深い闇に落とし入れ、互いの顔さえ見分けがたい空間で、子供たちは石を搗くのがあった。

十一月の亥の日がその日だった。「一の亥の子」、「二の亥の子」などと呼ばれ、年によっては「三の亥の子」まであった。

後に知ったが、亥の子は旧暦十月の行事とのこと。新暦の十一月にびったり重なっていたわけではなかったかもしれない。だが、ぼくの記憶の中では、亥の子はあくまで十一月だ。

亥の子の夜はなぜかいつも冷え込んだ。

日がとっぷりと暮れ、星が冴え冴えと瞬き始める頃、子供たちが、闇から湧き出すように集まってくる。集まる家は決まっている。大人たちが「地主さん」と呼んでいた家だ。路地を隔てた我が家の隣。かつては一帯の大地主だったそうで、母から次のような話を聞いたことがある。

「このあたりの土地は昔は全部地主さんのものでね、たいそうなお金持ちだったらしいのよ。だけど、今は隣の家と、もう一軒、上一万に屋敷があるだけになってしまったそうだけど」

「昔」がいつのことか、「今」がいつからのことか、ぼくにはさっぱり見当がつかなかった。言われてみるとたしかに、隣の家と同じ姓の家が、学校の行き帰りに通る上一万交差点の近くにあった。その家は、職人と商売人の町にふさわしからぬ立派な構えの門と広々とした庭をもち、なんだか威圧的な雰囲気さえ漂わせていた。おそらく隣の家の分家だったのだろう。

隣の家は、それとは雰囲気がるで違った。威圧感などどこにもなかった。おばあさんが格子窓のそばに座っていて、ぼくらによく声をかけてくれた。外で追いかけてこなどをしていると、

「ちよっとおいで」

と窓から手招きしてくれた。玄関土間に入ると、上がり座敷から、みんなにアメをくれたりしたものである。

「オシロイバナがきれいだろう。鼻を近づけてごらん、いい匂いがするよ」

「カンナの花が真っ赤に燃えてるね」

などと、格子の前の小庭を指さしながら、花の名前を教えてくださいました。

おばあさんが教えてくれたオシロイバナのほんのりとした香りと、カンナの燃えるような朱色が、よほど鮮烈に印象づけられたようで、今でもオシロイバナやカンナの花を見るたびに、あの日のあのオシロイバナとカンナの花が、一瞬必ず頭をよぎるのである。

亥の子の宵は寒い。子供たちはセーターを着込み、身を縮ませながら集まってくる。おばあさん

がアメをくれる土間だ。笠をかぶった裸電球が天井から垂れ、大工の棟梁が上がり框にどっしり腰をすえている。地主の奥さんは土間の奥から様子を窺っている。ぼくらはワーワーキヤーキヤー騒ぎながら土間を走り回る。

頃合いを見て棟梁が、「じゃあ行くぞ」と立ち上がる。みんながぞろぞろ出ていくと、地主の奥さんが玄関口まで出てきてそれを見送り、棟梁がそつと頭を下げる。

子供たちは外の寒さに身を震わせながら、われ先にと亥の子石にとりついていく。石は子供自転車のタイヤほどの大きさだ。周囲に鎖を巻きつける溝があり、ぐるっと巻きつけたその鎖から、放射状に何本もの縄がタコの足のよう伸びている。それを子供たちがめいめい握り、家の門々で亥の子の歌を歌いながらトントンと搗くのだ。

亥の子石に取りつくのは大きい子。小さい子や女の子にはワラで作った叩き棒が与えられ、それで地面をバシバシ叩く。町内の家々を回っているうちに、体は内からほてってくる。湯気がセーターの首元から噴き上がる。

家の前で子供たちが亥の子を搗き終わると、どの家でも菓子類を用意していて、紙袋に入ったそれを渡してくれた。集まった菓子は、最後に地主さんの家で均等に分けられ、子供たちに配られるのだった。

普段は大声で歌ったりすることのないぼくだったが、亥の子のときだけは、まるで催眠にかかったように、みんなと口を合わせて夢中になって亥の子の歌を歌ったものだ。

その亥の子の歌だが、『ラフカディオ・ハーンの耳』（西成彦）を読んだとき、あつと驚いてしまった。

ハーンが日本（松江）に来て間もない頃、大黒舞を見たという。歌と舞は一時間以上も続く長いもの。庶民も上流階級も等しくそれを見て楽しんだ。

口承芸能だから文字化されておらず、ハーンは何とかしてそれを書き取って、英訳したいと熱望した。しかし、ハーンの日本語力ではとても聞き取ることができず、人に頼んでテキスト化した。だが、その英訳は大変な労力の末に、結局は不成功に終わった。

『ラフカディオ・ハーンの耳』の付録に、正月に門付けして回るのが大黒舞だとあって、その歌詞（一時間もかかる長いものというから、たぶんその一部）が載っている。驚いたことに、それがまさしくぼくらの亥の子の歌とそっくりなのだ。

大黒舞は正月の縁起もの。亥の子は農作業が一段落したあとの子供たちの行事。出自は違うが、歌がびったり重なっているのは、日本人の庶民生活の中に何らかの共通の根っ子があるからにちがいない。

大黒舞の歌は次の通り。

御座った御座った福の神を先に立て、大黒殿の能には、

一に俵ふまへて、

二ににっこり笑って、

三に酒を造って、

四つ世の中ようして、

五ついつもの如くに、

六つ無病息災に、

七つ何事なうして、
 八つ屋敷をひろめて、
 九つ小蔵をぶっ立て、
 十でどうど納まった。大黒舞を見さいな。

中国地方の方言が混じった歌詞である。表現の細部は地方によってちがっているものと思う。ぼくらが子供のころ歌っていた歌を記憶のままに書き下すと、次のようになる。

亥の子、亥の子、亥の子もちついて
 祝わん者はおえべっさんに言うてやろ
 それ、一で俵をふうまえて
 二でにつこりわろて
 三でさかずき飲み干して
 四つ世の中よいように
 五ついつものごとくなり
 六つ無病息災に
 七つ何事なうように
 八つ屋敷を建て広げ
 九つ小蔵を建て並べ
 十でどうどおさめた

この家繁盛せい、この家繁盛せい

これは子供から子供へと代々受け継がれた口承芸能だった。文字で書かれたものを見せられた覚えはない。年上の子らが歌っているのを聞き覚え、歌い覚えたのだった。子供のころ歌った歌は、一度覚えると決して忘れないのも不思議なことだ。

数え歌の部分がみごとなまでに大黒舞と一致している。もう一つの一致点は「福の神」と「おえべっさん（恵比寿）」だ。恵比寿は商売繁盛の神、つまり福の神として遠い昔から庶民に崇められていたというから、両者は同じもの。それがこの歌の、つまりこの行事の根本にあるわけだ。

昭和の子供たちは、こうして遊びを通して過去の文化を伝承し、未来への橋渡しの役を担っていた。今の子供たちにも、はたしてこれは伝わっているものであろうか。

■早朝マラソン

亥の子が終わると、やがて師走となり、冬休みがやって来る。冬休みには、決まって早朝マラソンをした。夏休みのラジオ体操同様に、朝の六時すぎ、早く起き出した子から順々に家の前の通りに集まってくる。真冬のその時期、六時はまだ暗い。きーんと空気が凍りついている。

この早朝マラソンはぼくら遊び仲間恒例行事、決まりごとだった。小学校の六年間、一日として休んだことはなかったように思う。

だが、今思うに、「冬休みには地域ごとに早朝マラソンをするように」と学校から指導された覚えはない。他の町の子供たちが同様の早朝マラソンをしている姿を見かけたこともない。どうやらこれはぼくらの町筋だけの恒例行事、伝承行事であつたらしい。

これが、ぼくらの世代から始まったものでないのも明らかだ。年上の子らがやっていたのに誘わ

れて参加し、そのうち彼らが「子供」を卒業して抜けていくと、今度はぼくらが伝統の中核となって、年下の子らを引っばったのだ。

なかなか起きてこない子がいれば呼びに行く。ぼくが先に起き出して、近くの子の家に「○○ちゃん」と呼び起こしに行くこともあれば、まだ眠っているところを「キーヨシちゃん」と起こされることもあった。

みんながそろろうのを待っている間、早く起き出した子らは、しびれる寒気の中で追いかけてくる。雨のあとだと、道にできた水たまりが凍っている。それを足で何度も踏んでひび割れを作り、かけらをはぎ取っては、互いの顔に押しつけ合ったりした。

ぼくらにとっては寒気も氷も、あるものすべてが遊び道具だった。

みんなそろろうと、いよいよ出発だ。家の前道を抜け、電車通りに出ると、さらに東に向かう。

農事試験場の正門をすぎ、南町の電停をすぎ、線路に沿って左に緩やかにカーブすると、道後公園入り口の門が見えてくる。

道後公園は、古き日の湯築城外堀に囲まれたまん丸な公園だ。

ぼくらは外堀を渡り公園に入る。公園の一番奥に新湯しんゆと呼ばれる温泉があった。その正面に栗饅頭の形（と信じていたが、実は湯気の形だった）をした石のモニュメントがあって、それがゴールだった。栗のとがった頭に真っ先に飛びついた者が一着だ。

今は、新湯も、湯気のモニュメントも煙のように消えてしまって、跡形もない。遠く切ない夢物語だ。時代はこうして移ろっていく。

帰りはもう走らない。電車通りも通らない。農事試験場を真っ二つに貫いて流れる小川に沿って、ワイワイガヤガヤ話しながら帰る。これもまた楽しみだった。

帰りには草舟流しをよくやった。めいめいが草を引き抜いて草舟を作り、それを小川に流して早さを競う。草舟が淀みや滝つぼにつかまったり、小さな橋の下でつかえたりすると、小石を投げて助けてやる。人と舟とは帰り着くまで一心同体の間柄なのだった。

そうこうするうち、背後の東の空が明るんでくる。空が朱色にパツと赤らむ瞬間が、いつも神秘だった。後ろを振り返り、じっとその変化に見入ったものだ。やがて大地が朝の光に満たされていく。

途方もないいたずらを思いつく者もいた。ミツアキだ。中一生だが、ぼくら四年生や五年生といまだに一緒に遊んでいるガキ大将だった。

ミツアキのすることは、いたずらというより、犯罪に思えてしかたなかった。たとえば、牛乳屋が配達していったばかりの玄関先の牛乳を飲んでしまうのだ。牛乳を取りに出てきた家の奥さんの泣きそうな顔を想像すると、ぼくまで悲しくなった。



我が家の二階から南西方向を見る。前の家並み（今はない）との間の狭い裏道を左に進むと、電車通りに鋭角にぶつかり、それをさらに進むと道後公園だ。

あるいは、呼び鈴を鳴らしておいて、家の人が出てくる前に走って逃げる。これはまだかわいいたずらだ。鳴らした本人が真っ先に走るものだから、他の者はあらぬ嫌疑をかけられないよう、一緒になって走るしかない。今にも首根っこを押さえられそうな恐怖を覚えながら、首をすくめて必死に逃げた。

ぼくら遊び仲間の大将はあくまで五年生のトシちゃんだったが、ミツアキはその兄であって、いわば隠居後の家康のような大御所だった。やんちゃな大御所。ときおり遊びに加わっては、眉をひそめるいたずらをぼくらに教えるやんちゃ者だった。

彼はどんな遊びでも、決してルールに従わない。必ずこそつとインチキをする。それがバレるとさっさとやめて帰ってしまう。こうした気の短さと荒々しさは、トシちゃんの繊細かつ神経質なまでの粘り強さとは真反対だった。

だけど不思議なことに、みんなミツアキを慕ってもいた。よくはわからないけど、ミツアキの中にある弱さのようなもの、哀しみのようなもの、寂しさのようなものに、引きつけられるのだ。虚勢を張っていないと生きていけないミツアキの悲しさが、ぼくにはわかる気がした。

農事試験場を抜け、我らが町筋に帰り着くころには、あたりはすっかり明るくなって、町は朝のざわめきに包まれている。またあとで遊ぼうと約束し、めいめい家に散っていく。こうしてぼくらの冬休みの一日は始まるのであった。

■紙芝居のおじさん

テレビのない時代、エンターテインメントは、ラジオか映画か紙芝居くらいのもの。中でも楽しみだったのは、目の前で演じられる紙芝居だった。

路上紙芝居は、ぼくらが小学生のころ、全国いたるところで全盛を極めていた。道路には子供があふれ、しかも彼らに娯楽が少なかったその当時、路上紙芝居は、戦地帰りの男たちにとって、仕事の絶好の受け皿になっていたのだ。

道路で遊んでいると、どこからか

「ピッピッピ、ピッピッピ」

「ドンドンドン、ドンドンドン」

と、笛や太鼓の音が響いてくる。これが

「紙芝居が来たよー」

という、子供らへの合図なのであった。

おじさんは自転車で町内をぐるぐる回って、子供たちを呼び集める。

「ピッピッピ」、「ドンドンドン」を聞くと、ぼくらはハーメルンの笛吹きのように、思わず知らず、遊びをやめていつもの場所に吸い寄せられる。いつもの場所とは、我が家の前の道が、明治の鉄道の廢線跡と交差する地点。そこはもちろん道路なのだが、ぼくらの感覚では広場だった。電車で通りから一筋奥まったそこを車が通ることなど考えられもせず、広場はエンターテインメント会場でもあったのである。

おじさんが町を二巡りほどして自転車を止めるころには、子供らはすでにワイワイガヤガヤ興奮の面持ちで集まっている。手には硬貨をしっかりと握りしめ……。その硬貨、

「紙芝居が来たよー」

と家に駆け込んで親からもらってくる子もいれば、月々の小遣いを前渡しでもらっていて、ポケットにいつも硬貨が何枚か入っている子もいた。四年生から、ぼくも後者であった。

「その都度小遣いをもらうのは面倒でしょうから、これからは毎月三百円ずつ先に渡しておいてあげるね。もう四年生なんだから、これくらいの管理は自分でできるでしょう。全部ジャラジャラ持ち歩くんじゃないのよ。この貯金箱に入れておいて、いる分だけ取り出すようにしたらいいからね。使わずぎんように、よく考えて使うんよ。余ったら次の月に回して、増やしていったらいいんだから、使い切らんでもいいんよ」

こう言って、母が赤い郵便ポストの形の貯金箱と、十円玉を三十枚渡してくれた。なんだか突然大人になったような、晴れがましさと誇らしさを感じたものだ。使い方をまかされたことが嬉しかった。

使うのはいよいよ近所の駄菓子屋か、学校の行き帰りの道にある文房具屋であり、月に一、二度やってくる紙芝居は特別支出だった。

紙芝居を始める前に、おじさんは見物代として、水アメを売る。水アメは自転車の荷台に取りつけてある紙芝居セットの引き出しに入っていた。引き出しはいくつもあって、水アメやら、型抜きアメやら、割り箸やら、もちろん売り上げの小銭も入っていた。

型抜きアメは、厚紙ほどの厚みの四角いアメで、表面にイヌやウサギやゾウなどの形をした細かい切り込みが入っている。周囲から用心深く割っていくと、切り込みに沿って動物を切り抜くことができる。これがなかなか難しく、たいていは途中でパリッと割れてしまう。上手に切り抜くと、もう一個型抜きアメがもらえるのだった。

型抜きアメはいつも見に来てくれる子へのサービス品だった気もする。メインは水アメだった。握りしめてきた五円玉と引き替えに、二本の割り箸の先にくっつけた水アメをもらう。二本あるのはこねるためである。もらった水アメをそのまま口に入れたりはいしない。

二本の箸を使ってこねていく。すると、茶色だった水アメがどんどん白くなる。しかも、最初は粘っこくてこねるのに力が要ったのに、白くなるにつれて、さらさらと軽い感じになってくる。これはもちろん錬金術でも何でもない。こねるにつれて水アメの中に空気が入りこんで白くなり、しかもそれによって水アメ分子間の結合が弱くなって粘性が減っていく。それだけのことだ。

さらさらと流動的になると、注意していないと地面にたれ落ちる。その寸前、おもむろに口に入れてなめるのが、子供たちの水アメなめの流儀であった。

茶色いアメと白いアメのどちらがおいしいのか、そもそもどうして白くしないといけないのか、誰も知りはいなかった。でも、ぼくには、白いアメの光沢は絶対的に高貴で神聖なものだった。その神聖を経ないで水アメをなめ始めるなんて、水アメの神様への冒瀆であって許されない。本気でそう信じこんでいた。

この水アメこね、子供らが自然に思いついたものでないのは明らかだ。紙芝居のおじさんが、最初にぼくらに教えた秘技だった。

秘技の裏側には、いきなりなめてしまえばあつという間になくなってしまいう水アメを、いかに長時間、子供らの集中力を切らさない遊具として活用するかという、おじさんなりに練りに練った策略があった。

紙芝居が始まるころにはもう水アメがない、ではいけないのだ。紙芝居に熱中させるには、演じ

ている間、水アメをなめさせておくのが一番だ。そのために、なめる前の手続きを時間のかかる秘儀として神聖化した。これによって、おじさんがみんなに水アメを売っている間、子供らはひたすら水アメをこねる作業に没頭したのである。

意地が悪いと言えば、たしかに意地が悪いが、悪意のない意地悪であって、文字通りの子供だましだった。

その子供だましにぼくらはまんまと引っかかり、魔術師か仙人になったような気分で、水アメこねの秘技に陶醉したのだった。

紙芝居は、二本立てだった。一本目は軽いコミカルなものや、昔話的なもの。おじさんのとりどりの声色、語り口が楽しかった。

メインは二本目だ。これは正義のヒーロー対悪漢という、スリルとサスペンスに富んだ対決もの。戦いの中で、ヒーローは必ず一度は悪漢をやっつける。よし、これで悪者は死んだぞ、ああよかったと、ぼくらはほっとするが、なんと悪漢は、どこからともなく、ふたたび力を取りもどしてよみがえってくる。

毎回、お決まりのパターンである。しかしぼくらはそのお決まり性に気づいていない。その都度、何度でも、ほっとゆるんだ心が激しい緊張に突き落とされる。

こうしたハラハラドキドキの連続の末に、最後には決まって正義のヒーローが、

「あつ、あぶない」

と思わず目をおおいたくなる危機一髪の場面に立たされる。まさしく

「黄金バットの運命やいかに」

なのである。そこで

「続きは次回」

となる仕掛け。これも毎回変わらぬお決まりのパターンだった。

紙芝居の魅力は、決まり切った構成ではあっても、子供たちの心をわしづかみにして放さないストーリーの激しい展開と、もう一つは、おじさんの語りのうまさにあった。おじさんの語りの力によって、ぐいぐいと夢の世界に引きこまれていく。

あつ、あぶないとハッとさせられたまま、いきなり先のない空虚な空間に放り出されたぼくたちは、

「あのまま殺されるぞ」

「いや〇〇が助けに来てくれる」

「そうじゃろうか。〇〇はまだ気がついてないぞ」

「そんなことない。絶対に来てくれる」

こんなことを言い合いながら、みんな我がことのように心臓をどきどきさせる。おじさんはそれを聞きながら、ニコニコ顔で紙芝居を片づけている。片づけが終わると、

「今日はありがとう。また来るからな。みんな元気だな」

「うん、バイバイ」

こうしておじさんは自転車にまたがり、去って行く。おじさんの姿が見えなくなると、不思議なもので、ぼくらは紙芝居のことなどけろっと忘れて、元の遊びの世界に戻っていくのだった。

紙芝居は一瞬の夢、幻の花火にすぎなかった。夢から醒めれば、玉手箱のようにパツと煙が上が

って、あるのはただ元の世界だけ。その一瞬の夢と幻を、ぼくらは五円玉一個で、水アメとともに手にするのであった。

■袋小路は袋小路ならず

我が家は東西に並んだ二軒長屋の東側だった。この長屋の北側に、南北に並んだ二軒長屋が二棟くっついていて、つまり、三棟の二軒長屋が互いに背中合わせでくっついていてのが、我が居住空間であった。長屋と長屋は、裏庭という緩衝スペースをはさんで互いが背中合わせになっていた。

こうしてできた長方形の居住区は、南側を一般道路（我が家の前の道）に接し、残る三方は二メートル幅ほどの路地でとり囲まれていた。東と西の二本の路地は北の路地で手をつないでいた。

いや、元来は北で手をつなぐ構造になっていたというのが正しい表現だ。現実には、北の路地はつながっておらず、そこを行き来する人もいなかった。誰の目にも、東の路地と西の路地はどちらも袋小路だった。そののみか、東の路地と西の路地は、大げさに言えば世界と文化を異にしていた。

なぜそうなったのか。理由は明らかだった。誰の手によるのかは知らないが、北の路地の中央に板塀で仕切りが作られていた。その上、板塀の西にはトタン屋根の物置小屋まで作られていた。

つまり、物置小屋と板塀によって北の路地はせき止められていたのだ。交流がなくなると、空気までが別物になった。子供の目にも、東西二つの路地の違いは明白だった。

東の路地は、ぼくら男の子の遊び場だ。土は明るい薄茶色。しかも路地の半分ほどが地主さんの裏庭に接しているため、横は白壁で、日当たりがよく明るかった。

ところが、西の路地の土は黒褐色。両側に民家が迫っているため、日当たりが悪く、どこか陰気で薄暗かった。女の子たちは薄暗いのを気にすることもなく、そこを遊び場に使っていたが、男の子を引きつける空間にはなりえなかった。

三、四年生のころから、ぼくらの遊び空間は外へ外へと広がり始めた。クチクという一種の戦争ごっこをするときなどは、町の一区画全体が戦場になることさえあった。そんなとき、大人が設定した仕切り板や塀などは、ぼくらにとって、あつてなきがごときものだった。

板塀も、トタン屋根の小屋も、それらは横断禁止の関所というより、乗り越え衝動の対象物でしかありえなかった。塀によじ上ったり、トタン屋根の上を歩いたり、ときには民家のブロック塀を乗り越えて庭を突っ切って進むことさえ、ぼくらにとっては合法行為だった。堰き止められている北の路地など、ぼくらの目には筒抜けだったわけである。

北側の路地がふさがれていたことにより、東と西の路地は大人にとっては袋小路だった。だが実を言うと、東の路地の突き当たりには、まっすぐ裏通りまで達する細い隙間がいていた。大人の目には、物理的にも心理的にも、それが通路とは考えられもしない細い隙間にすぎなかったが、ぼくらにとっては、裏通りに通じるれっきとしたバイパスだった。東側の路地を袋小路と感じる子供はいなかった。

あるとき、土地の所有者が隙間の入り口を板塀でふさいでしまった。子供らが勝手に行き来するのを禁止しようというわけだ。大人の常識では、板塀は完全なシャットアウトを意味していた。土地の所有者も堅くそう信じていた。ところがそれは、シャットアウトどころか、遊び心に火をつけただけだった。板塀は絶好のよじ登りの場、ロッククライミングの場と化したのである。

たしかに、ある日突然出現した板塀に、ぼくらは一瞬たじろいだ。だが次の瞬間、たじろぎは勇猛果敢な挑戦心へと変貌した。一点の疑念も罪悪感もなく、板塀をよじ登ったのである。そして反対側に降り立った。しかも、それで終わらず、路地の南の入り口から一筋北の裏通りまで、板塀を越えて走る障害物競走が、ぼくらの遊びメニューに加わった。

単なるバイパスにすぎなかった細い隙間が、こうして遊びの主戦場と化したのだ。土地の有者は頭こぶを垂れて、再びこっそり板塀を撤去するよりほかなかった。仮に「通行禁止」とか「登るな」などと板塀に張り紙をしたところで、子供らには何の効き目もないことは明らかだった。

そもそも壁（塀）は通行禁止の標識にすぎない。単なる約束事だ。それが通行を物理的に不可能にする保証はどこにもない。工夫と力を尽くすなら、たいていの場合、乗り越えることも、隙間をくぐり抜けることも可能だろう。国境のフェンスや壁なども、所詮はその手のものだ。それはそこが国境線であることを示す標識、あるいは宣言にすぎず、それを完璧な物理的防御壁になっていると信じる為政者がいたとしたら、彼はよほどの脳天気者にちがいない。

大人の約束に縛られない子供たちにとって、壁や塀は、チャレンジ精神を燃え立たせる対象でこそあれ、黙って引き下がる障害物ではないのだった。

大人と子供では、同一物を目の前にしても、見ているパターンが違うのである。

物を認識するとは、レベルの違いによって本来的には無数の見え方を内包しているはずの自由空間において、特定の見方を強制することだろう。認識は物の見方に縛りをかける。その縛りを何度も繰り返すことによって、人間は子供から大人へと成長していくことになる。その見方とは、実は大人から子供に教え込まれ、強制されたもの、つまり、社会的約束への順応である。その順応を、われわれは成長という言葉で表現する。

見えるがままの見え方に疑念なく従う子供たちと、約束事によって見え方の多様性をただ一通りに収斂させてしまっている大人たちとは、同じものを前にしても、感じとる認識のパターンはまるで違うのである。

「赤信号では止まれ」というのも、教え込まれた約束ごとにすぎない。絶対的な通行不可能性は、そもそも赤信号にはないのだから。しかし、それによって安全が守られるのなら、あえて約束を破って、身を危険にさらす必要はない。そのことを、論理によろすが、体験によろすが、とにかく学んでいくのが成長なのである。

塀を乗り越え、他人の庭を駆け回った子供時代の楽しい思い出は、自由と多様性があるがままに謳歌した、ぼくの懐かしい原風景という気がしてならない。磁力線に沿って整列させられる前の、乱雑にばらまかれた原初の砂鉄の時代と言ってもよからう。

■一枚の写真から

小学生時代のぼくの日常性を最も鋭く映し出した写真がある。写真の裏には「昭和三十四年一月」と記されているから、五年生の冬だ。ああそう言えばと、撮られたときの記憶がよみがえってくる。

撮ってくれたのはブリキ屋の職人だった。

われわれ子供仲間がチャンバラごっこに熱中していて、まるで新撰組にでもなった気分で見回っている。その一瞬の光景なのだが、前のぼくも後ろのガキ大将も、カメラ目線になっている。実際、撮られているその瞬間を今もはっきり覚えているから不思議である。

竹棒を持って歩いているのは二人だが、前方にはまだ何人もの行列がある。目の前を通りすぎていくわれわれを、職人は次から次とカメラにおさめてくれたのだった。給金を貯めてようやく買ったカメラだった。撮りたくてうずうずしていた。通りがかかったわれわれは絶好の被写体になった。パシャリパシャリとシャッターを切った。巧まらずして昭和の下町がリアルに切り取られたのである。

場所はぼくの家のまん前だ。正面に写っている店は、ぼくの家と一続きになった二軒長屋の西半分。その右側（東側）にぼくの家があるが、写真にはぎりぎり写っていない。配達用の自転車の前輪がかるうじて写っているだけ。

ぼくの家は真向かい、ちょうどカメラが位置しているところがブリキ屋である。職人はブリキ屋の裏口からぼくらを撮っている。表口は反対側の電車通りに面している。

ブリキ屋があつた家並みと、ここに写っている道路とは、今はもうない。後の大規模区画整理によって、この一筋の家並みは、上一万交差点にいたるまですべて取り払われた。ぼくの家がある家並みが電車通りに剥き出しになった。さらには、ぼくの家を含んだ、二軒長屋三棟が背中合わせに貼りついていた長方形の一角は、すべて取り壊されて今は駐車場になっている。これを囲んでいた東と西と北の路地は当然ながら駐車場に取り込まれて、消えてしまった。ぼくらが夢中で遊んだ路地はもうないのだ。

写真の奥に映っている板塀の家は取り壊されて今はマンションになっている。

こうして、当時の面影は、探そうにも、もうどこにもない。その意味からも、この写真は昭和をとどめる貴重なものだ。ぼくにとっては泣きたいくらい懐かしいものだ。

竹の棒を横に向けてすまし顔でいるのがぼくである。その後ろで竹棒をあごに当てているのは、ぼくらのグループの総大将だ。このとき中学二年生だが、いまだに子供グループから抜け出せないでいた。

男の子のグループには、ニホンザルの群れと同じく、必ず総大将がいて、その総大将を中心に若者頭的な者が何人かできる。総大将は、ある年齢になると自然に子供仲間から離れていき、若者頭のうちから後を継ぐ大将が生まれてくる。こうして、グループの伝統と文化（遊び文化）が引き継がれ、世代交代されていく。

勉強に早く目覚めた子ほど、子供の遊びから早く足を洗っていく。遊びに加わる頻度が減っていく。必然、そのような子が遊びの大将になることはない。

ぼくにとっても、この五年生の冬は、遊びに熱中した最後の時期であつたように思う。六年生になると、遊びのグループからは自然に足が遠のいた。

正面の店、日覆いに「食料品店」と書かれている。八百屋である。土間に野菜や果物が並べられ、それに加えて、漬け物、みそ、塩、砂糖、醤油、マヨネーズ、小麦粉、缶詰、その他もろもろの食料品や調味料が並んでいた。雑貨屋も兼ねていて、下駄や草履、タワシ、それとちよつとした文房



具類なども売られていた。ぼくの家で作った油揚げももちろん売られていた。

油揚げが切れると、客を店に待たせておいて奥さんが我が家を買いに来た。一枚三円で買っていき、持って帰るとすぐさまそれを五円で売る。子供ながらに

「なんかおかしい」

と、割り切れない気持ちになったものである。

「わざわざ隣の八百屋に買に行かなくても、ぼくの家に来ればええのに」

そうお客に言ってあげたい気分だった。我が家では小売りはしないことになっていたが、ときおり

「一枚ください」

と買いに来るお客もあった。

「一枚ずつ買いに来るお客に卸値というわけにはいかんでしょねえ。小売値で売らんといかんのかねえ。どうしますかねえ」

母が父に相談しているのを聞いた覚えがある。

この通りをまっすぐ西に進むと、二百メートルばかりで上一万交差点にぶつかる。その間に、この種の八百屋がこの店の他にまだ二軒あった。二軒はこの店よりもはるかに繁盛していて、大規模だった。当時は八百屋の全盛期だったのである。

自転車有二台写っている。右が我が家の配達用自転車。左が八百屋の自転車である。当時、仕事はすべて自転車だった。自動車を持つ家などどこにもなかった。我が家では、男勝りのおばさんが自転車で何度も往復しながら油揚げを配達していた。

中学二年になったころから、ぼくも配達を手伝うようになった。朝、油揚げを新聞紙でくるんでカバンと一緒に自転車にくくりつけ、通学路にある店に届けるのだ。帰宅すると今度は、いなり寿司屋に配達した。いなり寿司屋は毎日ではない。配達のおばさんが帰ったあとで追加の注文が入ったときだけが、ぼくの出番となった。

朝はせいぜい十枚ほどだから大したことはないが、夕方は、油揚げがぎっしり詰まったパン箱のような箱を荷台にくくりつけ、重くてふらふらするのを制御しながら自転車を漕ぐのだった。

配達は正直言って、苦痛ではなかった。苦痛どころか、自転車をこぐのは爽快だった。ただ、届けた帰り際に

「どうもありがとうございます」

と店に声を掛けて出てくる、それがうまく言えないのが困りものだった。配達を始めた最初の日、母から

「どうもありがとうございますは言うて出てくるのよ」

と言われたものだから、それがトラウマのように頭の隅に引っかかってしまい、意識しすぎて舌がもつれるのだった。今日はいまうまう言えるかな、そう思い始めるとよけいにつっかえる。

今考えれば、「どうも」と「ありがとうございます」の間に一瞬の間を置けばよかった。それを一息に言い切ろうとするものだから、つっかえてしまう。

まあ、すらっと言えようがつかえようが、店の主人にはどうだってよいことだ。だがぼくにあっては、人生の明暗を分けるほどの重大事に思えたのだった。

店の向こうでキャッチボールをしている青年は大工の長男である。われらが総大将の兄である。

昼間は大工として働き、夜は夜間高校に通っていた。路地の幅は二メートルほど。これと同じ路地がぼくの家の東側にもあった。もっぱらぼくら男の子は東側の路地で遊び、女の子は西側の路地で遊んでいた。いつからそうなったのかは知らないが、物心ついたときにはそうになっていた。西側でキャッチボールをしているこの写真はちよつと意外だ。

道路は舗装されているらしく見える。この写真の直前に舗装された気がする。ぼくの小学生時代のほぼすべてにわたってこの道は穴ぼこだらけの砂利道だった。雨が降ると水たまりができ、その水たまりもぼくらには楽しい遊び場になったものだ。小さな木ぎれの舟を浮かべたり、はだしでじやぶじやぶ歩いたり……。

そうそう、小さな女の子が立っているそばの板塀。その根元の隙間から草が生え出している。あの雑草もぼくらの大切な遊び道具だった。板塀の下にしゃがみ込んで、草相撲をとった。草の茎と茎とを絡ませて引っ張り合い、先に切れた方が負けになる。どの草と戦っても勝つ強い草を横綱と呼んだ。

ぼくにとっては何もかもが懐かしい。昭和の下町の、とある一瞬の光景である。

■パッチン(メンコ)

関東では「メンコ(面子)」と呼ばれているが、ぼくらはそれを「パッチン」と呼んでいた。子供の手のひらよりもやや小さい、長方形の紙である。紙質は粗悪品から良質のものまでいろいろあった。薄いのもあれば分厚いものもある。

どれにもカラフルな絵が描かれていた。戦後すぐのものには、占領軍の影響だろうか、ディズニーマンのキャラクターや西部劇のスター、大リーグの選手などが描かれていた。紙は、粘りのある上質のものが使われていた。

ぼくらの世代がパッチンで遊ぶようになったころには、そうした上質の紙にアメリカ風の絵が描かれたものはすでに希少品であった。ぼくは兄から譲られたものを何枚か持っていたが、ときどき取り出しては眺めるだけで、すぐまた引き出しにしまったものだ。もったいなくて、使う気にはなれなかった。

ぼくらが使うパッチンには、紙に粘りがなかった。いかにも粗悪で安っぽいものだった。その安っぽさを糊塗するように、描かれている絵は概して派手で、映画俳優のブロマイド風のものとか、鉄腕アトムや怪人二十面相といった漫画のキャラクターなど。

面子の歴史は意外と古い。江戸時代にまでさかのぼるといえる。最初は粘土を焼いて作ったものだった。人の顔などをかたどったことから、「面子」と呼ばれたらしい。明治になると、それが薄い鉛の板になり、明治末頃からは紙で作られるようになった。紙の前に鉛の板の時代があったというのがちよつと意外だが、たいていひっくり返すという面子遊びに耐えられる紙は、おそらく明治末になるまで作れなかったのだろう。

ぼくらの間にパッチンが大流行したのは五年生のときだった。パッチンは駄菓子屋で売られていた。ぼくがパッチンを買ったのは一度きり。

ぼくの家から数軒西に、新しい駄菓子屋ができた。元はバラックの掘っ立て小屋(卑弥呼の館)があったところだ。そこに小ぎれいな二階家が建った。ぼくにとっては、基礎固めから家ができあがるまで、一部始終を間近に見た最初の体験となった。

新しい家には老夫婦が住み始めた。定年退職し、退職金で待望のマイホームを建てた。その喜びが、哀れなくらいあらわに見てとれる夫婦だった。雇われることを習性にしてきたサラリーマンの特性で、いかにも世馴れず、自活能力の低さが際立っていた。職人と商売人がほとんどを占めるこの町では、明らかに異質で浮き上がった存在となった。

夫婦は玄関土間で駄菓子屋を開いた。ガラス窓も、土間のコンクリートも、駄菓子類を並べる木の台までもが真新しくてびかびかしていた。

駄菓子屋は、道路をはさんだすぐ西隣にもあった。古くからの駄菓子屋と新しい駄菓子屋が二軒並んで競い合うことになったのである。古い駄菓子屋は粗末なバラック小屋で、薄汚れた二畳か三畳ほどの狭い店(玄関土間)と、三畳の居間、それと奥の台所、それが家のすべてだった。おばあさんが一人で店番をしながら暮らしていた。

駄菓子の子が切れると、店にたむろしている顔なじみの子供に頼んで問屋に電話してもらう。ぼくも何度か頼まれた。電話代を預かって、上一万交差点の公衆電話まで走って行く。公衆電話といっても、自動交換ではない。交換手に電話番号を告げてつないでもらう手動交換の電話であった。用を終えて帰ってくると、店の駄菓子のうちから好きなのを一つもらえるのだった。

対して、新しい店はぴかぴか光ってはいるが、ぼくにはなじめなかった。それでも目新しさに誘われて、友人たちと入ってみた。

まっ先に目についたのがパッチンだった。色とりどりのパッチンが陳列台に並んでいた。ぼくは一番安いのを選んで買った。切手のシートのように、一枚の紙に十枚ほどのパッチンがまとめて印刷されていた。それをはさみで切り離して使うのである。

紙質は、兄にもらったミッキーマウスやベブルースのものは大違いだった。薄っぺらで、しかも一定の方向に反り返る癖があった。絵もやたら赤くてげげげしい。よい絵とはお世辞にも言えなかった。それでも、自分で買った初めてのパッチンだ。はさみで切って十枚重ねると、パッチンを持った気分にはなれたのだった。

それがパッチンを買った最初であった。そして最後ともなった。それ以降、パッチンを買うことはもうなかった。買う必要がなかったのである。最初に買ったパッチンを元手に、どんどん勝ち続け、山のようにパッチンを溜めこんだのだから。パッチンの技術に関しては、なぜかぼくには天性の才能があったようだ。

ぼくらのパッチンは、いわゆるメンコ遊びと呼ばれている普通の遊びのルールではなかった。相手のパッチンをひっくり返すルールではないのである。それだと手間暇かけて勝ったとしても、相手から一枚ずつしかもらえない。

最初はそのような遊びをしていた記憶もたしかにあるが、年上の子からの伝承で、すぐに別方向へと遊びが変わった。

当時の家の前にも必ずあったミカン箱のようなゴミ箱を横に倒し、その上にたとえばパッチンを一人十枚ずつ載せる。これが言ってみれば所場代である。ゲームは二人でもできるが、たいていは四、五人でやった。箱に置いたパッチンを、順番にメンコ遊びの要領で自分のパッチンではたき落とす。下に落ちたパッチンが、すでに落ちているパッチンと、表同士とか裏同士で二枚重なれば勝ちである。ピタッと重ならなくても、わずかでも重なった部分があればそれでよい。勝った者が場のパッチンを全部もらうことになる。ぼくらはこの遊びを「ニツチン」と呼んでいた。言葉の由

来はわからない。

一回のゲームで一人が場に出すパッチンの枚数は、その都度、互いの合意で決めることになる。はじめはせいぜい五枚から十枚程度だ。ところが回が進むにつれてエスカレートし、やがては百枚ほどにもなることがある。負けた者が一気に取り返そうとして枚数を増やすのだ。バクチの心理と同じである。

当時はまったく意識しなかったけれども、いま思えば、ずいぶん危険な遊びであった。実際、バクチ感覚のゲームであった。勝った者が全部もらおうというのも、まさにバクチだ。ぼくはほとんど勝って、パッチンをねずみ算式に増やしていった。家のタンスの大きな引き出しがパッチンで埋まってしまうまでになった。

こうして勝ち続ける者がいるということは、逆に何度やっても負け続け、小遣いをパッチンにつぎ込んでしまう子もいたはずである。そうでないと、つじつまが合わない。

ぼくがパッチンに熱中したのは、五年生のときだけだ。そのころ、ぼくらが通うS小学校の校区全域でパッチンが大流行した。燎原の火のような勢いであった。ずいぶん遠くまで遠征し、行く先々で大勝ちした記憶もあるのである。

学校でこれが大問題となり、ついにはパッチン禁止令が出されるまでになった。先生たちが町を巡回し始めた。ぼくらの町筋でも、ときおり先生が二人一組で回ってくるのを見かけるようになった。ぼくらにはしかし、表通りからは見えない深い路地裏があった。路地の奥まで見回ることはいだろうと高をくくって、ぼくらは相変わらず学校から帰るとパッチンに熱中した。

五年生が終わりに近づいたある日、突然ぼくは、

「パッチンはもうやめよう」

と、神の啓示に打たれたように決意した。いま思い出しても信じがたいが、突然の決意だった。それまでは毎日、戦いを終えては、その日の収穫物を百枚ずつの束にしてタンスにしまうのが日課になっていた。その量がどんどん増えていき、もはやタンスの引き出しには入りきららず、大きな紙箱も満杯だった。

こうしてため込んだパッチンを、ぼくはすべて取り出した。畳の上に山のように積み上げた。数百枚などという生やさしい数ではなかった。おそらく何千枚、いや一万枚にも届くであろうパッチンの山だった。炭鉱のボタ山のように、それはうずたかく積み上がった。

しばらくそれを眺めた後、外に出て、年下の子供たちを呼び集めた。五、六人の子供たちがやってきた。

「もうパッチンはやめたけん、全部やるわい。どれでも好きだけ取って行けや」

「えっ、ほんとにええん？」

「ああええ。取っていけや」

そう言うと、彼らはいぶかしそうにぼくを見つめ、やがて手に抱えられるだけのパッチンを抱えて出て行った。それでも抱えきれずに残ったものを、彼らはさらに友達を集めて取りに来た。

パッチンの山はみるみる小さくなっていった。ついには蟻の大群に襲われたミミズの死骸のように、きれいさっぱりなくなってしまうた。もったいないとはちっとも思わなかった。良いことをしたとも思わなかった。悪夢から覚めて正気に戻った気分だった。

見ていた母が、

「そんなことして、本当にいい」と聞いた。

「うん」

とだけ答えた。それ以降、ぼくがパッチンをすることはもうなかった。

新しくできた駄菓子屋は一年も経たないうちに店を閉じてしまった。入り口には打ち水がしてあり、中に入るとコンクリートの土間にチリ一つ落ちてなく、明るいガラス戸からは太陽がさんさんと降りそそぐ。飾りつけも、色彩豊かでござっぱりしている。そういう店に、子供らは結局最後まで親しめなかった。

子供らは相変わらず、古くて薄汚い店の方に吸い寄せられたのだった。狭い土間にびっしり駄菓子が積まれていて、何がどこにあるのかもわからない世界。駄菓子やおもちゃを一つ取りのけると、その下からまた別の何かが現れる。そんな神秘の世界を子供たちは好んだのだった。きれいな台の上にござっぱりと平面的に駄菓子やパッチンが並んでいる店には、神秘も夢もありはしなかった。古店のおばあさんの貧しい暮らしにもぼくらは親しみを感じていた。自分たちに近い匂いがおばあさんから立ちこめていた。年金暮らしの足しにでもと、ゆとりで開いた上品なおばあさんには、その匂いがなかった。ぼくらの足は次第次第に新店から遠のいていった。店が閉じられたのは必然であった。

■皇太子成婚とテレビのハイ

「シヨウダミチコさんか」

ユウちゃんが言った。五年生の十一月末、凍えるような朝だった。

かつてダンスホールであった店がそのころ新聞配達所になっていて、いつものように二人で登校している途中、店の前に張りだされた新聞を見て、ユウちゃんが言ったのだった。

「シヨウダかなあ、マサダかなあ」

とも言った。言われても何のことやらわからなかった。

「この人、皇太子さんと結婚することになったんじゃ」

「ふーん」

まだピンとこない。

《ユウちゃんは何でもよう知つとるなあ》

その思いをいっそう強くしただけだった。幼いころからユウちゃんには一目も二目も置いていた。知的な聡明さ、世間的常識、科学的な関心と知識、どれをとってもユウちゃんにはるか先を行っていた。高い雲の上の人だった。同学年という気がしなかった。気持ちの上では二つくらい年上の感覚だった。

その日の夕方、家に帰ってあらためて新聞の一面に載った大きな写真を見、父や母から話を聞いて、ようやく皇太子さんと正田美智子さんという人が結婚の約束をしたことを知ったのだった。

六年生になったばかりの四月十日、二人の結婚式が行われた。その日、全国の小中学校は休校となった。

「テレビがある人は家でテレビを見なさい」

先生に言われた。だが、ぼくの家にテレビはなかった。数日前にテレビが届いたばかりの木工の

棟梁の家で見せてもらうことにした。

棟梁の家では大人たちは仕事に忙しく、トシちゃんとヨッチちゃんだけがテレビの前に座っていた。ぼくを加えた三人で、馬車の行列を見た。しかし、延々と行列の映像が続くのに飽きてしまい、途中でテレビを消して遊びに出してしまった。

皇室の結婚式という荘厳な晴れがましきは、ぼくたち子供には大した感慨をもたらさなかった。もしも大人がそばにいて、彼らから感嘆や感動の声が上がったりすれば、ぼくらも釣られて、晴れがましさに感激したかもしれないけれど、仲立ちをする大人がいない環境では、テレビを見ても豚に真珠でしかなかったのだった。

この結婚式が、全国にテレビを普及させる大きな原動力になったと言われている。実際、ぼくの家でも結婚式に間に合うようにと、父がテレビの注文をしていたのだった。しかし、注文があまりに殺到したのだから、近所の電器店（当時はまだラジオ屋と呼ばれていた）では品物が間に合わず、ようやくわが家にテレビが届いたのは結婚式を一週間も過ぎてからだった。

学校から帰ると、若い店員が二人来ていて、据えたばかりのテレビの映り具合を調整していた。四本足の台の上にそれは載っていた。それを見たときのぼくの興奮は、いきなり夢の世界に連れて来られたほどにすさまじかった。ついに我が家にテレビが来たのだ。

といっても、ぼくには、すでにテレビは特段珍しいものではなかった。テレビを初めて見たのは、一年以上も前だった。そのころ父はプロレスの大ファンになり、週に一度、電器店の前で黒山の人だかりにまじって力道山の勇姿を見るのを楽しみにしていた。ぼくもついて行き、一緒に見ることもあった。

「月光仮面」がある日には、友人たちと近くの散髪屋や中華そば屋に見に行った。

だが、自分の家で好きなきときに好きなようにチャンネルを回して番組を見ることができると、これがぼくにとっては、やはり画期的だった。テレビが主体的に自分のものになったのだった。

そのころよく見た番組は、人形劇の『チロリン村とくるみの木』。放送時間がちょうど夕飯の時間帯だったものだから、父や母とよく見たものだ。

ぼくが六年生になったその四月、兄は大学生になって神戸に行ってしまった。幼いころからいつもそばにいて、遊んでもらったり、教えてもらったりしていた兄が、突然いなくなった喪失感は堪えがく、数日間は、涙がこぼれて仕方がなかった。そんなぼっかり空いた穴を埋めてくれたのが『チロリン村とくるみの木』だったのである。

ストーリーがさわやかで、人形の動きも面白く、そして何より、黒柳徹子や楠トシエなど、声の出演者の声色が楽しかった。見入っているうちに、いつしか兄のいない寂しさも薄れていった。

もう一つよく見た番組は、アメリカのテレビドラマを日本語に吹き替えた『パパは何でも知っている』だった。

スプリングフィールドというアメリカの地方都市の中流家庭を舞台にしたコミカルなホームドラマだった。生活のレベルや文化的な感覚が日本とはまるで違うことに驚かされた。圧倒された。これぞカルチャーショック。驚きという言葉さえ軽すぎるほどのショックであった。

まず驚いたのは、どの家にも大きな自家用車があること。高校生までもが運転し、ガールフレンドを乗せてデートに出かけたりする。さらに、どの家にも、玄関の前に広い芝生の庭があり、家に入ると、テレビはもちろん、電話があつて、誰とでも容易に、目の前にいるかのように話ができる。

もちろん、冷蔵庫、掃除機、洗濯機など、さまざまな電気製品が当たり前のように並んでいた。また、家には靴のままでも出入りし、何かといえは大勢の友人を呼んでパーティーを開く。日常生活のこの解放性に、ただ呆氣にとられて目を見張るのみ。

日本の日常生活とは根本から違っていた。日本人の一般的な暮らしの中に、このような解放性はありません。そもそも日本家屋の構造が、それを許さなかった。靴を脱ぎ、畳の上に座るという日本人の伝統的な暮らし方が、解放的なパーティーとは相容れなかった。頭をガツンとぶん殴られたほどのショックであった。

こうして、テレビはぼくにとつて、知らない世界への魅惑的な出入口。ドラえものの「どこでもドア」のようなものとなったのだった。

ついでに言うと、この番組を通してぼくはスプリングフィールドという町に言いようのない憧れを覚え、中学生になって『国民大百科事典』を買ってもらったとき、別冊の『世界地図帳』でアメリカ合衆国を隅から隅までなめるように眺め、スプリングフィールドという地名を探したのだった。探すと、あるある。あちらにもこちらにもあふれるようにあった。どれがあの番組のスプリングフィールドなのか、とても確定することができなかった。とりあえずのところ、五大湖の南、イリノイ州あたりにあったスプリングフィールドを、たぶんそれだろうと勝手に思い込むことにしたのだった。

■受験勉強

六年生が始まると、クラスの中にいきなり特権階級が作られた。親や子供から希望が出たとも思えないのに、私立中学を受験する生徒を先生が勝手に選抜したのだ。男子は、ぼくの兄がその春一期生として卒業したばかりのA学園を、女子は明治中期に設立された伝統あるS学園を、半ば強制的に受けさせようとした。どちらも中高一貫のミッションスクールで、特にA学園は旧帝大への進学を謳い文句にした学校だった。S学園はA学園ほどの進学校とは言えないまでも、文化面やスポーツにも力を入れた、県内一の女子ミッションスクールだった。

男子も女子も各クラスから五人ほどが選ばれた。選抜組は教室の隅にかたまつて座らされ、授業の内容がやさしすぎるからと、特別なプリントが配られて、それを解かされたりするのだった。

放課後には、たぶん週に二日ほどだったと思うが、各クラスの選抜生を集めた特別補習が行われた。

念のために言うておくと、当時、中学受験用の塾というのは、市内どこを探してもありません。そもそも塾というものがあつたように思えない。まったくないとは言わないが、あつたとしても、家の座敷を教室にした、小さな個人経営塾にすぎなかった。それが中学受験用の入試対策塾であるはずはなかった。

塾の代わりに、熱心な学校では、中学受験の入試対策をしていた。そうでない学校では、たぶんほつたらかしたつたと思う。

ぼくは、A中学を受ける意思など尋ねられもしないまま、選抜組に入れられていた。のんき者だから、言われたら、ああそうかと思つて従つただけのことだったが、敏感な子だと、選抜された方もされなかつた方も、どちらもいい気はしなかつたと思う。はっきり言って、明らかな差別教育だったのだから。

やがて夏休みが来た。兄が帰省し、久しぶりに兄と遊べ、様々なことを教えてもらえると楽しみにしていたのに、思惑は少し外れてしまった。毎日、学校で選抜生の補習をすると告げられたのだ。朝から学校に行かないといけなくなった。いやなことになったなあと、自由を奪われるつらさに目の前が暗くなった。といつても、補習は午前中だけだった。

竹馬の友のうちで、選抜生はユウちゃんとはぼくの二人だけだった。小さいころには雲の上の人に見えていたユウちゃんが、いつからだろう、一番の親友になっていた。パッチンからは足を抜いたし、ガキ大将が率いる遊びグループとも距離を置くようになったしで、知らないうちに、ユウちゃんの世界に一步近づいた気がしていたのだった。

四年生の担任だったS先生のおかげで、勉強と読書の楽しさに目覚めたぼくだった。兄が小・中学校時代に買ってもらっていた少年少女文学全集（全冊は揃っていなかった）を熱心に読むようになった。母が新しく買ってくれた「家なき子」、「母をたずねて三千里」、「アムンゼン物語」、「赤毛のアン」、「小公女」など、かなり分厚い単行本にも挑戦するようになった。動物、植物、地理、歴史、地球、宇宙などの図鑑も、買ってもらった端から没頭し、穴が開くほど何度も眺め、かつ読んだものである。

こうして知的な目覚めを体験し始めると、ぐんぐんユウちゃんを身近に感じるようになった。あるいは、ユウちゃんを身近に感じるようになったことにより、知的好奇心がかき立てられたのか。どちらが先でどちらが後かは、ニワトリと卵だ。定かでないが、ともかくユウちゃんはその後、ぼくにとって強烈な知的刺激剤となり、同時に親友ともなったのだった。

ともにA学園に入学し、高校を卒業すると、ともにK大学に進んだ。高三のとき、実を言うと、二人ともクラス担任からT大学を受けたらどうかと勧められた。だが、冬休みに末川博の『彼の歩んだ道』を読んだぼくが「K大反戦自由の伝統」にあこがれるようになり、進む大学はK大しかないと強く思うようになったのがきっかけで、それをユウちゃんにも話しているうち、ユウちゃんもまたK大を受けることになったのだった。

ぼくらの町筋に、選抜生がもう一人いた。四年生のころ引越してきた山中君だった。初めは彼の存在に気がつかず、一緒に遊ぶこともなかったのだが、五年生と六年生で同じクラスになったのがきっかけで親しくなった。学校帰りはもっぱら彼と一緒にだった。

竹馬の友ではなくて、教室でできた親友という間柄だったため、ぼくらは「○○ちゃん」という親しみをこめた名前で呼び合うことはなかった。姓で呼び合った。だが、君づけはせず、「山中」、「奥村」と呼び捨てで呼んでいたのではあったが。

ユウちゃんはパッチンなどには目もくれない優等生だった。しかし山中君は、大流行に抵抗できず、パッチンに手を染めた。結果はいつも負け組で、ずいぶん小遣いをつぎ込んだのではないかと、今になって思う。

何とか取り返そうと、目を血走らせて悲愴な形相でパッチンをしていた山中君を思い返すと、なんだかぼくに責任がありそうで、後味の悪さを覚えないうけにはいかない。子供の世界は、シビアで冷徹だ。親友だろうが何だろうが、情けも容赦もありはしなかった。弱肉強食の動物世界、それが子供の世界なのだった。

こんな三人が、六年生の夏休み、一緒に補習に通うことになった。その初日、算数のとけい算を習ったのが、今も強く印象に残っている。たとえば、「三時と四時の

間で、長針と短針が重なるのは何時何分ですか」といった問題だ。

説明もなしに、いきなり解かされた。見たこともない問題だった。ぼくが思いついたのは、ゼノンの「アキレスと亀」の方式だったと思う。もちろん。ゼノンもアキレスも亀も、何も知りはしなかったが……。

まず長針が追いかけてきて、短針がいた位置まで進むのに何分かかるか。そのとき短針はすでにどこそこまで進んでいるから、次にそこまで長針が進むのに何分かかるか。さらにそのとき進んでいる短針の位置まで長針が進むのに何分かかるか。これを繰り返していけば差はどんどん縮まって、やがては重なるのではないか。だが、やってみると大変な計算になった。しかも、いつまで経っても追いつく気配がない。

二千数百年もの昔のゼノンのワナに、みごとに引っかかったのだった。

みなが苦しんでいるのを見た先生がひと言ヒントを与えてくれ、それで要領をつかむと、なんとか解決した。だが、出てきた答えが11を分母とする不思議な分数で、秒まで計算してもまだ分母の11が取り消せない。はたしてこんなのでいいのかと、次の心配が湧いてきたのも、なつかしい思い出だ。

このほかに夏休みの補習で何を習ったのか、今はまったく思い出すことができない。算数だけでなく、国語も理科も社会もあり、入試科目の一つであった作文の練習までやらされたのだったが、何一つ思い出せない。ああそうそう、理科で滑車の問題を解かされたのを、いま思い出した。

まあなんであろうと、習ったことは、後々のためにどれほどかは役立ったはず。

だが、ぼくにとって最も役に立ったのは、A中学を受けようという自覚めいたものが、補習を通して芽生えたことだった。

「よし、勉強しよう」

そう思うと、居ても立ってもいられなくなつて、上一万の書店に出かけ、国語、算数、理科、社会の四冊の『自由自在』を買ってきた。

「これを全部勉強したら、絶対にA中学に受かるよ」

母の言葉を信じたぼくは、問題を解き、解説を読み、一人で勉強を始めたのだった。

と言いつつ、読書の誘惑も強かった。『自由自在』を勉強する一方で、『小学六年生』の夏の別冊付録「アンクル・トムズ・ケビン」にも没頭した。

ちなみに、小学館の『小学△年生』は、二年生のころから毎月欠かさず読むようになっていた。発売日が待ち遠しくて、その日が来ると本屋に飛んで行ったものだ。クイズや学習的な問題を解いては、毎月応募するのが楽しみだった。宛先である「東京都千代田区神田一ツ橋二の五 小学館」を何度ハガキに書いたことか。いまだにこの住所が宙ですらすら出てくるから驚きだ（今は住所が少し変わっているが）。

そうこうするうち冬休みが来た。再び学校から、毎日補習をすると言い渡された。場所は学校ではない。生徒の自宅でやるという。その子は、入学以来一度も同じクラスになったことがなく、顔も名前も知らなかったが、家は、一年生のときに同じクラスだった稲村君の自宅に近い豪邸だった。補習は夜だ。毎日、薄暗くなってから出かけていき、二時間ばかり勉強して、真つ暗な中を帰っ

てくる。ユウちゃんと山中君が一緒だったから堪えられたが、この補習、ぼくにはどうもなじめなかった。楽しくなかった。

自由を奪われる気がした上に、どうして昼間にしないで、わざわざ暗い夜に出かけないといけないのかと、そのこと自体がいやだった。畳の上に長机を並べて勉強させられる、その雰囲気にもなじめなかった。

毎回、プリントが二、三枚配られて問題を解き、あとで簡単な解説があったが、はつきり言っている『小学六年生』や『自由自在』ですでに勉強していたものと同じに思え、その意味からも、わくわくする喜びを味わえなかった。

それでもともかく、休まずに通った。そして三学期になった。

三学期の初日、先生から

「奥村君、ちょっと」

と呼び出された。

「冬休みの補習代が奥村君だけまだなので、ご両親に言っ、明日にでも持ってきてもらえないかなあ」

何も知らなかったぼくは驚いた。驚くというより、赤面した。

おそらく事前に、親向けのプリントに書かれていたのだろう。そのとき母は、「冬休みに誰それ君の家で補習をする」というところだけを頭に入れ、補習代のことには大して気にも止めずに読み飛ばしたものと見える。そう言えば、全員が来ていたのではなかった。希望者だけの補習だったようだ。

来た子らはきつと、補習の初日に先生に補習代を渡したのだ。そのようにプリントに書かれていたのだろうか。ぼく一人、補習代を払いもしないで、二週間近く、ただ食い同然で補習を受けていたことになる。それを知ると、よそ者だった自分が恥ずかしくて、泣きたいくらい悲しくなった。

「あれっ、奥村だけ持ってきてないぞ」

不審の目が、補習の初日、いきなり先生から突きささった気がするのである。

補習に、どこかなじめないそらぞらしさを感じたのは、そのためだったのだろうか。

「まだ持っていないのか。どうなってるんだ」

先生らの不審のまなざしは日ましに強くなり、それをピリピリと無意識のうちに感じとったぼくは、部外者のような落ち着かない気分にはせられたのであったろう。

「これは先生らのためのお金ではなくて、プリントの印刷などにかかった費用なんだから、そのことをきちんとお父さんやお母さんに話して、明日〇△円、持ってきてください」

単刀直入にそう言われた。顔を真っ赤にして、うなずいた。翌日、言われた金額を持って学校に行き、先生に手渡した。

こんな思い出もありはしたけど、三月初旬にA中学の入試があって、合格した。

同じクラスから五人受けて、四人受かった。塾に代わって熱心に受験指導した学校は、さすがに強かった。

山中君一人が落ちてしまった。

クラスは別だが、ユウちゃんももちろん受かった。一年生のときに稲村くんちでよく遊んだ仲間では、豊川君が受かった。松尾君と稲村君はなぜか選抜組に入れてもらえず、A中学に進めなかった。

六年後の大学受験の際、ユウちゃんと同じく、豊川君にも、末川博の『彼の歩んだ道』のことを話し、一緒にK大に行こうと勧めたと思うが、彼は、出世するにはやっぱりT大じゃろうと、T大

を受けて合格した。

ところがだ。T大に入るやいなや、彼はたちまち激烈な学生運動に身を投じていった。先頭に立って活動し始めた。ぼくとは思想の方向性にやや違いはあったが、彼は彼なりに、ぼくなどは比較にならない戦闘性を発揮した。獄舎につながれ、臭い飯を食わされたことも、一度ならずあった。こうしてそれぞれ進む道がバラバラになってしまった我々だったが、夏休みなどで帰省すると、必ず昔の仲間が寄り集まって友情を復活させ、野球やマージャンを楽しむのは不思議なことだった。友情は何にもまさる最高品だと痛感したものだ。

豊川君は大学卒業後も生き方の根本を変えることなく、労働運動の全国幹部として戦い続けた。真剣に反戦平和の旗印を掲げて戦った。出世とはほど遠い道だった。

だが、人生がまだ秋を迎えないうちに、彼は突然死んでしまった。家族から、彼の死を知らせる電話がA学園同窓会にかかってきたとき、数学科教師をしていたぼくは、偶然にも、女性事務員の応対の声を、至近で耳にしまった。驚きと悲しみは甚大だった。目の前に深い闇が覆いかぶさった。

直ちに松尾君に電話した。

「えっ、なんであんなええやつが死ぬんじゃ。若いころにはちよつと無茶をしたけど、死んだりするはずがない。信じられん。まだまだこれからじゃったのにのう」

電話の向こうとこちらで涙を流し合ったものである。

小学一年生のあの日に端を発した友情が根強く続いていたさなか、豊川君の命はあつげなく燃え尽きた。人生の出逢いが偶然に支配されて不可解きわまりないものであるように、別れもまた抵抗しがたいまでに不可解であり、唐突なのである。

中学入試の数日後、合格発表があった。掲示板を見に行ってくれた先生から直ちに合格が知らされた。その昼休み、同じクラスの隅田君と、屋上のフェンスに寄りかかってしんみり話しこんだのが、いまだに忘れられない思い出である。まわりでは大勢の同級生や下級生が遊びに興じていた。その中であって、ぼくら二人は彼らから遊離して、なんだか一段高いところに昇った気分になっていた。

隅田君は六年生から転校してきた友人であり、二人だけで遊ぶほどには親しくなかったが、頭のよさがピカイチなのは転校早々ありありとわかった。ユウちゃんと比べても遜色ないほど、いやその上だった気もするほどだった。

ボールを使った運動などはまるで下手くそで、キャッチボールさえまともにできなかったが、彼には長距離走という基礎体力の強さがあった。運動神経はダメなのに、そして短距離走もダメなのに、長距離を走らせると、なぜか心肺能力が抜群で、誰と走っても負けないのだった。

そして何より、明るくって、人なつっこくて、ユーモアがあつて、誰とでも仲よくできるのが、彼の最大の魅力だった。どれもぼくには欠けていたものだった。

隅田君としんみり話しこんだのは、そのときが初めてだった。隅田君の方から誘ってくれた。二人でフェンスにもたれ、

「いよいよ中学生じゃなあ。おんなじ学校に行くことになったんじゃ。お互いがんばろうな。これからがほんとの勉強やで」

そんなことを隅田君は言った。そこまでの自覚はぼくにはなかったので、言われてみるとなるほ

どと思い、先を見る目が全然違うなあと感心したのだった。

ユウちゃんともまたどこか違う。彼よりもっと先を見た本物の先駆けという気さえた。

そういう彼からこうして話しかけられたことが、そして、そんな話のできる相手だと彼に認められたことが、嬉しくてたまらなかった。幼いころから貼りついてきた劣等感の殻を、一枚脱ぎ捨てたような気分だった。

「中学生か。ぼくにはまだようわからんけど、たしかに本気で勉強せんといかんなあ。本もいっぱい読みたいしなあ」

「そうよ。何でもできるんじゃ、中学生ゆうのはな。じゃけど、自分で勉強せんなら取り残されるぞ。誰も尻を叩いたり、引っぱってくれたりはせんぞ。それでも、仲間がおったら、がんばれる。一緒にがんばろうな。がんばって勉強しような」

「うん。一緒にな」

ぼくはますます誇らしく感じた。

「俺、小学校いうところはあんまり好きじゃなかった。親の転勤で、二回も転校したけど、どこに行っても運動が下手で、馬鹿にされとった。それで、俺にできるんは走ることだけじゃと思うて、長距離を走る練習をしたんじゃ。腕立てとか腹筋とか、人がやらんこともやった。遊びというより、苦しいだけのトレーニングじゃった。じゃけど、それがたしかに長距離の基礎体力にはなったなあ」

「偉いなあ隅田は。人と違うことでも、こうじゃと思うたら、トコトンがんばれるんじゃからな。つらいことを続けるんは、誰にでもできることじゃないぞ。それができるんが隅田のすごいところじゃ。実を言うたらな、ぼくも一年生のころ、誰とも遊べなんだ。仲間はずれにばかりされとった。朝になったら腹が痛うなって、よう休んだもんじゃ。父ちゃんに何回怒られたかわからん。ぼくは隅田みたいに明るうはないし、人を笑わせることもできん。いつも一人でぼつんとしとった。四年生のときにS先生が担任になってくれて、初めて自信ができたんじゃ。算数がようできるゆうて、ほめてくれてな。それと、五年生になってパツチンが上手になったんも、馬鹿みたいなことじゃけど、自信になったかもしれないなあ。ぼくの小学生時代は四年生から始まったみたいなんじゃ。それまでは日が当たらん暗い谷の底にぼっかりおった。それでも隅田みたいに、しんどいことを一生懸命続けてがんばったりは、ぼくにはできなんだ」

「そんなことせんでも、奥村にはええとこがいっぱいあるじゃないか。勉強も、人に見えんところでコツコツやとるじゃろ。遊んでばかりに見えても、ほんとはようがんばとる。本もよう読んどる。運動神経も俺なんかと比べたら、比べものにならない。俺は知つとるぞ。奥村は人に隠れて、ひとりでこっそりしんどいことをがんばとる人間なんじゃ」

隅田君は人の見えないところをよく見てくれていて、つくづく思った。涙が出るくらい嬉しかった。ぼくは勉強とか、本を読んだりとかは、周りの友人たちから隠れて、こっそりやるものとはばかり、いつのころからか思うようになっていた。人に見られてはいけないのだと、なぜかいつも思っていた。だから、誘われたら断らないで、外に出て遊ぶのだった。パツチン名人になったのも、そのためだった。ガキ大将のグループに入って、竹の剣を振り回していたのもそのためだった。

勉強しかできない弱い人間だと思われなくなかったのだ。いやちよつと違う。小さいころからの遊び友達に、彼らより少し高みに立ち始めたことを勘づかれたくなかったのだ。勉強や読書が好きになってきたことを、彼らに知られたくなかったのだ。知られることが、彼らに申し訳ない気がし

てならなかったのだ。

だけど、心の奥では、ユウちゃんのような生き方に憧れてもいた。そのためにはよほど自分に自信をつけないといけない。その自信を裏づける孤高と力強さを自分のものにならないといけない。それがぼくにはまったくないのだった。優柔不断なのだった。

本当はユウちゃんのように、堂々と勉強し、こそこそ隠れたりせずに本も読みたかったのに、それができなかった。

隅田君がこうしたぼくの心の奥を見破っていたのは驚きだった。

屋上のフェンスにもたれて隅田君と語り合ったあの日を境に、ぼくは間違いなく雲の上に頭を一つ抜け出した。自分に自信をもった。隅田君やユウちゃんの世界に近づいたと、ぼんやりながら感じとった。小学生時代の暗い劣等意識を、少しばかり振り捨てることができた。

隅田君は中学に入ってから、ぼくよりはるか前を走っていた。ユウちゃんよりも先を走っていた。ユウちゃんには追いついたと思えることがあっても、隅田君に追いつくことはなかった。彼は中学・高校の六年間を通して、常に一位か二位の成績を取り続け、当然のように、六年後、T大に入ったのだった。

T大では、学生運動を活発にやり、一時は指導的立場に立ったこともあったが、いつの間にかやらの人生の価値観を反転させていた。大手貿易会社の海外支店長を務めた後、退社して自ら会社を立ち上げ、世界を股にかけて金融のドンにのし上がったのである。

ぼくから見れば、これぞ世渡り上手。思想信条などという人生の重しはバツサリ切り捨てて、現実的損得の世界に生きる人物へと変貌した。飛び抜けた頭の良さがこうした世界で発揮される人物になったのだった。

墮落したなと思うこともあったが、なんであれ、一つの分野で世界の最先端を走る能力には脱帽せざるをえない。感嘆し、尊敬し、憧れの念さえ抱くのである。人生を生きぬく力が、ぼくなどは格段に違っているなと思わせられる。

第二章 中学生時代

■兄のお古の地図帳

A 中学の入試は、三月五、六日の二日間だった。合格発表は三月八日だったろうか。残された小学生時代はもうほとんどなかった。前途に道が開けたとたん、バタバタとあわただしく店じまいをして、卒業していったのである。

はたして六年間をしんみり振り返る心の余裕があったかどうか、卒業式で人並みに涙を流したりしたのかどうか、そのところがはっきりしない。

覚えているのは、新しくできたばかりの体育館で卒業式を終えたあと、校庭に出ると、下級生たちが手と手をつないでトンネルを作ってくれていて、その中を、頭を下げてくぐり抜けたこと。トンネルをくぐっている感覚だけは妙に生々しい。

それがはたして感激の涙を呼んだかどうか、それはわからない。式の流れに身をまかせているうちに、気がつくとも行事はすべて終わって、ぽつんと頭を空白にして立っていた。そんなところだったように思う。

学校行事に対しては他人事のように淡泊なぼくだったが、心の奥を掘り下げていけば、新生活への見えない期待が、不安とともに、激しく渦巻いていたのはまちがいがなかった。

一年生のとき、クラスの中に溶けこめないで、疎外感と劣等感に、いきなり激しく打ちのめされた。学校にも行けなくなって、朝になれば腹痛を起こして、父に何度も叱られた。あの情けない体験だけは、もう二度とくり返したくない。前途への期待の裏側には、そんな不安と後悔と、それを乗り越えたいという執念のようなものが貼りついていてた。

ともかくにも出鼻が大事。そう自分に言い聞かせたのだった。

中学の入学式では、宣誓書なるものに筆で署名をさせられた。まったく予想もしていないことだった。そもそも筆で文字を書くなんて、七夕の日に短冊に「天の川」と書くときか、正月の書き初めで「謹賀新年」などと書くときくらい。宣誓書の細い欄に筆で名前を書こうとすると、練習もないうぶっつけ本番だったものだから、指先がぶるぶる震えて、文字やら何やらわからない黒々とした墨跡ができあがっただけだった。

それでもともかく入学し、いよいよ授業が始まった。

国語の先生は、「春の海ひねもすのたりのたりかな」という蕪村の句を取り上げて、

「去年教えたとき、これを『春の海、ひねもすの、たりのたりかな』と読んだのがおった」

と言って笑わせ、「ひねもす」の意味や、「のたりのたり」の語感をじっくり語ってくれた。中学の授業は味わいが濃く、これは面白い授業になるなと感じたのだった。

倫理の先生は日本人ではなかった。外国人だった。教室に入ってくるなり、黒板に「丸車野」と漢字で書いた。

「これを何と読みますか」

見たこともない言葉だが、読み方は一つしかないと思え、みんな一斉に

「まるしゃの」

と答えた。

「そう、まるしゃのです。よくわかりましたね。ではどういう意味ですか」

これがわからない。みんな黙ってしまった。やがて一人の生徒が手を上げて、

「丸い車輪がどんだんころがっていく野原です」

「そうですね、それはいい発想です。ナイスアイデア。でもちょっと違います。むずかしいのでヒントを上げましょう。私に関係しています」

先生は腹の出っぱった丸々とした体形をしていた。

「太った人が乗った車が野原を走って行くこと」

とかなんとか、みんな口々に言う。

「やっぱりちよつとむずかしかったですかねえ。では正解を言います。これは私の名前です」
そう言って、カタカナで「マルシャノ」と書き、その横にアルファベットで綴りまで書いた。

「私はマルシャノと言います。スペインから来ている神父です。みなさん覚えてくださいね」
楽しい授業になりそうな予感がした。

英語の先生は一風変わっていた。どう見ても日本人だが、しゃべり方が日本人らしくなく、訛っている。日本に十年ばかり住んで日本語がまあまあできるような人になったアメリカ人といった感じの人だった。先生は、四本線の入った英語練習ノートにアルファベットを一文ずつ丁寧に書く練習をさせた。これはぼくには苦痛でしかなかった。だけど先生のしゃべり方が面白く、やはり楽しい授業になりそうな予感がした。

数学の先生は、顔がキツネのようにとがっていた。目つきも鋭く、いかにもこわそうな人だったが、だが、しゃべるとひょうきんな先生だった。冗談で笑わせながら、文字式の計算を猛烈なスピードで説明していく。宿題も多く、毎日必死で練習した。カッコが何重にもついた式の展開など、面倒だったが、やっているうちに、数学はなかなか楽しいな、ぼくに向いているなと思うようになってきた。

暗記するのは苦手だったが、覚えなくても考えれば解ける数学は楽しかった。

先生には誰からも恐れられるすぐ技があった。授業中に私語が聞こえてくると、

「おい、その二人、前に出てこい」

そう言って先生の前に立たせるのだ。そしていきなり鼻柱を下から指で弾く。これが痛い痛くないの、話にならない。と言って、その痛みをぼくは直接味わったことはないのだが、弾かれた生徒が鼻を押さえて激痛に顔をゆがめるのを見ると、こちらまで涙を流す。

これを誰もが「鼻カツ」と呼んで恐れるようになった。

たしかに痛い。甚だしく痛い。だが、陰うつさな痛さはどこにもなかった。実にさわやかで後味のさっぱりした一発なのだった。そのため「鼻カツ」は恐れとともに、先生への親しみの言葉ともなったのだった。

数学も楽しい授業になりそうだった。

化学の先生は心底恐かった。見た目はひょうきんでやさしそうだが、気に入らないことがあると、理由もなしに叱りだす。そんなのどうでもいいじゃないですかと、こちらが言い出したくなるようなことでも、先生の勘にカチツとさわったが最後、突然叱りだす。こうなるともう、怒りの炎の治めようがない。顔から熱気が冷めるまで、こちらはただじっと堪えているしかない。

ぼくが週番長になった週の土曜日のこと、放課後の掃除で化学準備室の当番になっていた三人の

生徒が犠牲になった。どんなに丁寧に掃除をしても、「よし」の音がかららないのだ。当番の一人が飛んできた。

「どんなに掃除してもよしと言うてくれんのじゃ。週番長を呼んでこいと言われてしもうた。奥村君、ちょっと来てくれや」

こちらまでが叱られそうで、足がすくんだ。だが、そこは一週間きりとはいえ、クラスの代表、週番長だ。尻込みはできない。意を決して準備室をノックした。ドアから顔を差し入れた。三人が先生の前に立たされていた。先生はぼくを見るなり、

「週番長、君の目で、こんなことで掃除になっとるか、よーく隅々まで見てやってくれや」

ぼくは机や実験器具に埃がたまっていないか、床の上にゴミが残っていないか、丁寧に見て回った。どう見てもきれいに見える。

「どうじゃ」

「きれいになっとると思います」

「そうか、なら週番長に免じて、今日のところは許してやろう。よしお前ら、帰ってもええぞ。あとで週番長に礼を言うとき」

結局最後まで、掃除のどこが悪いのかわからないままだった。先生には掃除のよし悪しなどどうでもよかった。ただ虫の居所が悪くて、叱りつけただけだったらしい。

ぼくは化学の先生を、怖くはあったが嫌いではなかった。根はやさしくて生徒思いの先生であることに気づいていたから。

先生が夏休みに出した宿題が、科学への興味をそそってくれた。ファラデーの『ロウソクの科学』という本を読んでくるようにというものだった。一人に一冊ずつ配られた。感想文を書かせたりはしなかった。ただ読むようにというだけだった。

まじめに読んだ生徒は少なかったらしい。だが、ぼくはどんどん引きつけられて、結局、最後まで読んでしまった。ロウソクはなぜ途中で消えずに、最後まで燃え続けるのか。炎はどうしてあのような形になるのか。炎の中には完全燃焼している部分と不完全燃焼の部分があり、部分部分で色の違いや、温度の違いがあること。目に見えない部分にも炎はあること。こんなことを興味深く教えられた。いつも見ている現象なのに、その奥にはずいぶん深い科学があることを教えられた。

化学も楽しい授業になりそうだった。

音楽も美術も楽しかった。どちらの先生もすばらしい技能を持った一流の先生だった。

音楽の先生はどこに出しても恥ずかしくないバリトンの名手。授業で歌ってくれるとき、あまりの音量に圧倒された。

美術の先生は愛媛県でトップクラスの油絵の描き手だった。

中一からいきなり油絵をやらされた。夏休みの宿題でぼくが描いていた絵を、

「これはすばらしい。光と影の表現がうまい」

と、穴があったら入りたいたいくらいにほめてくれたことがあった。中三の時には、全校の最優秀賞に選ばれた。何ヶ月か、図書館の目立つところに、額に入れて飾ってくれた。

後に、東京の情報・通信メーカーを退社して、A学園に数学教師として戻ってきた。さっそく、先生が面材店の二階でやっていた絵画教室に入門した。

「昔、絵のうまい生徒がいてねえ。ええと、たしか奥村君と言ったかな。あれっ、ひよっとして

あの奥村君が君なのかい」

「はい、そのひょっとしたらが、私かもしれません」

こうして画材店で習うようになって、まだ二、三週目のころ、

「今日は人物のデッサンなので、一階の特別室でやりましょう」

言われて特別室に行ってみた。特別室と言っても、いつもの表口からではなくて、裏口の扉を開けて入るといっただけのこと。いったん外に出て、裏口に回って入ってみると、狭い部屋には、すでに生徒がびっしり集まっていた。生徒といっても、大半が五、六十歳。男が二割、女が八割といったところ。季節は春だが、肌寒い夜だった。部屋にはストーブが煌々とたかれていた。

そこに先生と一緒にモデルの女性が二人現れた。東京から来たプロのモデルという話だった。ベテランの生徒とモデルとが、美術論を戦わせ始めた。最近の美術の動向がどうのこうのと、チンプンカンプンの話ばかり。ただホーツと感心しながら聞いていた。モデルといっても、ちゃんと勉強していて、たしかな美術理論を持っているんだなあ。そう思ったとき、

「じゃあ始めましょう」

先生の声がかかった。モデルは羽織っていたオーバーをスルツと脱ぎ落とした。とたん、面食らってしまった。目のやり場がなくなった。オーバーの下は生まれたままの姿。乳房も陰毛もなにもかもがスツポンポンだ。美術論を語っていた彼女と、今のスツポンポンと、二つの姿をどう融合すればよいのだろう。

モデルは二人いるから、自然に二グループに分かれてデッサンが始まった。十五分ほどの間隔で、立ったり、座ったり、足を組んだり、ポーズを変えながらデッサンしていく。

裸婦を描くことなど生まれて初めてのほくだ。心臓をパクパクさせながら、絵とも何とも言えない絵を描いているそばに、先生が近づいてきて、

「裸婦は美術の基本中の基本だからね。変な妄想などもたずに、一個の物体として、しかも生きた物体として、縁取りなんかにこだわらず、内面の実在感を表現するように努めたらいいよ」

言われたからと言って、そうそう簡単にできるわけではない。結局その日は、見返す気にもならないくらい、ひどい駄作がスケッチブックを埋めただけだった。

音楽と美術は楽しみな授業となった。

地理の先生は、その春大学を卒業したばかりの若い先生だった。授業の進め方は他の先生とはまったく違っていった。

後に大学の教養課程で東洋史の講座をとったとき、まったく同じ授業の進め方をする先生に出会うことになる。どういう授業かというと、自分のノートを、学生たちが筆写できるぎりぎりのスピードで読み上げるのだ。学生らはひたすらノートに鉛筆を走らせる。耳で聞いただけでは書けないと思える難しい漢字が出てくると、それを先生が板書する。学生はそれを見て、筆写を続ける。意味を考えながら筆写するゆとりなどあるはずがない。ただひたすら、耳から指先へ、そしてノートへと、読み上げられる文章を反射的に書き写すだけ。

学生らの指先がしびれてきたと見ると、読み上げを突然中断し、読み上げた部分に対する説明を加える。たとえば、均田制の詳細を、黒板に図を描いて説明したりする。もちろん学生らは、この図も丸々ノートに写すのみだ。

毎時間、毎時間、このくり返しだった。週を追って出席者が減っていくのは理の当然。あとでま

じめな学生のノートを借りて写せば、事が済んでしまうのだから。ぼくも減っていく学生の一人となった。試験が近づくと、ノートを一日何百円とかで貸し出して、それでアルバイトをする学生さえいたのである。

さてそれで地理の先生だが、この先生も自分のノートを読み上げるだけだった。

「今から私のノートを読みます。君たちはそれを自分のノートに書き写してください」

最初の一回だけのことかと思つたら、来る時間、来る時間、それだった。

これでは、生徒たちはうんざりして、地理の時間が苦痛でたまらなくなるだろう。しかし、ここが不思議なところで、誰一人うんざりする者はいなかった。地理の時間が嫌いになる者もいなかった。それどころか、地理の時間を心待ちにするようにさえなったのである。

何がそうさせたかと言えば、書写は授業の前半分だけ。残りの半分は、先生が学生時代に全国を旅して回った旅行談を、実に巧みに、興味深く語ってくれたからだ。先生は日本国中、いたるところを旅していた。毎時間、異なる地域の話をしてくれるけれども、話題が尽きることはなかった。

今も強く印象に残っているのは、先生が根室本線で狩勝峠を越えたときの話だった。目の前にぐわっと広大な帯広平野が開けてきたというのであった。

「あの広大さ、雄大さは、全国どこに行っても見る事ができないものでしたね。私は恥ずかしいけど、感激のあまり涙にむせび、地平まで広がる帯広平野を窓からずっと見つめ続けていました」それが実を言うと、あれから六十余年、今にいたるも、その思いは果たされていないのである。

A 学園在職中、修学旅行の行き先が九州や山陰などから、あるとき北海道に変更された。そのため、三度ばかり、引率で北海道に行った。だが、残念なことに修学旅行には狩勝峠を越えるコースが組まれることはなかった。妻と北海道を旅行したことも二度ほどある。一度目は団体のツアーに参加しただけだったから、しかたないとして、もう一度は、自分ですべての計画を立てた。だにどういうわけか、そのとき地理の先生の話を知ると失念して、やはり根室本線で狩勝峠を越える日程を組まなかった。

そして定年後、今度こそはと根室本線を列車で走る計画を立てた。あこがれの狩勝峠を越えて、眼下に広がる帯広平野に涙を流し、さらに帯広から釧路まで行き、釧路湿原を満喫しようというのであった。ところがトロッコ列車が走る湿原とは別に、どうしても行きたいと考えていた湿原がもう一つあって、聞くと、そこまで行ってくれるバスがすでにシーズンオフで運行していないのと。やむなく計画は取り止めたのだった。

そんなわけで、今にいたるも、夢は夢のままなのである。

あつ、そうそう、地理の時間に大恥をかいたことがある。

入学時に買い揃えるべき本のリストの中に地図帳があった。しかし、兄がA 中学に入ったときに買った地図帳と、出版社もタイトルもまったく同じだったため、母が、

「これは新しく買わなくても、古いのでいいんじゃないの。地図なんて数年でそんなに変わるものではないでしょうから」

と、妙な節約心から、地図帳だけは買わずに済ませてしまったのだった。

古いのを持って学校に行った。先生が、

「地図帳を出して、△△ページを開けてください」

と言い、そのページを開けたのだが、どうも周りの友人たちとはページの内容が違う。そこは統計データなどのページだった。地図そのものは大して変わらなくても、統計データは年々新しくなり、地図帳もそれに合わせて年々更新されているのだった。まったく新しいデータがつけ加わることもある。

それに第一、地図帳の表紙が周りの友人たちとはまるで違う。

先生も、ぼくがキヨロキヨロしながら、目をぼちくりさせているのに気がついて、そばに寄ってきた。そして地図帳を手にとって、

「あれっ、ずいぶん古い本だね。どうしてこんなの持ってきたの」

「兄がこの学校の卒業生で、入学したときに買ったんです。同じ本だと思って」

「それで新しいのは買わなかったの」

「はい。母がこれでいいと言ったものだから」

「そうだよ。たしかに同じ本なんだよ。だけど版が違うんだよ。こういう本は、毎年改訂されて少しずつ変わっていくんだよ。今日説明しようとしている統計データは、どうもこの本には載っていないようだね。これでは勉強にならないので、次までに○△書店に行って新しいのを買っておいってください。今日のところは、しかたないので隣の人に見せてもらってください」

ぼくは恥ずかしくって、顔を真っ赤にしてしまった。古い本に呪いがかけられたように思え、手に取ることさえおぞましくなった。

こんな出来事もありはしたけど、地理の時間が嫌いになることはなかった。先生の旅の話は、聞くたびにわくわくした。先生からたくさんの夢をもらったのだった。

こう書いてくると、中学の出だしはまずは順風満帆だったように見えてくる。小学校に入ったときに味わったあの悲惨な体験は、中学校ではくり返されなかったと言えそうだ。だが、心の内実は、はたしてそうだったろうか。

外見には、たしかに、六年前のような悲惨な体験はなかったと言える。だが、授業の場を離れると、やはりぼくは孤独な方だった。友だちは少なかった。大半は小学校からの友人だった。友人の輪を広げるのは苦手だった。人の輪の中に入らず、外からぼんやり眺めていることの方が多かった。小学校入学時と、意識の根本は大して変わっていなかったのである。

声をかけてもらうのを待っていた。この待ちの姿勢がぼくの意識の基本路線であって、自分から声をかけて輪に入るのは、やはりうまくできなかった。

とはいえ、小学生時代から見ると、やはり脱皮していた。気がつくとも友人は少しずつ増え、放課後毎日鉄棒をする仲間とか、土曜の午後や日曜日に野球をする仲間とかができていた。わずかながらも行動的になっていたのはたしかだった。

■鳩になったアキさん

中学に入ってまだ日が浅い四月中旬、幼いころから兄のように慕っていた三歳年上のアキさんが亡くなった。アキさんはユウちゃんの兄さんだ。

アキさんは生まれたときから体が弱かったらしい。激しい運動には耐えられない体質だった。それを知ったのは、アキさんが亡くなってからだった。直接の死因は赤痢だったが、葬儀の後で母が言った。

「アキちゃんは虚弱体質でね、赤痢だけで亡くなったんではないのよ」
このとき聞いた「キョジャクタイシツ」という奇妙な響きの言葉が、以来、耳から離れなくなつた。

思い返すと、小学生時代、たしかにアキさんが外で遊ぶことは少なかった。ぼくの年代は俗にいう団塊の世代だ。通りは子供であふれていた。学校から帰ると、夕方暗くなるまで子供たちは外で遊び回った。しかしアキさんがその輪の中にいることはめつたになかった。たいていは家で静かに過ごしていた。

小学校も、他の子たちとは別だった。ぼくらはみんな近くの市立小学校に通っていたけど、アキさんだけは大学の付属小学校に通っていた。小学校を卒業すると、引き続き付属中学校の生徒になった。生活リズムの違いにもよるのか、アキさんの通学姿を、不思議なことに見かけた覚えがない。そんなアキさんだったが、ときにぼくらの遊びに加わることがあった。それは決まって、日が城山の向こうに落ちかかるころだった。暮れるには早いけれども、西にお椀のようにこんもりしている城山の陰に日が隠れるのだ。

アキさんが現れると、ぼくは急に胸が高鳴り、必ず後ろにくっついたものだ。

アキさんが遊びの輪に加わるのは、ぼくらがクチクと呼んでいた一種の戦争ごっこを始めたときだった。

戦争ごっことは言うが、クチクはいたって平和な遊びだ。二組に分かれ、一人一人は帽子のツバを前か、横か、後ろ向きにして、物陰に隠れながら移動する。敵方の誰かに会おうと、前は横に、横は後ろに、後ろは前に勝つというのである。勝つ相手を発見して捕まえれば、捕虜として自分たちの陣地に連れて帰ることができる。だから、出会った敵方が自分よりも強い相手だと、捕まらないうちに逃げ回らないといけない。こうして、先に敵方を全員捕獲したチームが勝ちである。

つかまつた捕虜は、相手の陣地の最も奥から順に手をつないで外に向かって伸びている。味方がそこに現れて、つないだ手を空手チョップの要領でばさつと切ると、切られたところから先にいた者は逃げ帰ることができる。アキさんは物陰に隠れながらそつと敵の陣地に近づいていき、一気に躍り出て捕虜を助け出すのを得意としていた。たいていは一番奥を切って、全員を助け出すのであった。

戦場は、狭い路地が迷路のように入り組んだ町内全体だ。しかも、子供らが移動するのは道路や路地伝いだけとは限らない。扉をよじ登ったり、人の家の庭を駆け抜けたりするのも、合法の行軍コースだった。

ぼくらはこのクチクが大好きで、季節くくの楽しい遊びが尽きたころには、必ずクチクをやった。アキさんもクチクが好きで、外からクチクの遊び声が聞こえてくると、いてもたってもいられないという顔で出てくるのだった。ただし、母親から外の強い日光を浴びて遊ぶことを禁じられていたのだろうか。夕暮れ時や曇り空のときにだけ、許されて出てきていたように、今になると思えるのである。

アキさんは他の遊び仲間と比べると、知性の輝きという点で、誰よりもはるかに抜きんでいた。アキさんと同い年の子も我々の中にはいたのだが、ぼくの目には明らかに格違いだった。

知性の輝きなんて言うと、大人の目から見た印象ではないかと疑われそうだが、そうではない。子供心にも、はっきりそれが感じられた。言葉遣い、行動、そして何よりもアキさんの頭に浮かぶ

アイデア。これらすべてがわれわれ遊び仲間への到達圏をはるかに越えていた。アキさんが思いつくことは、子供の域を突き抜けた「本物」であった。

ぼくはどうしようもなくアキさんにあこがれていた。クチクではいつもアキさんにくっついていた。アキさんもぼくを弟のようにかわいがってくれた。二人が帽子の向きを違えておけば、どういふ敵が現れても大丈夫だと、アキさんは教えてくれた。ただし、たとえば二人が帽子を前と横にしていたとして、そこに帽子を前にした相手が現れると、そのときには相手を倒すことはできないから、前が防いでおいて、その間に横が逃げるんだ、などと細かなことまで教えてくれた。

成り行きまかせで遊んでいた幼いぼくらは、誰一人として、そこまで知恵は回らなかった。その一事だけでも、アキさんの思考の世界にまばゆい輝きを見たのだった。

やがて時がたつと、アキさんはぼくらと遊ばなくなってきた。そんなある日、それはアキさんが中学二年生、ぼくが小学五年生の夏休みだった。ひよっこりアキさんが家にやってきた。あした城山に昆虫採集に行こうと言う。しかも弁当を持って。

唐突な誘いだった。それまで、アキさんからそんな誘いを受けたことは一度もなかった。天にも昇る心地がした。

城山は市の中心部にそびえる、高さ百数十メートルの、お椀を伏せたような山である。頂上には美しい天守閣があり、その昔、家臣たちの登城によって踏み固められた道が、東と西と南から、合わせて四本、山頂に向かっていく。

翌朝、アキさんがやってきた。二人は弁当と採集道具を手に、城山に向かった。東登山口（東雲口）までは、歩いてせいぜい十五分ほど。東雲口を少し登ったところに東雲神社と呼ばれる神社があり、神社から下ってくる真っ白な石段が緩やかなカーブを切って、白馬岳の雪溪のように麓までなだれ落ちている。

ぼくらにとって、ここは我が家の庭だった。秋になるとドングリ拾いに出かけ、袋がいっぱいになると、石段の縁石をスリル満点の滑り台にした。尻に大きな木の葉を敷いて、猛スピードですべりおろす。度胸を競いあううち、スピードはどんどんエスカレートして、怖さに顔を引きつらせながら、時を忘れて遊んだのだった。

アキさんは山の中腹まで来ると、登山道をそれ、きつい傾斜の藪に分け入った。腐葉土が積もった斜面を、一足一足、用心しながら下る。ぼくの知る城山は、もうそこにはなかった。鬱蒼と繁る木々が光を遮り、物音もない。湿っぽく腐ったような草いきれが満ちている。

ひよっとすると、ここがアキさんの気に入りの場？ アキさんはいつもここにやってきて、一人静かな時を過ごしているの？ ぼくはますますアキさんに魅せられた。

アキさんはしばらく様子をうかがっていた。そして、

「ほら、蝶が」

と小さく叫んだ。斜面の下方、上空がやや開けてスポットライトのように光が射し込んでいるあたりに、色鮮やかな蝶が舞っているのが見えた。

「ここにはいつも、あの蝶がいるんだ」

愛おしむような調子でつぶやいた。アキさんはじっと坐って見つめていた。ぼくも腰を下ろして、一緒に眺めた。清水も湧きだしているらしい。白や紫のきれいな花が咲き乱れていた。蝶はやわらかな光を浴びて蜜を吸い、いつまでもそこを離れなかった。

桃源郷のひそやかなひとときの後、アキさんは腰を上げた。柔らかな腐葉土にずぶずぶ足を踏み入れながら、もと来た斜面を這い上がった。頭上から人の話し声が届きはじめた。やがて最後の一足を踏みしめると、空が開けて、まぶしい夏の光が飛びこんできた。

山頂近くまでやってきた。アキさんはまたも本道はずれ、天守閣の裏手に回った。見上げるような石垣の陰。年中、直射日光から遮られている場所だった。

「よし、ここにしよう」

二人は採集道具を取り出した。日陰に舞う蝶やトンボ、草陰のバツタ、木の幹を這うカブトムシなどを時のたつのを忘れて採集した。バツタやカブトムシは虫かごに入れ、蝶とトンボは三角紙ではさみこんだ。三角紙というものを、ぼくはそのとき初めて知った。慣れた手つきで三角紙を扱うアキさんを、限らない尊敬と憧憬の目で見つめたのだった。

その日、アキさんはいつになく輝いていた。瞳がきらきら煌めいていた。アキさんのあんなにも生き生きと活動的な姿を、見たことがなかった。わずかな所作や言葉をも、ふるえる喜びで受け止めた。それらすべてを眼の裏に焼きつけながら、ひたすらアキさんの後を追ったのだった。

思えば今、夏のその一日は、時の流れから切り取られて胸の奥に大切にしまわれている、夢とも現ともつかない一幅の絵だ。土と埃と汗にまみれた子供時代の遊びの日々にあつて、その絵は、淡い彩りに浮かび上がった楼閣のよう。いつまでも色彩を失うことがない。

アキさんはその日を最後に、本当にぼくたちの目から消えてしまった。唐突にぼくを誘ったのは、遠い日々との別れの挨拶であったのだろうか。いつも一緒に行動し、敬愛の眼を向けていたぼくを誘うことよって、別れの儀式に具象の实感を添えようとしたのだろうか。

アキさんにとってこの別れは、少年期から青年期への脱皮の意志表示であったようにも思われる。

その一年半後、ぼくは幼友たちと別れて、遠方の私立中学に通うようになった。物心ついて以来はぐくんできた彼らとの友情は、日ごと疎遠になっていった。

その春、アキさんは県立高校に入学した。

ところが、一日一日がまだ入学による新奇な香りを失っていないところ、彼の家の前に、救急車が止まった。アキさんがあわただしく担架で運び出されてきた。うつぶせになり、苦痛に顔をゆがめて、もがいていた。それを遠まきに見つめたのが、命あるアキさんを目にした最後となった。

数日して、学校から帰ると、

「アキちゃんが亡くなったそうよ」

母がささやいた。言われても、実感が湧かなかった。いったい何が起こったというの？

アキさんとの間に、永遠に会うことのできない冷徹な一線が引かれてしまったと気づいたのは、夜も更けてからだった。

「もう会えないの？ これからの長い一生、アキさんとはもう会うことができないの？」

思いがぐっと胸に迫ってきた。巨大な、あまりに巨大すぎる喪失感だった。柱を抱いて思いきり泣いた。

「どこに行ってしまったの、アキさんは。いまだどこにいるの」

虚しく宙を引つ掻き、答えようのない問いを闇に向かって吐きかけ続けた。

アキさんとの煌めくような思い出が、渦をなして脳裏を巡った。そこでアキさんは、ずっと生き

続けていた。

「だのにもう会えないの？ 永遠に会うことができないの？ どうして？」

永遠という言葉を浮かべると、息苦しくってたまらなくなった。

もうこの世界のどこにもいないのか、アキさんは。ぼくの命が果てるまで、未来永劫、会うことはできないのか。激しい喪失感が噴水のように噴き上がってきた。拭っても拭っても、涙がぼろぼろこぼれ落ちてきた。

葬儀の翌日だった。学校から帰ったぼくに、母が言った。

「アキちゃんの家には鳩がやって来たそうよ。近づいても逃げないらしいの」

聞くと、ぴくっと体をふるわせ、表に飛び出した。次の瞬間、アキさんちの縁側にいた。ユウちゃんもしょんぼり座っていた。

一羽の鳩が庭の隅にしゃがんでいた。

お母さんが出てきて言った。

「今朝そこにいるのを見つけたのよ。寄って行っても逃げないの。餌をやったらおいしそうに食べて。これはきつとアキだよ。間違いなくアキだよ」

鳩をぼくは見つめた。鳩も羽をぶるっと震わせ、ぼくを見つめた。心の中でつぶやいた。

「アキさんだね。帰ってきたんだね。死んだりしてないよね。いつでも会えるんだね」

鳩は、クツクと鳴いて、またも羽を震わせた。鳩の声が聞こえた気がした。

「会えるよ、いつでも、心の中で、愛があればね」

目をつぶるとアキさんが、きらきらした笑顔で見つめていた。

鳩は一週間ばかり居着いて、飛び立った。もう戻っては来なかった。

■『ユース・コンパニオン』

英語はもう好きになれなかった。国語だと、文章を味わう楽しみがある。もちろん国語にも、漢字を覚えたり、言葉の意味を覚えたりする作業があるにはあるが、それよりも、文章を読み、楽しみ、自分でも文章を作るとい喜びが、国語にはあった。

ところが英語では、味わえる文章などというものは出てこない。短いやりとりを理解し、文法を覚え、単語を覚える。そうした機械作業だけが英語だとぼくには思えた。

何よりショックだったのは、夕方の教育テレビで英会話を聞いたときだった。内容は学校で習っているのと大して変わらない。だのに、まるで聞きとれない。授業では、先生が一語一語切り離して、聞きとりやすくしゃべってくれる。ぼくらはそれに合わせて、声に出して読む。それが英語のしゃべり方だと思いきんでいた。

ところがテレビの英会話では、しゃべりに途切れがなく、単語の区切りがさっぱりわからない。どうやってこれを聞きとれというのだ。こんなものわかるはずがないじゃないか。一瞬にして英語アレルギーを起こしてしまった。

母は女学校時代、英語が得意だったと言っていた。それで母に尋ねた。

「英語いうのは、こんなもんなん。早口でペラペラしゃべって、なんにも聞きとれんけど」

「母ちゃんもこんなのは習ってないんよ。本物の英語を話したり聞いたりするのは習わなんだ。英語は本を読むだけだった。読むだけなら、単語をたくさん覚えて、文法を知ってたら、なんとか

なるけんね。こんなテレビの英語は母ちゃんにもさっぱり聞きとれん」

「ふーん、そうなん」

「だけど今のところは、読めるようになったらそれでええんじやないの。だんだん慣れてきたら、テレビみたいな英語もそのうち聞きとれるようになると思うよ。心配せんで、今は学校で習った単語をちゃんと全部覚えるようにしたらええんよ」

そして翌日、ざら紙の束を買ってきてくれた。

「単語を覚えるときには、ノートにきちんと書いたりせんでも、こんなのに書いたらええけんね。何遍でもいっぱい書いたらええ。そして、書くだけじゃのうて、口に出して言いながら覚えるんよ」

こうしてぼくも母と同じで、本物の英語からは切り離された。本物を聞いたりしゃべったりするのはとても無理。それはあきらめて、読んで書いたらそれでいい。そういう世界だ。それを英語だと自分で自分に言い聞かせた。

覚えているうち、だんだんと、読みと綴りには規則性らしきものがあると気づいてきた。いちいち単語を「ティーアイエムイー、タイム、時間」などと言いながら覚えなくても、「タイム、時間」と言いつつ単語をざら紙に書いていけば、綴りは読みから自然に規則的に書けることがわかってきた。

中には規則性が当てはまらない特殊なものもあった。最初に出てきたその種の単語が beautiful だった。これに対しては、綴りの方は「ベアウチフル」と覚え、読むときは「ビューティフル」と覚えた。

それにしても英語は、文章を味わい楽しむよりも、ただ覚えるだけの方が多かった。いつまで経っても、芯から好きにはなれなかった。

中三のころ、新聞広告で見たと言って、母が英語の『リーダーズ・ダイジェスト』と『ユース・コンパニオン』をとってくれるようになった。本屋に行かなくても、毎月送ってきてくれた。これは学校の読本よりもはるかに実的で、楽しかった。辞書を引き引き読んだ。初めて英語に親しむことができた。

後に『大草原の小さな家』シリーズを原書で読んだとき、ローラの家にも東部からときどき『ユース・コンパニオン』が送られてきたとあった。それを一人が口に出して読み、残りの家族が耳で聞いて楽しんだという。何だかちょっと懐かしい気分になったのだった。

■クラス文集

中一のクラス担任は、「春の海ひねもすのたりのたりかな」のS先生だった。「のたりのたり」がそのままではまりそうな、のんびりとしたおだやかな先生で、ときおり発するサビの効いた余談が子供たちの心を捉えるのだった。ぼくは捉えられた一人であった。先生の魅力に引きこまれていった。

自分から先生に質問することなど、小学校時代はもちろんのこと、A学園での六年間を通して、ほぼありはしなかったと思うけれども、S先生だけは例外だった。前日の復習の際、気になった点に赤鉛筆で印をつけておく。古文の文法的な構文のこともあれば、言葉の余韻というか、味わいに関することもある。授業が終わって、先生が教室を出ようとする瞬間に質問するのだった。

その質問に、光が鏡に反射するように即座に答えが返ってくることはまずなかった。一瞬の間が

あった。先生もやはり考えるのだ。答えられないのではない。即座に答えようと思えばいくらでも答えられる。だが、それでは当たり前すぎて面白くないと考えた先生は、一瞬の間を置くのだ。そして、予想になかった、一段も二段も高い地点から思わぬ答えを返してくれる。それが楽しかった。ぼくの思考回路を突き抜けた、思わぬ回路がこの世界にはあることを教えてくれた。

数学ならば、途中の道筋に斬新な発想が発見されても、行き着くゴールは必ず一つだ。それが数学というものの不思議であり、面白みであり、凄みであり、ときには新しい理論の入口にもなるのだが、国語の場合には、筋道ごとに行き着くゴールが異なっている。少なくともぼくにはそう見えた。正しい結論が一つしかないとは思えなかった。多彩に見えた。それが先生に質問し、先生から答えを得る楽しみであり、喜びだったように思われる。

S先生は、若いのか若くないのか、よくわからない先生だった。明らかなのは、すでに結婚していて、小さな子供がいることだった。余談のはしくれから、それはわかった。

面白かったのは、気づかぬうちに子供が左利きになっていったというもの。左利きが悪いというのではないが、当時は左利きになると、無理にでも右利きに矯正する時代であった。そのストレスから、子供が精神不安におちいることさえあったのである。

先生は左利きを認めた上で、矯正するよりも、いっとうして左利きになったのかと考えた。そして思い当たったのが鏡の原理だった。

いつも子供と向き合って食事をしながら、箸や茶わんの持ち方を教えていたという。先生の食べ方を、ちゃぶ台の向こうにいる子供から見ると、まさに鏡映原理。箸は左手で、茶わんは右手で持っているのだった。それをそのまま真似た子供は、いつしか左利きになったというのである。

本当だろうか。その前に先生は気づくはずではないか。などというのは馬鹿げた正統論。そう、正統論はたいていの場合、いつでも馬鹿げているのだ。面白くもなんともない。新味ある発想も発見もなく、はつきり言って腐っているのだ。

やはり先生の言葉の通り、ふと気づいたら、子供は鏡の原理に従って、左利きになっていた。それでよいのだ。

先生は労苦を労苦と思わなかった。教育熱心だった。夏休み、中一生は瀬戸内海の小さな島に林間学校に出かけるのが長年のならいだった。しかも、宿泊させてもらう島の学校が小さいために、一度に全員が宿泊できず、二班に分かれて、三日間ずつ合計六日間という、長期の学校行事になっていた。ぼくは後半の班に入れられた。

島に着くと、S先生は先着していて、

「おれは前の班から、もう三日もここにおるぞ。君らを入れると六日間になる」
平然と言われた。びっくりした。

何もないこんなところに六日もおったら、牢屋に閉じこめられたみたいに、気が狂いやせんじゃろか。とっさにいらぬ心配までしてしまったのだった。

まさしく牢屋のように、先生は生徒の寝室である教室で皆を寝かせるときには、自分も一緒に大きな蚊帳の中に入って寝るのだった。他の先生が別の部屋で小宴会を楽しんでいるらしき声が聞こえてくるというのに……。

S先生はぼくらと一緒にいるのを、苦痛というより、楽しんでいるようにさえ見えたのだった。年度末が近づいた冬休み明け、S先生は生徒らのためにクラス文集を作ろうと思立った。いや、

思い立ったのは十二月であって、生徒らに冬休み中に何でもよいから作品を一つ書いてくるようにと命じたのだった。その作品を集めて編集作業に入ったのが冬休み明けであった。

文集編集委員をつのった。ぼくもその一人となった。だが、熱心な編集委員とは言えなかった。当時の日記を読むと、それが明瞭に伝わってくる。

放課後、講堂の大掃除を終えて、クラス文集の製本のためにすぐ教室へ行こうと思ったが、剣道の練習を少し見てから行ったため、教室へ行ったときにはもう誰もいなかった。しかたないので、少し教室で待っていた。このときは悲しかった。同じ編集委員であるU君のカバンが机の上に置いてあったからである。

いくら待っても誰も帰って来ないので、「下へ自転車でも取りに行つて、帰る用意をしておこう。そのうち何とかなるだろう」と思って、自転車で朝礼台の所へ来ると、Y君が「みんなが待ちよつたぞ」と言ったので、「教室へ行ったら、誰もおらんのだのに」と言うと、「それなら職員室へ行ってみんけんよ」と言ったので、行ってみようかと思つたが、まあええわいと思つてバスケットをしていたM君らと一緒に遊んでしまった。

遊んでいると、U君が自転車置き場からこちらへ来たので、何か言うのかなと思つていると、そのまま向こうへ行つてしまった。

この日の放課後は製本をしているみんながどこかの窓からぼくをじろじろ見ているような気がして、何となく心が晴れ晴れしなかった。

「そのうち何とかなるだろう」とか「まあええわい」。これはぼくを支配していた無責任な気分の象徴だった。面倒なことに遭遇すると、やるべきことを勝手に投げ出して楽な方へと流れてしまう。これは無責任というより、内に潜む弱さそのものだった。

すぐに教室に戻るべきところを、「剣道の練習を少し見てから」。これは小学三年生のときの「チンネンさん」の大失敗とまったく同じだ。四年経つても何も変わつてはいない。あきれてしまう。それから十五年後、今度は同僚という立場でS先生とつき合うことになった。同僚であった間、ずいぶんさまざま学ばせてもらった。さらに十数年を経て、S先生は定年のときを迎えたのだった。

机の引き出しを整理していた先生が、突然思わぬものを見せてくださった。

その日、次のように日記に記している。

S先生が机の引き出しの底から中一のときの文集を発見し、

「奥村君、こんなものがあつたよ」

と、見せてくださる。三十二年も昔のものだ。先生独特の丹念な字で書かれ、とてもガリ版刷りとは思えない。まるで活字だ。

僕は「子安とおいはぎ」という短編小説めいたものを書いてきた。そういえばそういうものを書いた覚えがあるなど、記憶がよみがえつた。

読んでみた。出だしはなかなかうまい。どこかの小説を引き写したのではないかと思えるくらいだ。しかし、結末はあつけない。あとに残る響きがない。悪者を捕まえた、それだけのこと。十二歳の少年の思考というのはこの程度なのか。

中には目を見張るものもある。精神的な成長の違いであろう。テーマを絞り、表現力も驚くほどすぐれたものがある。E君のは大したものだ。小学生時代から今に至るまでの家庭内のさまざまな出来事が実に生き生きと描かれている。入学試験でトップ。その後もしばらくトップを

競い続けた生徒だ。たしかにそれだけのことはある。

彼がその後、生活面でも精神面でもぐれてしまい、処罰を何度も受けた末に、結局、まとも
に卒業できなかったというのは不思議でならない。

S先生にあのとき見せてもらった中一の文集、どこかにありそうに思えて、何度も家の中を探し
てみるが、いまだに見つからない。人生のどこかで紛失したようだ。

■生まれて初めての劇

小学校の六年間、学芸会で劇というものを一度もやったことがなかったし、実際、他人になりき
って演じることのできない自分であることは、たった三人の観衆を前にして「鞍馬天狗だあ」とき
え言えなかったことから、よくわかっていた。

そんなぼくが、中学三年のクリスマス、なんと劇に挑戦したのだった。

当時の日記から経緯をあぶり出してみる。

一九六二年十二月十三日

放課後、今度のクリスマス祝会で行う劇の配役をきめる会をした。出演者は全部で十四人。

僕はひつじ飼いの役に手を上げた。どういうことをしたらいいのかはわからないが、前々から
劇でもあったらやってみたいなと思っていたので、やってみることにした。

そのときは軽く引き受けてしまったが、これまで劇は全然やったことがないので、うまくで
きるかどうかは疑問である。しかし、できるだけのことはやってみるつもりである。

引っ込み思案一筋で来たぼくが、人生の分岐点を迎えているらしい。それにしても、いつもはお
となしく教室の隅っこに引っ込んでいる奴が手を挙げたと、他の生徒らは驚愕、仰天だったので
なからうか。とはいえ、それをしらけた空気感なしに受け入れてもらえる程度の友人関係はでき
ていた。多少とも脱皮したぼくの精いっぱい存在感だった。

十二月十五日

放課後の掃除がすんでから、劇の脚本の読み合わせをした。題は『宿に客なし』。台本は英語
のT先生が書き、指導もT先生だ。キリストが誕生するときの宿屋、馬屋を舞台にしたもので
ある。

僕はひつじかいの役であるが、しゃべるところはニヶ所しかなく、非常に簡単である。とこ
ろが、いざ読み合わせをしてみると、なかなかうまく感じが出せず、劇のむずかしさを痛感し
た。そして一番たくさんしゃべらないといけない、宿屋の主人になったK君の言い方のうまい
のに驚かされた。しかし帰ってテレビで舞台劇などを見てみると、K君程度なら簡単にできる
だろうなと思ったりもしたのだった。

人のうまいのに感嘆しつつも、なかなか参ったと言わない。

十二月十七日

一時間目の国語の時間、僕等の組が少し早く進みすぎているので、途中からT先生が来て、
劇の読み合わせの練習をした。今までは思うようにうまくしゃべれなかったが、今日はかなり

よくできたと思う。しかし、なんと言ってみしやべるところが少ないんだから、うまくしゃべれたの、しゃべれなかったのと言うほどのことでもない。それでも少しは感情をこめて話すのに慣れてきたように思う。

徐々に劇の世界に入りこんでいる。

十二月二十日

放課後、講堂でクリスマス祝会の劇の練習をした。もうみんなせりふを覚えてきているので、比較的スムーズにいった。舞台でやったので、教室で読み合わせをしているときは感じも大部違っていたが、見物人がいないので、上がったたりすることはなく、自分としてはかなりよくできたと思う。しかし、本番で今日のようにできるかどうかはわからない。

舞台での初めてのリハーサルだ。立ち位置や、動き、表情などはこのとき初めて指導されたのを覚えている。ますます配役の一人になりきっていく。

十二月二十三日

クリスマス祝会は十二時半から始まるのだが、僕らは最後の練習のため、十一時頃学校に行き、始まる前に一度練習をした。それから将棋などをして教室で始まるのを待っていると、十二時過ぎにマイクで講堂に入るように指示があった。

始まると、客席は暗くなり、舞台だけが明るくなった。

他人がするのを見ているときは、自分もあそこへ立たないといけないのか。その時はあがってしまいうのではなからうかなどと思ったりもしたが、すぐにそういう思いは消えてしまっただけで、反対に飛び入りの時に、一人で舞台上で歌でも歌ってみたいなあと考えたくらいであった。

僕の番が来て、舞台上に立つと、客席は暗くて何も見えず、ライトだけが顔にあたってまぶしくらいであった。しかしあがるということにはなかった。よくできたかどうかはわからない。必死にやっているうちに終わってしまった。

毛布をマント代わりにひっかぶった羊飼いの自分が、ありありと思い出される。夜空に輝く星を見上げて、キリストの誕生を知らせる言葉を発したのだったろうか。

突拍子もない拳手から無理やり自分を劇の世界へと追いやったばかりだったが、これが自己嫌悪や、新たな劣等感を生まなかったのは、奇跡であった。成長の階段を一段這い上がる経験になったのは、さらに不思議な奇跡であった。

これで子供時代は終わりを告げた。

高校・大学時代は割愛し、続いて、大学卒業時から始まる『でこぼこだらけの道1』に続く。